殿原遺跡

店舗建設に先立つ埋蔵文化財
包蔵地緊急発掘調査報告書

1992. 3

長野県飯田市教育委員会

殿　原　遺　跡

店舗建設に先立つ埋蔵文化財
包蔵地緊急発掘調査報告書

1992. 3

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市伊賀良地区は飯田市街地の南西部、笠松山系東麓に位置し、南側は山本・三穂地区、東側は松尾・竜丘地区、北側は鼎地区に接しています。笠松山麓からは広大な扇状地が展開しており、古代東山道育良駅比定地が地区内に求められる等、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を遺している地域のひとつです。先人達がとどめた足跡は縄文時代早期以来各所に刻まれており、縄文時代中期以降大規模な集落が多数営まれています。古代には地区内北方に条里が敷かれたともいわれ、古代末には荘園が設置されています。中世においては北条江馬氏の地頭代四条金吾が「とのおか」に居を構えたとされ、また、後半には松尾城に拠った小笠原氏の勢力伸長の基盤となる等、重要な役割を果たした地域のひとつといえます。

一方、伊賀良地区は中央自動車道西ノ宮線や一般国道153号・同飯田バイパスが通過しており、主要幹線が集中しているところです。また、近年飯田旧市街では事業所や住宅が飽和状態にあり、周辺地区の道路環境が整備されるにつれて、市街地が急速に周辺に広がりつつあります。この伊賀良地区においても、飯田バイパス沿線への店舗・事業所等の進出が相次いでおり、また土地区画整理事業が実施された北方地籍などでは住宅が次々に新築されています。この度の開発も市街地拡大の一環にあります。飯伊地方の経済活動の振興を考えますとこうした開発も是認すべきといえ、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることも次善の策ではありますがやむを得ないものといえます。

これまで殿原遺跡では、この度の調査地点に隣接する一般国道153号飯田バイパス路線内の調査で、弥生時代後期の大集落が調査されています。今回の調査ではこの集落がどこまで広がるか、また、初期の農耕集落がどんな様子であったかが明らかにされることが期待されたわけであります。調査の結果は本書のとおりでありますが、これまで周辺で積み重ねられてきた調査成果にさらに重要な知見が加えられたわけで、地域の歴史解明が進むものと確信いたします。

最後になりましたが、文化財保護の本旨に厚いご理解を賜った株式会社カインズならびに地元の皆様、現地作業・整理作業に従事された作業員の方々に深甚なる謝意を申し述べる次第であります。

平成4年3月

飯田市教育委員会
教育長　　小林恭之助

例　言

1．本書は株式会社カインズの店舗建設に伴う飯田市上殿岡561番地１ほかの埋蔵文化財包蔵地殿原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は開発主体者である株式会社カインズの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．調査は、平成２年６月29日～９月30日に現地調査を実施し、続いて平成３年度中に整理作業及び報告書作成作業を行った。

4．今次調査地点は一般国道153号飯田バイパス路線内の調査地点と近接しており、一続きの遺跡と考えられることから、連続する遺構番号を付した。

5．発掘調査および整理作業においては、一貫して遺構略号ＴＮＨに店舗敷地の中心地番の573を付して使用した。

6．本報告書の記載については、記載順は住居址を優先し、時代順を原則とした。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。

7．本書は、馬場保之が執筆し、本文の一部について小林正春が加筆・訂正を行った。

8．本書に掲載された図面類の整理、遺物実測、写真撮影は馬場があたった。なお同作業実施にあたり佐々木嘉和・佐合英治・吉川豊・澁谷恵美子が補佐した。

9．本書の編集は馬場が行い、小林が総括した。

10．本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さ（単位cm）を、また網掛け部分はいわゆるロームマウンドを表している。

11．本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕は図内に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で、節理面は斜線で、ロー状光沢物付着部分は網掛けで示した。

12．本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本 文 目 次

序
例言
目次
Ⅰ 経 過 1
1.調査に至るまでの経過 1
2.調査の経過 1
3.調査組織 2
Ⅱ 遺跡の環境 3
1.自然環境 3
2.歴史環境 4
Ⅲ 調査結果 8
1.遺構と遺物 8
(1) 竪穴住居址 8
1）縄文時代中期 8
①103号住居址
2）弥生時代後期 9
①101号住居址 ②102号住居址 ③104号住居址
(2) 掘立柱建物址 13
① 掘立柱建物址 9
(3) 土坑 13
① 土坑 156 ② 土坑 165 ③ 土坑 166 ④ 土坑 168
⑤ 土坑 171 ⑥ 土坑 172 ⑦ 土坑 175 ⑧ その他の土坑群
(4) 竪穴 17
① 竪穴 2
(5) 囲溝址 17
① 囲溝址 5
(6) 溝址 17
① 溝址 3 ② 溝址 4 ③ 溝址 5 ④ 溝址 6 ⑤ 溝址 7
⑥ 溝址 8 ⑦ 溝址 9 ⑧ 溝址10～21・26・27 ⑨ 溝址22
⑩ 溝址23 ⑪ 溝址24・25 ⑫ 溝址28

(7) 溝状址 28
① 溝状址 1　② 溝状址 2～13
(8) 柱列址 28
① 柱列址 2
(9) 集石 29
① 集石 3
(10) 井戸 30
① 井戸 1
(11) その他 30
① 柱穴群
② 遺構外出土遺物
Ⅳ まとめ 33

挿 図 目 次

挿図 1　調査遺跡および周辺遺跡位置図 5
挿図 2　調査位置および周辺地図 7
挿図 3　103号住居址 8
挿図 4　101号住居址 9
挿図 5　102号住居址 10
挿図 6　104号住居址 12
挿図 7　掘立柱建物址 9 13
挿図 8　竪穴 2 17
挿図 9　囲溝址 5 18
挿図10　溝址 4～7・9・28 22
挿図11　溝状址 1 27
挿図12　集石 3 29
挿図13　井戸 1 30

付 図 目 次

付図 1　殿原遺跡遺構全体図
付図 2　溝址 3・10～22・24～27、溝状址 2～13
付図 3　溝址 8・23

付図4　柱列址2
付図5　土坑・周辺柱穴平面図 (1)
付図6　土坑・周辺柱穴平面図 (2)
付図7　土坑・周辺柱穴平面図 (3)
付図8　土坑・周辺柱穴平面図 (4)
付図9　土坑・周辺柱穴平面図 (5)

図 版 目 次

第1図　103・101・102号住居址出土遺物　40
第2図　102号住居址出土遺物　41
第3図　102号住居址出土石器　42
第4図　104号住居址・土坑 165出土遺物　43
第5図　土坑 165・166・171出土遺物　44
第6図　溝址3出土土器　45
第7図　溝址3出土土器　46
第8図　溝址3出土土器　47
第9図　溝址3出土石器　48
第10図　溝址3・8～10出土遺物　49
第11図　溝址11・12出土遺物　50
第12図　溝址14・16・17・20・21出土土器　51
第13図　溝址21～23出土遺物　52
第14図　溝址23～25、溝状址2、柱列址2出土遺物　53
第15図　遺構外出土土器　54
第16図　遺構外出土石器　55
第17図　土坑 165出土石器、遺構外出土石器・金属製品　56

写 真 図 版 目 次

図版1　遺構分布状況
図版2　遺構分布状況
図版3　103号住居址　同炉断面　102号住居址
図版4　104号住居址　掘立柱建物址9
図版5　土坑群

図版 6　囲溝址 5　溝址 3
図版 7　溝址 3～6
図版 8　溝址 8・23　柱列址 2
図版 9　集石 3　同断面
図版10　103・101・102号住居址出土遺物
図版11　102・104号住居址出土遺物
図版12　土坑 165出土遺物
図版13　土坑 171出土遺物
図版14　溝址 3 出土遺物
図版15　溝址 8・9・11・12出土遺物
図版16　溝址21～23出土遺物
図版17　遺構外出土遺物
図版18　重機作業風景
図版19　発掘調査風景　職場実習風景

Ⅰ 経　過

1.調査に至るまでの経過

殿原遺跡は飯田市伊賀良上殿岡地籍に所在する。

群馬県伊勢崎市富塚町 459番地　株式会社カインズ代表取締役土屋嘉雄より、飯田市伊賀良上殿岡地籍での店舗建設について、埋蔵文化財発掘調査に関する協議依頼書が提出された。計画地は一般国道 153号飯田バイパス沿線に位置し、バイパス開通以降開発が進展しつつある地域の一画にあたる。また、道路環境が整備されつつあることや旧市街地での事業所・住宅の過密化に伴い、土地区画整理事業が施行された北方地籍をはじめ、周辺では急速に宅地化が進行している。こうした状況を背景に、大規模な郊外型の店舗が計画されたわけである。

一方、当該地は埋蔵文化財包蔵地殿原遺跡の一画に位置し、バイパス建設に先立ち緊急発掘調査が実施された地点に隣接する。調査の結果、90軒にのぼる竪穴住居址や方形周溝墓等の弥生時代後期の大集落と、縄文時代中期から中世にかけての多数の遺構・遺物が検出されている。計画地においても濃密な遺構・遺物分布が予想され、殊に弥生時代後期の集落の全容がある程度把握されると判断された。

そこで、協議依頼書に基づいて、長野県教育委員会文化課に担当職員派遣を申請し、関係者の立会いの下、現地協議を実施した。その結果、文化財保護の立場からすると現状保存が望ましいが、事業の性格や周辺に及ぼす波及効果等考慮するとその建設は止むを得ず、事前に発掘調査を実施して完全な記録保存を図る必要があるとの県教委の回答がなされた。諸協議に基づいて、平成２年５月30日、株式会社カインズと飯田市教育委員会との間で発掘調査に関する委・受託契約を締結した。

2.調査の経過

発掘調査に関する委・受託契約に基づいて、平成２年６月29日現地調査に着手した。建物部分全体と駐車場造成に伴い切り土される部分について重機により表土除去を行ない、７月11日から作業員による調査を開始した。調査区全面にわたって竪穴住居址ほかの遺構が分布しており、これらについて検出作業に続いて掘り下げを行なった。航空測量・補足の測量調査、遺構の全体写真撮影を行なった後、８月17日より重機により排土の移動・表土除去を行ない、残り半分の調査に着手した。同様の作業工程を経て、９月12日作業員による作業を、また９月30日委託した測量調査を終了し、現地調査を切り上げた。

現地調査期間中にあっては連日猛暑が続き、さらに大規模な溝址３の掘り下げ中は出水が相次ぎ溝址の大半が水没する等、調査は困難をきわめた。また、７月20日には飯田市立飯田西中学校

2年生による職場実習を受け入れ、5名が調査に参加した。

その後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理作業、出土遺物の水洗・注記・接合・復元等整理作業および報告書作成を平成3年度にかけて行なった。

3.調査組織

1）調査団

調査担当者　小林正春

調　査　員　佐々木嘉和・佐合英治・吉川　豊・馬場保之・澁谷恵美子・小島孝修

現場作業員　今村春一・片桐信吉・木下　傳・木下当一・窪田多久三・坂下やすゑ
清水三郎・高木義治・高橋収二郎・豊橋宇一・中平隆雄・福沢トシ子
細田七郎・正木実重子・松下成司・松下直市・松下真幸・松島卓夫
森　章・森　信子・矢澤博志・吉川正実

整理作業員　池田幸子・伊原恵子・大蔵祥子・金井照子・金子裕子・唐沢古千代
唐沢さかえ・川上みはる・木下早苗・木下玲子・櫛原勝子・小池千津子
小平不二子・小林千枝・斉藤徳子・佐々木真奈美・渋谷千恵子・田中恵子
筒井千恵子・丹羽由美・荻原弘枝・林勢紀子・原沢あゆみ・樋本宣子
平栗陽子・福沢育子・福沢幸子・牧内喜久子・牧内とし子・牧内八代
松本恭子・三浦厚子・南井規子・宮内真理子・森　信子・森藤美知子
吉川悦子・吉川紀美子・吉沢まつ美・若林志満子

2）事務局

飯田市教育委員会社会教育課

竹村隆彦　（社会教育課長、平成2年度）
安野　節　（社会教育課長、平成3年度）
中井洋一　（　〃　文化係長）
小林正春　（　〃　文化係）
吉川　豊　（　〃　〃　）
馬場保之　（　〃　〃　）
篠田　恵　（　〃　〃　）
澁谷恵美子（　〃　〃　、平成3年度）

Ⅰ　遺跡の環境

1.自然環境

伊賀良地区は飯田市西部にあり、飯田市街地の南西に位置する。北側は鼎地区、東側は松尾・竜丘地区、南側は山本・三穂地区に接する。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。伊賀良地区の場合、西側と東側で大きく地形が変化している。西半は中央アルプスの前山である笠松山（1271m）・高鳥屋山（1397m）東山麓にあたり、飯田松川・茂都計川をはじめ、笠松山・高鳥屋山から流れ出す入野沢川・南沢川・滝沢川・新川等の河川によって形成された広大な扇状地が広がる。扇端はおおむね北方地籍では新井付近、大瀬木で伊賀良小学校付近、中村の長清寺付近であり、これより西側は傾斜の比較的急な斜面となっている。扇端の一部は前述の線を大きく越えて東側に伸びており、下殿岡地籍まで達するものもある。扇端付近では通例の如く湧水が豊かであるが、この扇状地が小河川により幾重にも複合して形成されているため、比較的湧水に恵まれ、今日でも横井戸を利用している住宅がみられる。扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は現在は堆積作用より下谷作用に転じているが、浸蝕力は弱く、解析谷の規模は比較的小さい。これに対し、地区の東側は基本的には高位の段丘面を占めており、扇端から離れるほど地下水位が低くなる。古代末以来、この高燥な地帯への井水の開削が繰り返し行なわれ、大井をはじめ多くの井水が開けられている。同時に地区内の大小河川には人為的な改変が加えられ、例えば、南沢川の場合、もともと南側のアマズラ沢に流れていたのを、新川続いて大井に引かれ、江戸時代には毛賀沢川に落とされている。

殿原遺跡が位置している上殿岡地籍は、笠松山麓から発達した扇状地が終息し段丘面に移行する付近にあり、北側を毛賀沢川、南側をアマヅラ沢に画されている。遺跡の北側は毛賀沢川に接し、バイパス路線内では蛇行する毛賀沢川の氾濫堆積を被っている部分がある。南側は笠松山麓から下殿岡まで伸びる尾根状部分にあたり、その高所を大井が通っている。こうした微地形からすると、遺跡の南および東側一帯の水利の悪い地帯に展開する畑作と、毛賀沢川に臨む肥沃な土地を利用した水田経営が本遺跡の弥生時代集落の主な生産基盤であったことは想像に難くない。また、古代末以降にあっては、大規模な井水の開削により飛躍的に生産力が増大した地域といえる。

2.歴史環境

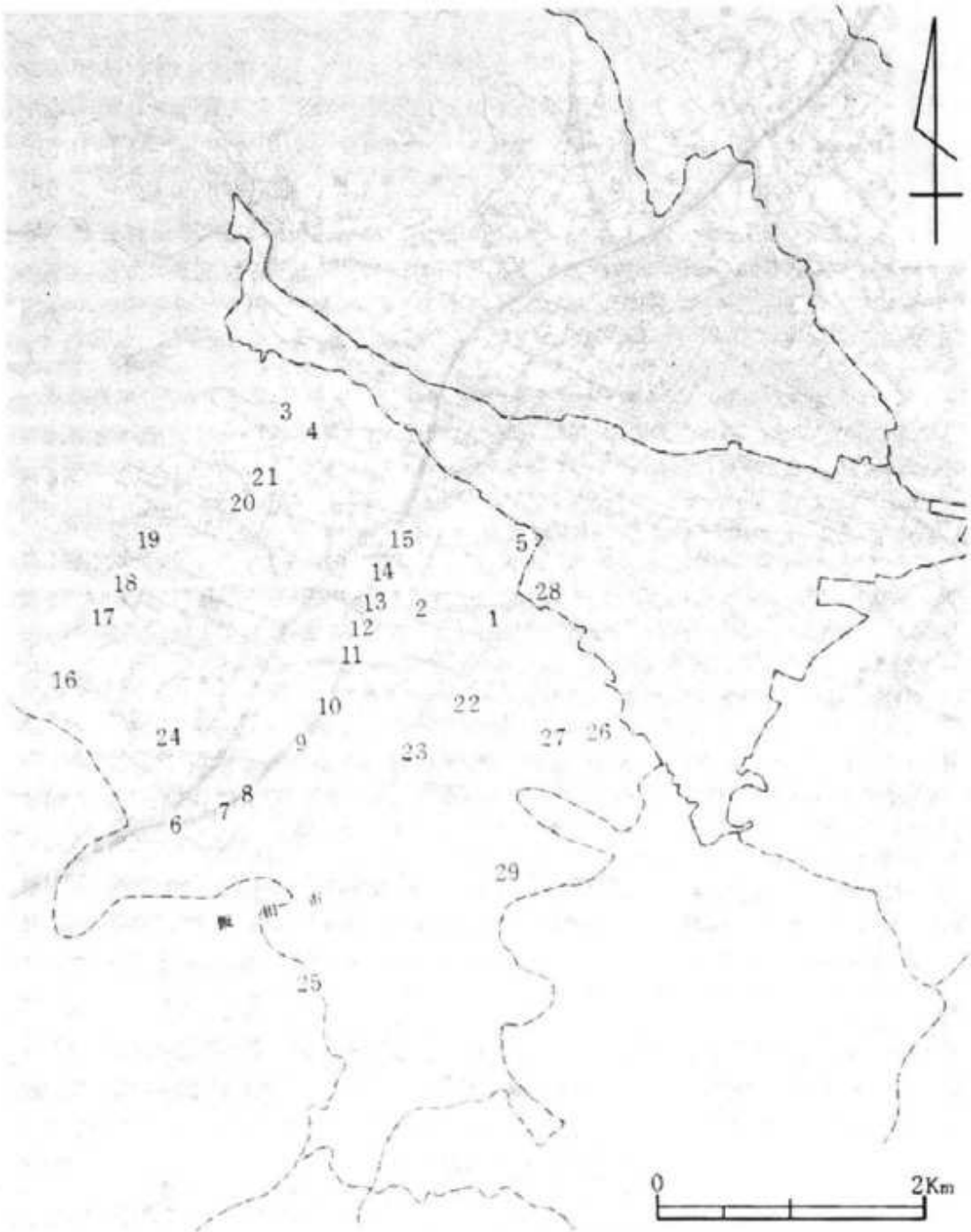
伊賀良地区は埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、学術調査による立野・山口・西の原各遺跡、中央自動車道建設にかかる与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外（辻垣外）・三壺渕・上の金谷各遺跡、一般国道153号飯田バイパス建設にかかる殿原・八幡面・小垣外各遺跡、広域農道西部山麓線建設にかかる飯田垣外・火振原・梅ヶ久保・細田北・大原・直刀原各遺跡、諸開発に伴う中島平・宮ノ先・酒屋前・鳥屋平・下原・高野・公文所前等の各遺跡がある。こうした文化財に表われた先人達の足跡は縄文時代早期までさかのぼる。立野遺跡や山口遺跡といった縄文時代早・前期の遺跡は主に笠松山麓の比較的標高の高い所に立地している。前期終末では辻垣外・殿原遺跡等扇状地の扇端付近の遺跡で竪穴住居址が調査されている。中期の遺跡は伊賀良地区の広範に分布しており、中央自動車道・西部山麓線路線にかかる扇状地上の諸遺跡や下原・公文所前といった段丘上の遺跡がある。殊に下原遺跡では該期の中心的役割を果たしたと考えられる大集落の一画が調査されている。後期になると断片的な資料ではあるが、酒屋前・辻垣外・殿原遺跡で遺構・遺物が確認されている。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。これまで調査された遺跡としては大東・上の金谷・酒屋前・滝沢井尻・宮ノ先・中島平遺跡等がある。該期の集落展開としては、扇状地末端の湧水線および西方前山から東流する大小河川を利用した水田経営と高位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。本遺跡ではこれまで90軒にのぼる竪穴住居址が調査される等大規模な集落が営まれていたことが判明している。毛賀沢川に臨んだ水田経営と遺跡東方の高燥な台地上に展開する畑作を背景として集落が成立していたと考えられる。また、細田北遺跡では標高 900mを超える高所から３軒の竪穴住居址が発見されており、人口の爆発的な増加とこうした高所にまで生産基盤を拡大するまでに至る生産技術向上を看取できる。

古墳は伊賀良地区では52基が確認されているが、現存するものは９基にすぎない。隣接する竜丘・松尾地区に比べ数も少なく、いずれも規模の小さい円墳である。また、同時代の集落址の調査例は少なく、前期後半の上の金谷遺跡、後期の三壺渕・中島平遺跡が調査されているのみである。遺跡数も前時代に比べると著しく減少しており、湧水・湿地を控えた集落の展開が考えられるが、なお詳細は不明といわざるを得ない。しかし、地区内北方地籍には条里が敷かれたとも指摘されており、水田経営の定着した姿を想定することができよう。

奈良時代においては、古代東山道の経路および「育良駅」の推定地や、荘園を構成する村落の起源等に関連すると思われる箇所が地区内にあり、具体的な遺跡の調査例はないものの、重要な役割を果たした地区ということができる。

平安時代末期には伊賀良庄の名が文書に登場する。そのなかには中村・久米・川路・殿岡が含



1 殿原遺跡　2 小垣外・八幡面遺跡　3 立野遺跡　4 山口遺跡
5 西の原遺跡　6 与志原遺跡　7 上の平東部遺跡　8 寺山遺跡
9 六反田遺跡　10 大東遺跡　11 酒屋前遺跡　12 滝沢井尻遺跡
13 小垣外(辻垣外)　14 三壺淵遺跡　15 上の金谷遺跡　16 飯田垣外遺跡
17 火振原遺跡　18 梅ヶ久保遺跡　19 細田北遺跡　20 直刀原遺跡
21 大原遺跡　22 中島平遺跡　23 宮ノ先遺跡　24 鳥屋平遺跡
25 高野遺跡　26 下原遺跡　27 公文所前遺跡　28 田井座遺跡
29 土器洞窟跡

挿図1　調査遺跡および周辺遺跡位置図

まれることが文献等により明らかにされており、当地区がその中心的な位置を占めたことが考えられる。当地区における大規模な井水開発の歴史は、この時代にはじまるともいわれている。後述のとおり、殿原遺跡の今次の調査結果はこうした説をある程度裏付けるものといえる。一方、これまで実施された発掘調査の結果、六反田、滝沢井尻・小垣外・三臺渕・上の金谷・宮ノ先遺跡で集落址の一部が調査されている。伊賀良庄の成立がどこまで遡るかは不明であるが、この時代の集落が前時代よりも増加することは、この地区の開発が一段と進んだ証左であろう。また、この時代には三日市場地籍に須恵器を生産した土器（かわらけ）洞窯跡があり、ここで生産された須恵器が下伊那全域に分布するなど、手工業生産の発達がみられる。

中世においては鎌倉時代には北条時政が伊賀良庄地頭であり、以後一族の江馬氏がこれを継いだ。江馬氏の地頭代四条金吾頼基は「とのおか」の地に居を構えたとされ、現在の殿岡にあたるかはともかく、地区内にあったことは疑いない。北条氏の滅亡後、信濃守護職小笠原氏は伊賀良庄を与えられ、その下で伊賀良地区の開発は急速に進んだとされる。地区内の井水の大半はこの時代の開発と考えられ、小笠原氏の勢力伸長の基盤として当地区が大きな役割を果たしたといえる。室町時代中期以降、小笠原氏内訌に伴い松尾城・鈴岡城の支城が各地に築かれ、地区内には下の城跡・桜山城跡がある。

以上、各時代について概観したが、古来飯田下伊那で重要な役割を果たした地区ということができる。こうした歴史の脈絡の中で、今次発掘調査の成果がどのように位置づけられるかは本書の内容により明らかにされるといえる。

挿図2　調査位置および周辺地図

Ⅲ　調査結果

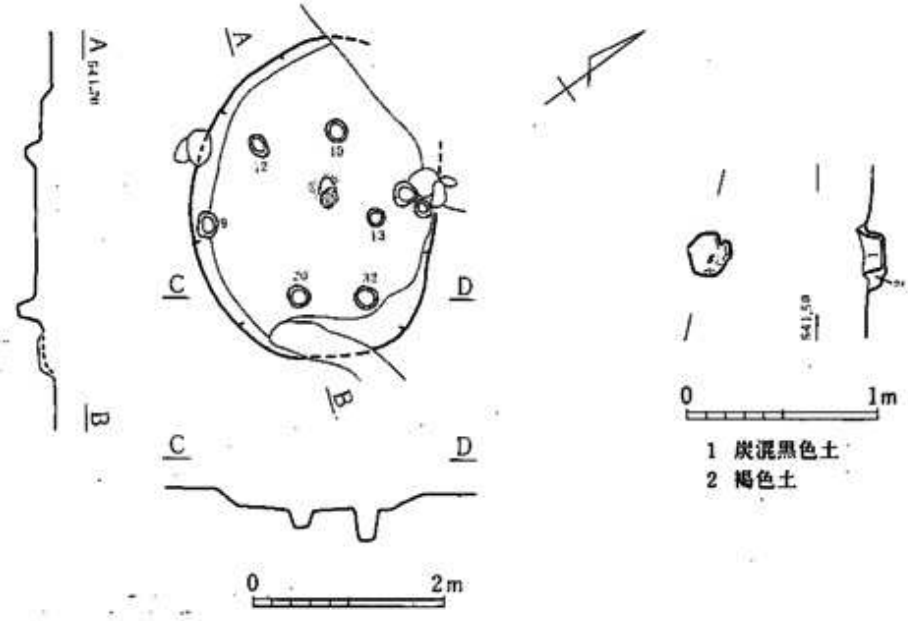
1.遺構と遺物

(1)　竪穴住居址

1）縄文時代中期

①　103号住居址（挿図3、第1図1～3）

調査区中央、溝址21・22の間で検出した。溝址21・溝状址13に切られる。3.3×2.6mの不整楕円形を呈する竪穴住居址で、北西壁・北東壁の一部は溝址21・溝状址13に壊され遺存していない。本址の南側は円形に近いプランをとるが、北半は東から北東壁にかけて直線状になり、その結果楕円形に近いプランとなる。楕円の長軸方向はN42.5°Wを示す。埋土褐色土の一層である。床面は全体的に軟弱で、西側がやや高いものの、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりはやや緩やかであり、殊に溝状址13から北東壁にかけてはだらだらとした立ち上がりを示している。壁高は北東壁で3cm、南西壁で18cmを測る。本址内で検出された柱穴8本はいずれも規模が小さいもので、径約20cmの円形を呈し、深さは11～32cmとばらつきがみられる。東側の3本はやや深い掘り込みである。これらは形状等から主柱穴とは考え難く、柱構成は不明である。本址中央には埋設土器があり、その北西側に炭がわずかに検出された。焼土は確認されなかったものの、位置等から土器埋設炉である。



挿図3　103号住居址

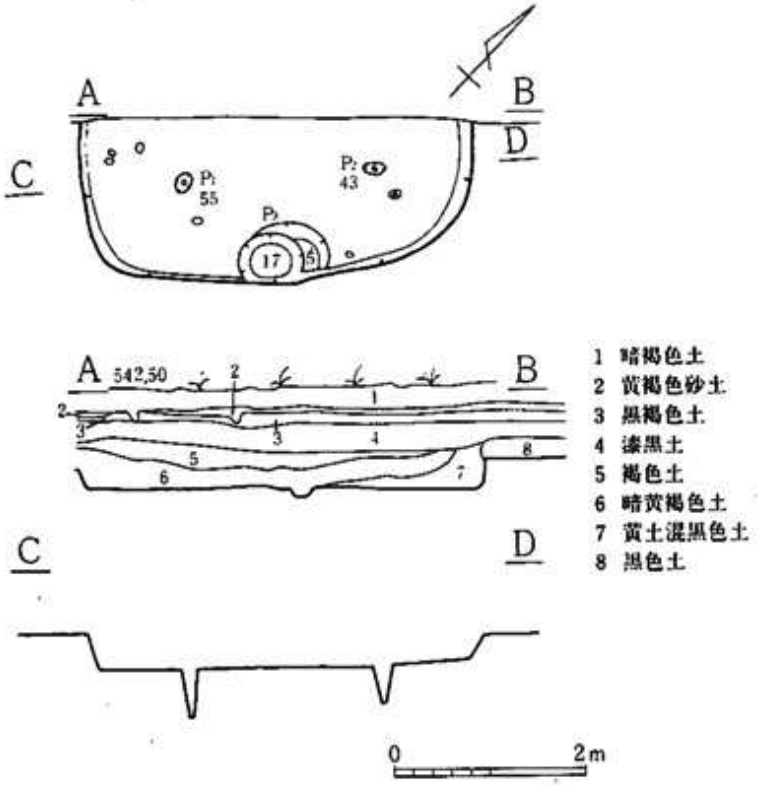
出土遺物は炉に埋設された深鉢形土器1個体のみであり、出土量は少ない。深鉢（第1図1～3）は頸部以上が大きく開く器形で、口縁部が直立気味に屈折し、口縁内面はやや肥厚する。口縁外縁は横位に櫛状工具による条線文が施文され、縦位の刺突が施された4単位の突起が付される。以下、頸部にかけて縦位に櫛状工具による条線が施され、頸部に6単位の区画文が展開し、その下位に列点文が施文される。内外面黒褐色を呈し、胎土に石英を多量に含む。焼成は良好で、胴上部の2／3が遺存する。

出土遺物から本址の所属時期は縄文時代中期前半と考えられる。

2）弥生時代後期

① 101号住居址（挿図4、第1図4～7）

調査区北西隅、約1／2が調査区外にかかって検出された。土坑 156・ 157と近接する。北東・南西方向4.1mの隅丸方形を呈すると考えられる竪穴住居址で、北東辺はやや外側に張り出し、やや不整形である。炉址が未検出で不明であるが、主軸方向は推定N47° Wを示す。漆黒土下黒色土から掘り込まれており、埋土は上から褐色土、暗黄褐色土、黄土混黒色土のレンズ状堆積を示す。床面は硬く締まった面がほぼ全面にわたって検出されたが、南隅は凹凸が激しく、中央より低く凹む。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は26～38cmを測る。主柱穴はP1・P2の2本が確認され、P1は平面割竹状を呈する。主柱穴の大きさは約20cmで、深さは43,55cmを測る。底部はローム層下位の青灰色粘土に達する。南東壁中央やや南寄り壁直下のP3は形態から入り口施設と考えられ、内部は一段低く凹む。P3の周縁部にはそれほど顕著な高まりは検出できなかった。P2西側から



挿図4　101号住居址

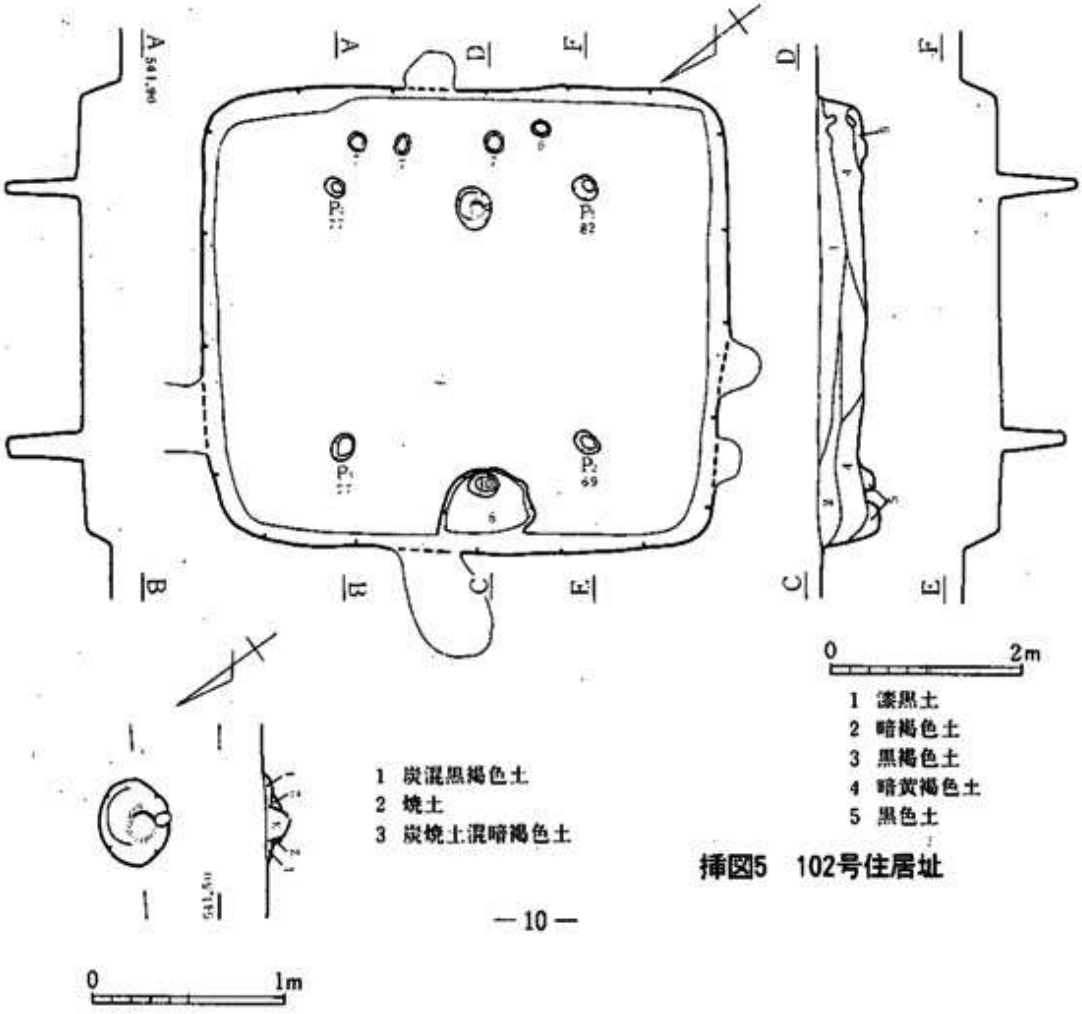
甕が出土した。

出土遺物は弥生土器甕のみであり、出土量は僅少である。第1図4は口縁が平坦に外折し、胴部上半に最大径をもつ。外面は櫛描波状文＋斜走短線の下位に縦位のヘラミガキが施され、内面は横位のヘラミガキが施されものの粘土紐の凹凸をとどめる。色調は内外面とも上半が橙褐色、下半が黒褐色を呈する。約1／2が遺存する。甕底部(5)は内面の調整が粗く、底面にヘラアテ痕をとどめる。胎土に石英・鉄石英を少量含む。6・7は櫛描波状文と斜走短線が施文され、ともに内外面黒褐色を呈する。

形態・出土遺物等から弥生時代後期後半の竪穴住居址である。

② 102号住居址（挿図5、第1図8～第3図）

調査区北西側で検出した。土坑 177と重複し、溝址8と接する。規模は5.5×4.8mを測り、南西辺がやや短いため不整方形となる竪穴住居址である。主軸方向はN 125° Eを示す。埋土は上層から漆黒土、暗褐色土、黒褐色土、暗黄褐色土であり、いわゆるレンズ状堆積である。壁際には黒色土が認められる。床面は中央を中心に硬く締まった面が検出された。壁は上部まで良好な状態で遺存しており、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は26～42cmを測る。周溝は確認できない。主



挿図5　102号住居址

柱穴はP1～P4の４本が確認され、径約20cmの円形を呈し、深さは70～83cmとほぼ揃う。底部は青灰色粘土まで掘り込まれる。P1とP4の中間やや中央寄りには炉址が設けられており、掘り方は44×36cmの不整楕円形を呈する。中央やや南西寄りに甕が据えられ、その南側に径10cm程度の円礫が接して置かれる。土器埋設炉である。上部および炉内には炭が混じっており、土器の外側を中心に焼土が厚く発達している。炉址の正面北西辺ほぼ中央に掘り込まれた穴は不整形を呈しており、内部に２つの小穴が掘り込まれている。この穴の周囲には高まりはないが、形態から入り口施設と考えられる。P1・P4の中間南東壁寄りには、一定の間隔をおいて径約20cmの円形を呈する柱穴が並んでいる。対辺側には柱穴はなく、間仕切とは考え難い。炉址に近接することから、これに関連した施設とも考えられる。P1東側壁際から焼土が検出され、またP3北側埋土上層中にも焼土が含まれていた。

出土遺物は弥生土器壺・甕・高坏、太型蛤刃石斧・打製石包丁・抉入打製石包丁・有肩扇状形石器・砥石等であり、出土量は多い。壺（第２図１・２）は口縁部が受け口状を呈し、口縁外縁に箆描の短線（１）・刻み（２）が施される。２は頸部に櫛描の鋸歯文が施文され、内外面は刷毛目調整される。頸部の文様は櫛描横線文（３）や振り幅の大きい波状文（３・５～７）、また胴部上半には1／4弧文（４）が施文される。底部（第１図８）は多くの粗大な石英粒や金雲母を含み、外面は縦位にヘラナデされる。甕（９）は炉址の埋設土器で頸部から上と底部を欠損する。内外面褐色を呈し、胴部上半に斜走短線が施文される。14は底部に籾圧痕をとどめる。第２図８～18は櫛描波状文＋斜走短線が施文され、口縁部はほぼ水平に外折する。11・16は外面に炭化物が付着する。また16は外面刷毛目調整される。高坏（第１図15）脚部内面上部にはヘラアテ痕が残る。太型蛤刃石斧（第２図19）は敲打痕が顕著に残り、製作途中で破損したもので、ごく一部分のみ遺存する。打製石包丁（21）・有肩扇状形石器（第３図２）は刃部にロー状光沢が看取される。抉入打製石包丁（第２図22）は背部に刃潰し状に調整が施される。打製石包丁・抉入打製石包丁・有肩扇状形石器はいずれも硬砂岩素材である。砥石（第３図５）は砂岩製で、一面のみ磨滅する。他の住居址に比して石器類が多いことが特徴的である。

本址の所属時期は、出土遺物・分布状況から溝址８と近接した時期と考えられ、弥生時代後期後半に比定される。

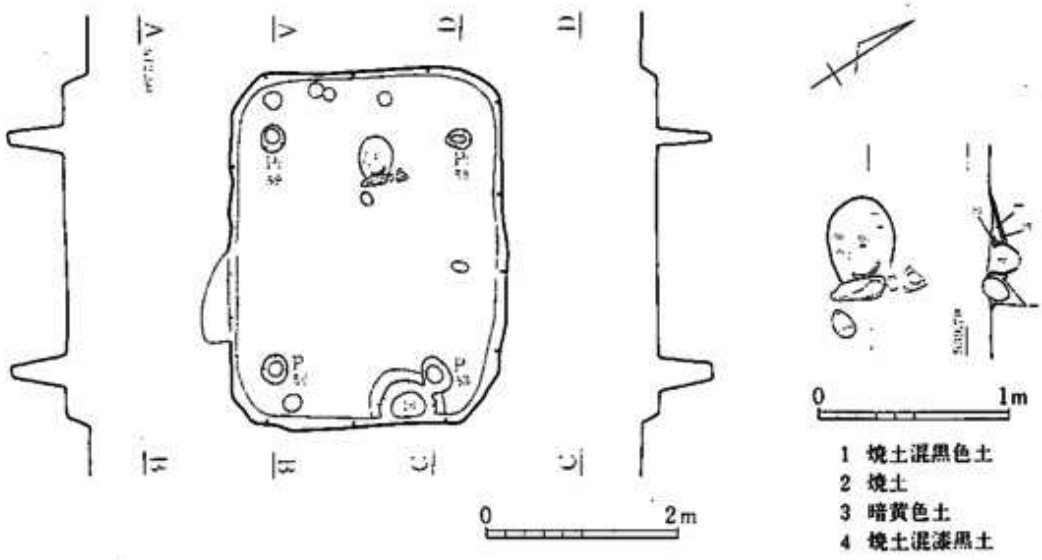
③ 104号住居址（挿図６、第４図１～９）

調査区西側中央付近で検出した。土坑 185・溝址７・柱列址２と近接する。規模は3.7×2.9mと小さく、主軸方向がやや長い。壁上部は他の住居址に比して遺存状態が悪いが、おおむね隅丸長方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はN54° Wを示す。埋土は床面直上および壁下に漆黒土、その上に褐色土、さらに黒色土が、いわゆるレンズ状に堆積している。床面はほぼ全面に硬く締まった部分がある。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は14～26cmを測る。周溝はな

い。主柱穴はP1〜P4の４本が確認され、径約20cmの円形を呈し、深さは42〜60cmでP2以外はほぼ揃う。底部は 101・ 102号住居址と同様、青灰色粘土まで達する。P1とP4の中間中央寄りには炉址が設けられており、規模は50×35cmと住居址の規模に比べ大きい。ほぼ中央に甕が据えられ、その南東側に炉縁石が置かれる土器埋設炉である。土器の内外に多量の焼土があり、殊に土器の南西側外は非常に焼けている。南東壁中央よりやや東側に掘り込まれた穴は不整形を呈しており、周囲にわずかに高い土手状の高まりがある。位置や形態から入り口施設と考えられる。主柱穴を結んだ線より外側には径約20cmの円形を呈する柱穴が幾つか掘り込まれている。いずれも埋土褐色土で深さにばらつきがあり、本址に伴うか判断がつかなかった。本址に伴うとすれば、間仕切りとも考えられる。炉址の北東側からは近接して甕が出土した。

出土遺物は弥生土器壷・甕、有肩扁状形石器があり、出土量は少ない。壷（第４図４）は振り幅の大きい櫛描波状文が施文され、内面はヘラナデされる。甕（１）は炉に埋設された土器で、内面横位・外面縦位の刷毛目調整が施され、外面は二次焼成による剥落がみられる。内面にはところどころ接合痕がみられるほか、内外面に粘土紐の凹凸をとどめる。底部のみ欠損しており、色調は内外面とも上半が橙褐色、下半が黒褐色を呈する。２は胴部中央に最大径をもち、外面に縦位の丁寧なヘラミガキが施される。３は底部ヘラケズリされる。甕の口縁部は水平より心持ち下向きに屈折している（５〜７）。いずれも櫛描波状文と斜走短線が施文され、器厚は薄い。６は内面に接合痕をとどめる。有肩扁状形石器（９）は硬砂岩素材であり、基部・抉部に刃潰しが施されるほか、通例に比べ刃部の角度が大きい。他に炉址内から台付甕片が出土した。

本址の所属時期は、出土遺物等から弥生時代後期終末と考えられる。

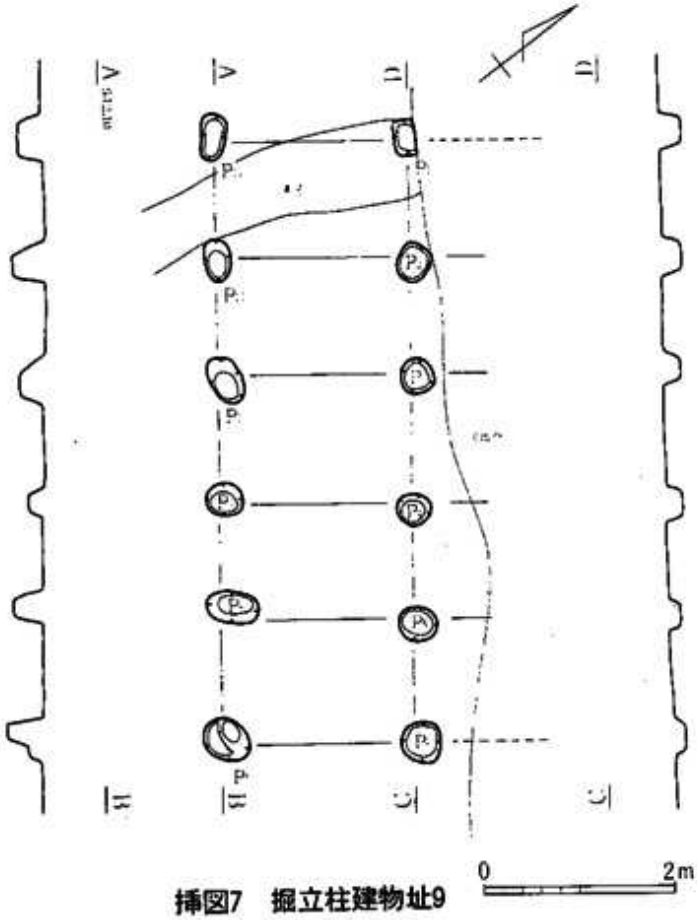


挿図6　104号住居址

(2) 掘立柱建物址

① 掘立柱建物址９（挿図７）

調査区北側端、一部調査区外にかかって検出された。溝址６と重複し、土坑 165・ 179、溝址９、囲溝址５と近接する。梁行方向の間数は調査区外にかかり不明であるものの、桁行は５間を数える総柱の掘立柱建物址である。桁行は6.7mを測り、方向はN53.5° Wを示す。囲溝址５と方向を揃えて近接し、また規模もおおむね似通う。柱間は桁行方向がおよそ1.2m、梁行方向が2.0mを測る。柱穴の掘り方は確認時には平面形は長方形を呈していたが、掘り過ぎのため掘り上がりはやや丸味を帯びている。柱穴の規模はおおむね40×20cmであり、深さは13～39cmとばらつくが、大半の底部は標高541.21～28cmにある。柱穴の平面形は北西側６本の柱穴が桁行方向に長いのに対し、南東側６本は梁行方向がやや長い傾向がある。出土遺物はなく、詳細時期は不明であるが、本遺跡で検出された遺構の時期や分布状況・柱穴埋土等から弥生時代後期後半に属する可能性もあり、とすると、この時期の建物址としてはこれまで調査されたものに比較して相当規模の大きなものといえる。



挿図7　掘立柱建物址9

(3) 土坑

今次調査地点では大小多数の穴が検出され、その規模により土坑・柱穴に区分した。土坑としたものの大半は不整形であり、遺物の出土も認められないものである。そこで、遺物が出土したり、形態等に特徴が認められるものについて個別に記述し、他は一括する。

①土坑 156（付図５）

調査区西側、 101号住居址と溝址７の間で検出された。不整円形を呈する。110×90cm、深さ９cmを測る。底部はほぼ平坦で、断面皿状を呈する。埋土は黒褐色土である。北東側は緩やかな立ち上がりを示すのに対し、他はやや急である。出土遺物は外面にヘラミガキが施された土師器甕小破片１片のみであり、時期・性格等詳細は不明である。

②土坑 165（挿図５、第４図10〜第５図６、第17図２）

調査区北側端、掘立柱建物址９・土坑 179・柱列址２・井戸１に囲まれて検出された。細長い不整台形状を呈し、長軸方向2.1m、短軸方向は長辺1.1m・短辺0.6mを測る。深さは中央付近で15cm、南東側の長辺際で20cmを測る。埋土は褐色土・黄土混黒褐色土である。セクション・ベルトで観察の結果、短辺側に褐色土、長辺側に黄土混黒褐色土があり、黄土混黒褐色土が褐色土を切っている。黄土混黒褐色土部分は底部が低くなるところにあたり、埋土上部で60cm、底部で20cmの規模を測る。長辺側の壁の立ち上がりはやや緩やかである。これに対し、褐色土が分布する側はだらだらと掘り込まれており、断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物は縄文時代早期末葉・後期前半の二時期のものがある。第４図12〜15は同一個体であり、口縁屈曲部に刻みが施され、以下横方向の条痕が施される。色調は内外面黄褐色ないし暗褐色を呈し、胎土に繊維・金雲母を含み、焼成不良の脆い土器である。16・17は原体不明の縄文が施され、外面褐色・内面褐色ないし黒褐色を呈する。多量の石英等と繊維を含み、焼成は不良である。同一個体である。以上は縄文時代早期末葉に比定される。10は口縁部に４単位の弧状の隆帯が貼付され、刻みが施される。隆帯の上位には沈線が２条充填される。器体の調整は外面が上半横位ミガキ・下半縦位ミガキ、内面は上半ナデ・下半横位ミガキが施される。焼成が良好の土器で、外面褐色ないし黒褐色・内面黒褐色を呈する。11は深鉢底部で、編代痕をとどめる。二本超え・二本潜り・一本送りである。内外面横位のナデが施される。14は小波状を呈する口縁部である。浅鉢（第５図１）は内面が１条の沈線で区画され、口縁部にＲＬ縄文が横位に施文される。その下位に稜をもつ。内外面横位ミガキが施され、灰褐色を呈する。２・４・５は粗製無文の深鉢である。３は内外面黒褐色を呈し、横位ミガキが施される。６は耳栓の一部分で、内面稜に刻みが施される。第17図２は玻璃質安山岩製の石鏃である。

形態や埋土の状態から２基の土坑の重複と判断された。各遺物の出土位置は不明であるものの、埋土の状態から、褐色土部分は縄文時代早期末葉、黄土混黒褐色土部分は縄文時代晩期の土坑と考えられる。それぞれの性格は不明であるが、晩期の土坑は耳栓等の出土から墓壙の可能性がある。

③ 土坑 166（付図6、第5図7～9）

調査区中央北端、土坑 180・竪穴2・集石3の間で検出された。110×90cmの不整楕円形を呈し、深さは47cmを測る。ほぼ垂直に掘り込まれており、底部中央部が凹む。出土遺物は粗製深鉢（第5図7・8）等である。7・8は外面に横位の粗い条痕状の調整が施され、内面はナデられる。いずれも石英等を多く含む。9は底部に編代痕がわずかに看取されるが、器面は著しく荒れており、編み方は把握できない。他に、内外面に横位のミガキが施され内面に稜をもつ浅鉢、中期と考えられる深鉢がある。本址の時期は縄文時代後期に属すると考えられるが、詳細時期・性格等は不明である。

④ 土坑 168（付図6）

調査区中央北側、溝址10・11に重複して検出された。165×125cmの不整形を呈し、深さ30cmを測る。中央南側は約80cm四方の不整方形に一段低く掘り凹められており、壁はやや急に立ち上がる。埋土は全体が褐色土で低い部分でも違いは見い出せない。溝址11側で柱穴が重複する。出土遺物はいずれも小破片の3片のみで、縄文時代中期と思われる破片と山茶碗片がある。底面の状態や出土遺物等から、縄文時代中期と平安時代末以降の2時期の土坑の重複と考えられるが、それぞれの平面形・性格等の詳細は不明である。

⑤ 土坑 171（付図7、第5図10～14）

調査区中央やや南西側、土坑 170・ 174・ 195～ 200、溝址3・23の間に検出された。100×85cmの不整楕円形を呈し、深さ28cmを測る。埋土は褐色土で、炭を多量に含む。底部はほぼ平坦であり、壁は北側が急に立ち上がるのに対し、南側は緩やかに立ち上がる。

出土遺物は、破片を含め縄文土器深鉢5個体がある。第5図10は全体の約1／6程度が遺存する。口縁は2個一対4単位の小波状を呈し、直立する。口縁部文様帯は沈線で区画された内部にコンパス文が充填され、1単位の小波状下位には沈線と隆帯による連結文が付される。口縁部文様帯には炭化物が顕著に付着する。この下位頸部文様帯にかけては縦位の平行沈線が条線文状に施文され、その後重複した平行沈線で頸部文様帯が区画される。頸部文様帯はＲＬ縄文施文の下位に、平行沈線文・平行押し引き沈線文が交互施文される。胴部文様帯は上半に斜格子状の平行沈線文、下半にＲＬ縄文が横位施文され、施文後に頸部文様帯に接して逆Ｕ字状の平行沈線区画文が施される。区画文内部には一部結節縄文が充填される。縄文・結節縄文以外の施文原体はいずれも半截竹管である。胎土に細かい石英等を多量に含む。11は平縁の深鉢で、平行沈線による波状文の波頂部直下に刻みの施された貼付文が付される。12は詳細は不明であるが、撚りの乱れがあり、ＲＲＬの横位施文と思われる。13は半截竹管により平行沈線文・条線文が施文される。外面暗褐

色・内面黒色を呈する。14は横位の平行沈線の下位に羽状に縄文が施文される。原体は器面の状態が不良ではっきりしないものの、いずれもＲＬと考えられ、施文方向を上から縦位・横位・縦位と変えていると思われる。

出土遺物から縄文時代中期前半に比定される。

⑥ 土坑 172（付図５）

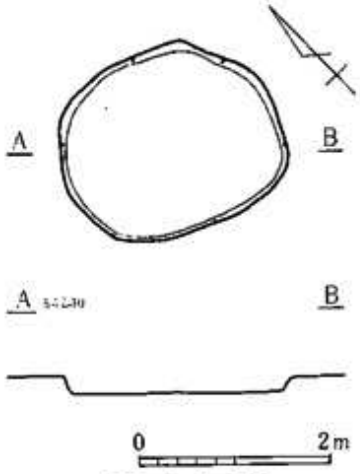
調査区西側、土坑 186・ 191、溝址23、柱列址２の間に検出された。南西隅に小柱穴が重複する。115×80cmの不整形を呈する土坑で、南北方向に長い。深さ23cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は全体的にやや緩やかに立ち上がるが、特に東側の傾斜は緩やかである。出土遺物は陶器碗小片１片のみであり、中世に属するほか、詳細は不明である。

⑦ 土坑 175（付図９）

調査区東側、土坑 233～ 242の間に検出された。規模は190×120cmを測り、南東北西方向と南西北東方面に折れ曲がった不整形の鉤形を呈する。深さは南東部分が18、南西部分が37cmを測り、底部は南西側に一段低くなる。埋土は褐色土の一層である。壁の立ち上がりはやや急である。出土遺物は縄文土器深鉢小片１片がある。隆帯上に半截竹管による押し引きが施され、その上位に半截竹管による連続刺突がある。形態等から２つの土坑の重複と考えられるが、遺物出土位置は不明であり、どちらが縄文時代の土坑であるか、判断できなかった。

⑧ その他の土坑群（付図５～９）

先述のとおり、調査区のほぼ全面に亘って50～200cm程度の不整形の穴が分布している。規模・形態等はまちまちであるが、埋土はおおむね褐色土で共通する。全体的にだらだらと掘り凹んでおり、底面もやや丸みを帯びている。出土遺物もなく、時期・性格の詳細は不明であるが、調査区のほぼ全面に分布していることから、大半は耕作に関連したものと考えられる。その成因は具体的には畑作をあげることができよう。本遺跡の検出遺構からすれば、中世には大規模な溝址が開削され、この廃絶も中世のうちと考えられることから、中世には稲作の展開が考えられる。とすると、弥生時代後期を中心とした時期を想定することが妥当といえよう。ただ弥生時代後期とすると該期の遺構が集中する調査区北西側には土坑の分布は普遍的に認められ、整合性を欠く。



挿図8　竪穴2

(4)　竪穴

①　竪穴２（挿図８）

調査区中央、土坑 166・ 167・ 182・ 183、柱列址２、集石３の間に検出された。規模２30×190cmの不整楕円形を呈する。深さは22cmを測り、底部ははほぼ平坦である。埋土は褐色土の一層である。断面皿状を呈しており、壁の立ち上がりはやや急である。出土遺物はなく、時期もまたいかなる機能を果たしたかも一切不明である。

(5)　囲溝址

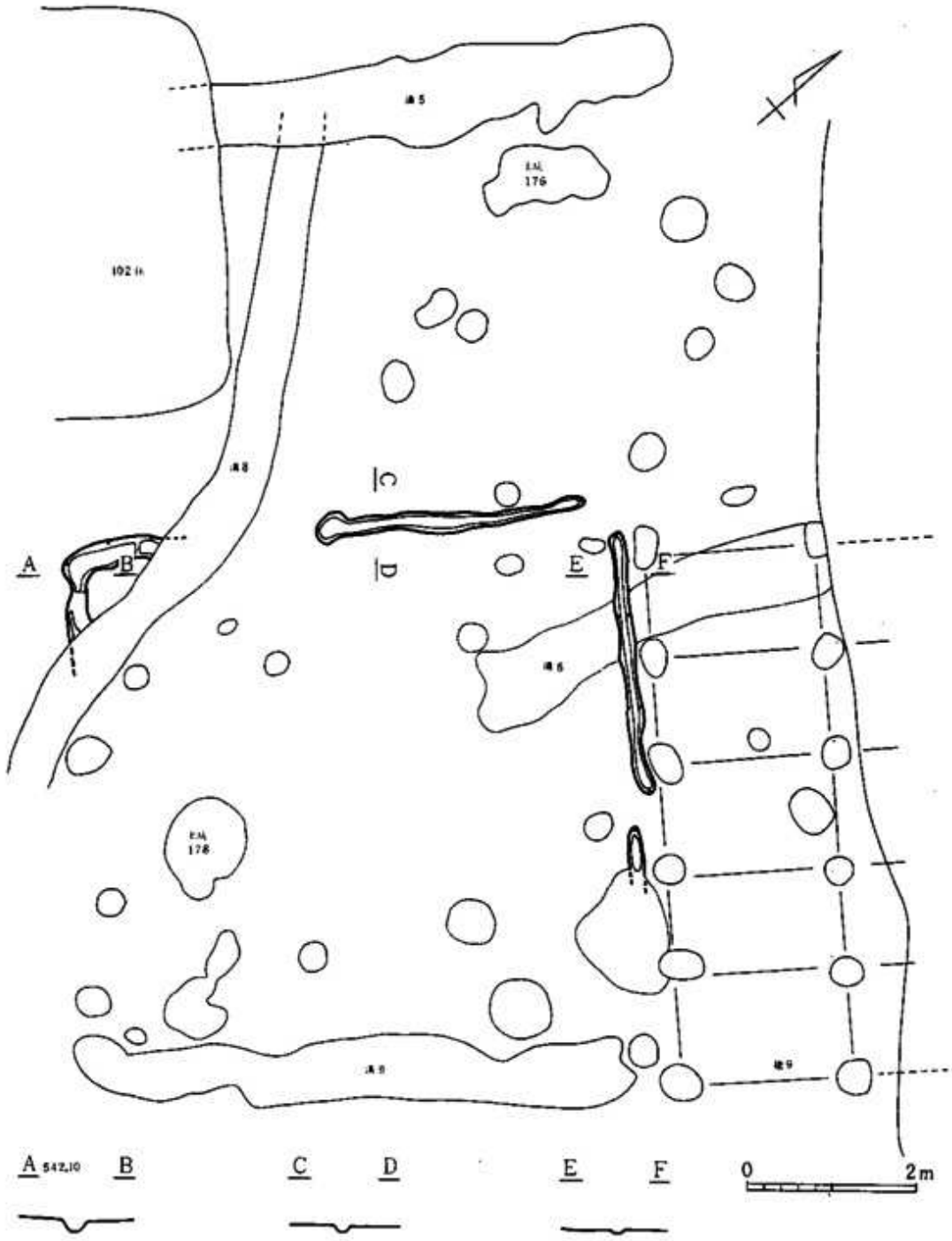
①　囲溝址５（挿図９）

調査区北西側、掘立柱建物址９に接し、土坑 178、溝址６・８・９と重複して検出された。南東側半分は溝を検出できなかったが、北西側にコの字状の溝の配置を確認し、囲溝址と判断した。溝部分は連続しておらず、途切れる位置は一定していない。規模は南東・北西方向は不明であるが、南西・北東方向6.6mを測り、南東・北西方向はN55°Wを示す。ほぼ掘立柱建物址９の桁行方向と同じ方向をとる。溝部分の幅は10〜30cmでばらつきがあるが、相対的に北東辺と北西辺北側が幅が狭い。深さは２〜24cmであり、幅と同様、北東辺と北西辺北側が浅い。南西辺および北西辺南側は検出面が他より高いためであり、溝の幅はかなり大きかったことが考えられる。溝は断面U字状を呈する。コの字状に配置された溝の内部には、径20cm程度、深さ７〜26cmの不整円形を呈する小柱穴がいくつか掘り込まれている。埋土は褐色土で共通することから、なかに囲溝址を構成するものも少なからず存すると考えられる。具体的にどの柱穴が組み合うかは不明である。出土遺物はなく、所属時期等詳細は不明であるが、近接して検出された掘立柱建物址９と方向を揃える等同時期の施設が存在し、なんらかの関係を有すると考えられる。

(6)　溝址

①　溝址３（付図２、第６図〜第10図２）

調査区南西から中央、さらに北東にかけて検出された。規模や位置関係から一般国道 153号飯



挿図9　囲溝址5

田バイパス路線内で検出された溝址３に連続するものと判断され、同一遺構番号を付した。ただし、バイパス調査時には確認のみで、全体を調査していない。調査された部分は総延長102.5mに達する。

幅は3.8～8.6mであるが、ところどころ膨らむ部分を除くと、おおむね４m前後となる。調査区南西端から土坑213・214付近まではN74°W方向に伸びているが、土坑213・214付近でほぼ磁北方向に屈折し、その後緩やかに東側に湾曲しながら、土坑181付近からN60°E方向に伸びる。殿原遺跡遺構全体図（付図１）からみるとバイパス路線内で検出された部分はほぼ延長上に位置し、多少の蛇行はあるものの、直線状に毛賀沢川方向に伸びているといえる。本址の深さは南西端で156cm、屈折部で102cm、土坑181付近で142cm、溝址18のはじまるあたりで123cmを測る。壁は下半が垂直に立ち上がり、上半もやや緩やかになるものの、急な立ち上がりを示す。北東端ではやや底部は掘り足りなかった。比高差は南西端と溝址18のはじまるあたりで147cmを測る。屈折部ではその前後で約35cmの比高差があり、この部分での落差は全体を通じて一番大きい。

屈折部以外の形状の特徴的な点として、南西端・溝址18がはじまる付近・北東端の３ヶ所に幅員を増す部分がある。特に、南西・北東両端部分ではほぼ直角に張り出していると考えられる。また、溝址18がはじまる付近も北壁の張り出しは小さいのに対し、南壁はやや丸みを帯びているものの直角に近い。張り出し部分はいずれも溝址の南壁側に位置し、しかもほぼ直角を呈している。また、この部分の壁高は、溝址18がはじまる付近は顕著でないが、北側壁に比して小さい。南西端では北壁140cmに対し、南壁89cmを測る。溝址18がはじまる付近では北壁107cm・南壁94cm、北東端は参考ながら北壁92cm・南壁34cmである。上端のレベル差はやはり、北壁と南壁では少なからずあり、殊に南西端では大きい。

埋土は上層から灰褐色砂質土・灰褐色砂・暗褐色砂質土・漆黒土・褐色砂質土・灰褐色砂・褐色砂質土・橙褐色砂礫である。漆黒土は10～20cmの層厚を測り、これより上部と下部では時間の懸隔を認めざるを得ない。漆黒土上部・下部とも砂質土・砂層が互層となっており、下部は粒径が相対的に大きい。

屈折部の北壁際には、溝に半分がかかって確認できなかったものの、直径約110cmの不整円形を呈する柱穴があり、深さは77cmを測る。底部は溝底部より33cm高い。また、溝掘り下げ途中で外してしまったが、この柱穴に並んだ位置の溝底部に径40cm程度の平板状の礫があった。柱穴の北側は、溝に接して南東・北西方向7.2mの不整方形を呈する掘り込みがある。南西側は調査前まで使用されていた水路に壊されており、南西・北東方向の規模は不明である。深さ17cmを測り、底面はほぼ平坦である。壁はやや急な立ち上がりを示す。掘り込み底部と溝底部の比高は127cmである。柱穴・掘り込みとも埋土は溝址埋土と顕著な差異はない。溝址が大きく屈曲すること、柱穴・方形の掘り込みが溝址と同時期で付属施設と考えられること、溝址10～13といった溝址３とほぼ同時期と思われる溝址が方形の掘り込み部からはじまること等から、この位置に堰が設けられたことが考えられる。南西端の張り出し部分と土坑181付近以東の溝を結んだ線はほぼ一直

線であることから、もともと直線状に設計されていた溝が大きく南東に振られ、屈折部を造り出しているといえる。このことも、屈折部に堰が設置されたことを裏付けるものといえよう。とすると、屈折部東側からはじまる溝址15・16・19〜21の先端についても、近年の水路により壊されているものの、せき止めた水を各溝址に分配する役割を果たした方形の掘り込みがあった可能性がある。

これに対し、3ヶ所で確認された三角形の張り出しは、いかなる機能を果たしたか明確ではない。平面形態や壁・底面の状態から、湛水ないし水の取り入れに関連した施設であることも想定されよう。

出土遺物は縄文時代中・後期の土器・石器、弥生時代後期の土器・石器、土師器台付甕・甕・高坏、須恵器甕・蓋・坏・鉢、灰釉陶器碗・皿、土師質皿、山茶碗皿、青磁碗・皿、白磁碗、陶器壺・甕・天目茶碗・燈明皿・鉢等があり、出土量は多い。

第6図1・2は縄文時代中期の深鉢で、2は原体RLの単節縄文が横位施文される。3は底部に2本超え1本潜り右1本送りの網代痕をとどめる。4は口唇部に突起、口縁外縁に貼付文が付される。5・6は条線が鋸歯状に施文される。3〜6は縄文時代後期に属す土器である。

10・11は弥生時代後期の壺片で、10は櫛描波状文＋櫛描横線文、11は鋸歯状の櫛描文が施文される。甕（7〜9・12〜19）は櫛描波状文・斜走短線が施文され、胴以下は丁寧にヘラミガキされる。薄手のものが主であるが、15はやや厚手である。

21は土師器壺と思われるもので、内面の器壁は剥落する。内外面暗褐色を呈し、胎土に粗大な石英を多く含む。22は口縁が外折し平坦状になり、胴部中央に最大径がある。調整は内面ヘラケズリ後ヘラナデ・外面横位ナデが施され、色調は外面黒色・内面黒褐色を呈する。須恵器甕（23〜第7図8）は大半が内面同心円叩き・外面平行叩きされ、内面がナデ消しされるものがある。高台坏（9・10）は内面ないし外面に赤錆が付着する。11は焼成不良の軟質な坏で、底部は回転糸切りされる。14は凸帯付き四耳壺で、内面同心円叩き・外面平行叩き後ナデ消しされる。内外面灰色を呈する。

灰釉陶器碗（15）は胎土精良の堅緻なもので、内外面灰白色を呈する。17・18は土師質の皿で、底部はヘラケズリ調整される。口縁部が外反し、不明瞭な稜をもつ。19は台状の底部をなし、回転糸切りされる。小型の皿（20）は胎土に粗大な石英等含み、内面にロクロナデの際にはみだした粘土が付着する。21は底部回転糸切り後ナデが施される。

山茶碗系の碗（22〜第8図3）は単一の器種としては比較的多くの出土をみており、高台部に籾殻の圧痕をとどめるものが多い（第7図22・23）。白磁玉縁碗（第8図7〜9）のうち、9は他より縁に厚みがある。色調はそれぞれ異なり、7は灰白色、8は全体的に白濁したような感じで、9はやや浅葱色がかる。14〜18は常滑の甕片で、17は上半に灰が被る。19は天目茶碗で、茶がかった釉薬が掛かる。

石器は詳細時期不明なものがあり、形態毎に記述する。第９図１は硬砂岩製の小型の打製石器で、自然面を大きく残す。２は刃部を欠損しており、全体的に摩滅している。３は比較的大きな剥離で整形されており、両側縁に潰しが加えられる。４は全面に剥離がおよんで表皮は取り去られており、尖頭状を呈する。５は緑泥片岩製で、火を受ける。大きな剥離で撥状に整形される。６も同様に全面に調整がおよんでいるが、身が厚く、長さに比して幅が大きい。７は横刃状で、全体に細かい剥離が加えられている。２～４・６・７・９は硬砂岩素材である。８・10・11は緑色岩製で、11はほぼ全面に磨滅がおよんでいる。弥生時代後期の抉入磨製石包丁と考えられる。12は定角式の磨製石斧で、基部を大きく欠くほか、刃部に刃こぼれがある。縄文時代後期に比定されよう。第10図２は砂岩製の不明石製品で、中央やや下側に貫通しない穿孔がある。またこの右斜め下側には、管状工具による擦り切りによりできた突起と、裏面やや中央寄りに斜めに貫通する小さな穿孔がある。表・裏面とも擦った痕跡が顕著にあるが、特異な穿孔・擦り切りがあることから砥石とも断じ難い。上端は節理面である。

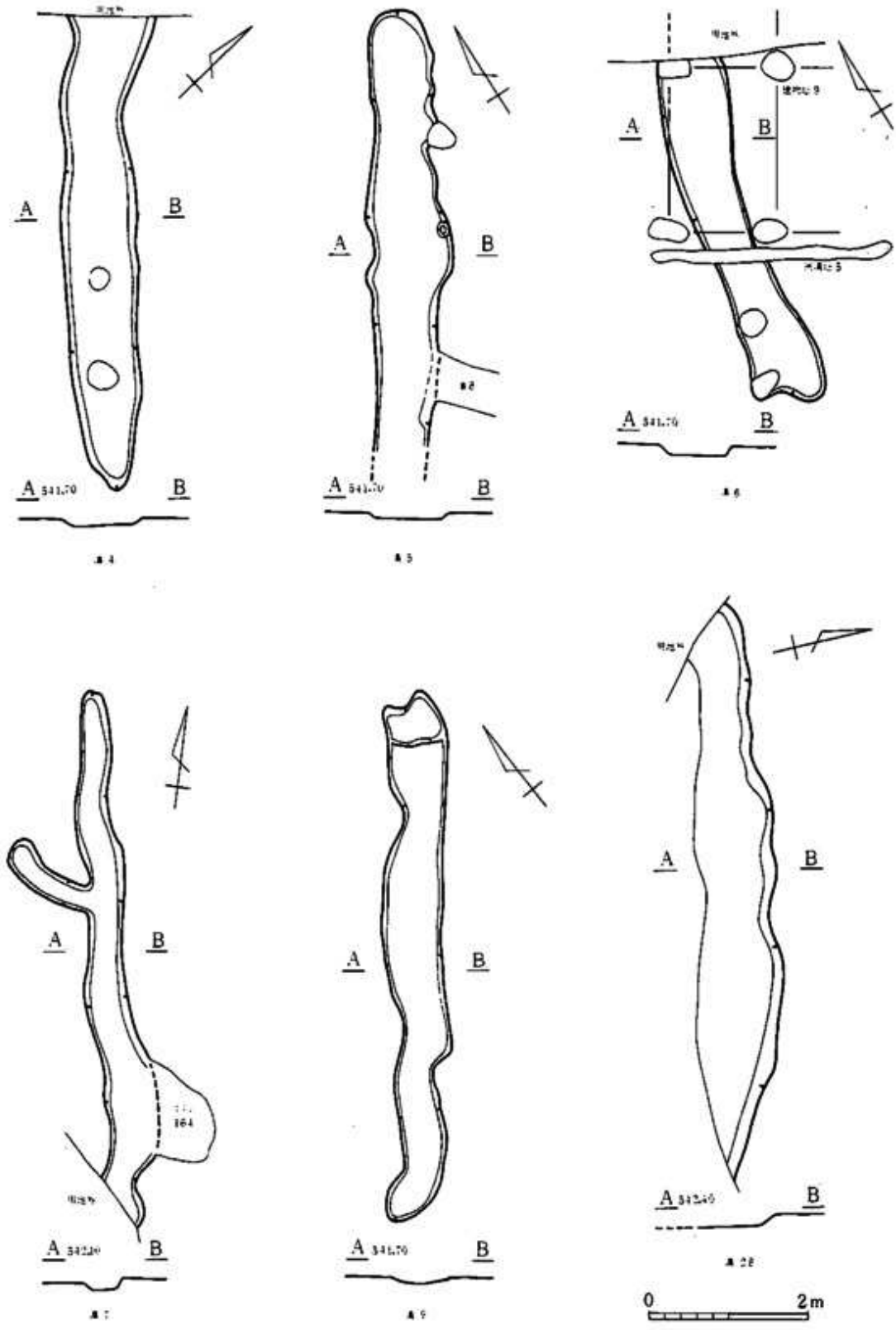
出土遺物は縄文時代中期から中世の各時期にわたっているが、主体は平安時代末から中世にかけてである。断面形等からすれば人工の水路であることは疑いなく、平安時代末に開削された井水と考えられる。具体的な機能としては、大井と毛賀沢川の中間に位置することから、本址の主たる機能は大井からの水落としと考えられる。しかし、堰や平行する小さい幾筋もの溝址が検出されたことから、副次的に一帯の灌漑機能も果たしたであろう。また、その廃絶の時期はやはり遺物から中世のうちと考えられ、埋土の状態から使用中に徐々に埋没していったというよりはむしろ、一時に使用されなくなったという方が妥当であろう。

② 溝址４（挿図10）

調査区北西隅、土坑 159・ 160の間で検出された。延長6.0mを検出したのみで、調査区外に伸びている。幅は60～120cmと一定せず、やや蛇行しながらN47° W方向をとる。埋土は黒褐色土であり、溝址５と類似する。だらだらと掘り凹んでおり、深さは８～13cmを測る。底部のレベルはほぼ一定であり、また、水の流れた痕跡も認められない。出土遺物はない。時期等詳細は不明であるが、なんらかの区画施設とも思われる。

③ 溝址５（挿図10）

調査区北西側、 102号住居址・溝址８と重複し、土坑 176・溝状址１と近接する。 102号住居址・溝址８との新旧関係は不明である。長さは 102号住居址重複部分まで5.4mを測り、長軸方向はN35° Eをとる。幅は70～100cmとややばらつきがあるが、おおむね80cm程度である。埋土は溝址４と同様、黒褐色土であり、底部付近に砂等は認められない。深さは３～９cmで上部の状



挿図10　溝址4～7・9・28

態ははっきりしないが、下部はだらだらと掘り凹んでおり、中央部が一番深い。底部のレベルは北東側がやや低い。出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

④ 溝址 6（挿図10）

調査区北北西側、掘立柱建物址9と重複し、囲溝址5に切られる。北側は調査区外にかかり、未検出であり、確認された部分の長さは4.4mを測り、幅は70～90cm程度でほぼ一定している。やや弧状を呈しているが、長軸方向はおおむねN11.5° Eを示す。埋土は黒褐色土の一層である。深さは6～10cmと検出面から浅く、壁の立ち上がりの状態ははっきりしないが、底部はほぼ平底状を呈する。溝底部のレベルはほとんど変化がない。出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

⑤ 溝址 7（挿図10）

調査区北西側，101・102・104号住居址の間、土坑 156・161・185に近接して検出された。土坑 164と重複するが、新旧関係は不明である。二度に調査がまたがり、やや遺構の検出レベルが異なるため、本址の南側は確認できなかった。確認された長さは6.5mを測り、やや蛇行するものの、長軸方向はN11.5° Wをとる。幅は40～50cmとほぼ一定する。深さは7～16cmで、南側が低くなっている。検出面から浅いものの、壁の立ち上がりはしっかりしており、底部は丸味を帯びる。埋土は黒褐色土である。出土遺物はない。断面形や蛇行する等の点で自然流路とも考えられるが、傾斜に直交する方向に伸びており、水の流れた痕跡も見い出せない。他の溝址が幅広なのに対し、幅が狭く方向も他と大きく異なる。時期等詳細は不明である。

⑥ 溝址 8（付図3、第10図3～13）

調査区北側やや西寄り、102号住居址に接し、囲溝址5に切られ、土坑 183・184・溝址5・柱列址2に重複して検出された。南東端は土坑 181横に位置し、N53° W方向に伸びる。囲溝址5と重複する部分で北側に方向を振り，102号住居址に最接近する付近でおおむね元の方向に戻る。重機の荒れ土を除去する前は僅かに調査区外まで連続しているのが確認されたが、遺構検出時には掘り飛ばされて確認できなかった。調査区端の断面では土坑 158南側に懸かっていた。調査された長さは29.6mを測り、調査区端まで含めると、42.4mに達する。幅は蛇行する部分で70cmを測るものの、直線部分は約40cmでほぼ一定する。深さは8～16cmで、南東側が低くなっている。比高差は14cmである。断面U字状を呈し、壁の立ち上がりの状態はやや緩やかである。埋土は漆黒土の一層であり、底部付近には砂は確認できない。

出土遺物は縄文土器深鉢、弥生土器壺・甕、打製石器等があり、出土量は少ない。第10図3は

細かい縦位の条線が施され、内面は器面荒れが著しい。縄文時代中期前半に位置づく。弥生土器壺（5）は口縁部受け口状を呈しており、外面に篦状工具による刻みが施される。頸部に横描の山形文が施文される。内外面ナデ調整され、色調はともに褐色を呈する。6は薄手の壺胴上部片で、櫛描波状文が施文される。甕（7）口縁部はほぼ水平に外折する。内外面ナデ調整され、口縁部は横ナデされる。胴上部には波状文と斜走短線が施文される。11は基部のみ遺存し、両側縁に潰しが施される。12・13は自然面を大きく残し、刃部にロー状光沢が認められる。11～13はいずれも硬砂岩素材である。

出土遺物の大半は弥生時代後期後半に属するもので、その内容は 102号住居址と近似しており、若干の時間差はあるものの、102号住居址と近接した時期を考えることができる。本址がいかなる機能を果たしたか詳細は不明であるが、本址底部に砂粒等認められないことから区画施設としての役割も想定できよう。とすれば、同様に区画の機能をもつ柱列址2とも重複し、また柱列址2の時期が弥生時代後期に求められることから、近接した時期に区画施設に変化があったことが考えられる。

⑦ 溝址 9（挿図10、第10図14・15）

調査区北北西側、掘立柱建物址9・土坑 178・囲溝址5・溝址8・井戸1に近接して検出された。長さ6.8m、幅60～80cmを測り、やや蛇行するものの、長軸方向はN38.5° Eをとる。深さは7～11cmで、両端が低くなっている。検出面から浅いため、壁の立ち上がりの状態ははっきりしないが、だらだらと掘り込まれており、北西辺の方がやや急に立ち上がる。底部は中央付近が一番低い。埋土は褐色土である。出土遺物は渦文（14）・縄文（15）の施される縄文土器片4片があるが、混入と考えられ、詳細時期等不明である。

⑧ 溝址10～21・26・27（付図2、第10図16～第13図7）

調査区中央、3の両側で検出された。溝址10～13・15・16・19～21は溝址3の屈折部の堰と考えられる遺構付近から北東下流側に検出されており、溝址3に平行する。溝址21は 103号住居址を切る。また、溝址10・11は土坑 168と重複する。それぞれの溝址の幅は60～180cmで、南西側が狭く、下流の北東側の方が幅が広がる傾向がある。また、溝址3の東側の溝址は全体的に幅広である。検出面からは浅く、またそれぞれの溝址が接しているため、境界が不明瞭な部分もある。底部は丸底状を呈し、壁は緩やかな立ち上がりを示す。埋土はいずれも上層に灰褐色砂質、下層に砂が堆積している。

出土遺物は全体的に僅少である。以下、各溝址毎記述する。

溝址10出土遺物は、振り幅の大きい波状文が施文される弥生時代後期の壺、土師器甕、須恵器甕蓋・坏、灰釉陶器碗、白磁碗、内黒の土師質碗（第10図16）等がある。

溝址11からは縄文時代中期深鉢（第11図１）、土師質皿、山茶碗等が出土している。土師質皿（２）は内面および外面上半はナデ、以下ヘラナデされる。色調は内外面灰黄褐色を呈する。内面に燈芯痕をとどめる。山茶碗（３・４）は灰白ないし暗灰色を呈し、底部回転糸切りされる。４は高台に籾殻痕が看取される。

溝址12の遺物は縄文時代中期の深鉢片、土師器甕、須恵器甕、長頸瓶、灰釉陶器碗、土師質碗、山茶碗系の碗・小皿、打製石斧等がある。土師質碗（６）は底部回転糸切り後ナデられる。山茶碗小皿（７）は胎土緻密で堅緻なもので、1／3程度遺存する。12・13は硬砂岩製で、12はほぼ全面に摩滅がおよぶ。13は基部・刃部とも節理面で欠損する。

溝址11・12重複部分の遺物は土師器甕・鉢、須恵器甕、灰釉陶器碗、土師質皿、山茶碗系の碗・小皿、陶器甕、打製石器、石製模造品等がある。土師器甕（８）はカキメが施される。鉢（９）は底部回転糸切りされる。14は緑色岩製で、刃部を欠損する。15は砂岩製で、表裏面から穿孔され、側面を含めて丁寧に擦り上げられる。

溝址14からは土師質碗（第12図１）１片が出土しているのみである。内外面橙褐色を呈し、底部回転糸切りされる。

溝址16出土遺物には灰釉陶器碗、青磁碗、土師質小皿、山茶碗系の小皿、陶器甕等がある。青磁碗（２）は底部のみの遺存であり、輪花碗である。山茶碗系の小皿（３）は低い高台が付く。

溝址17からは土師質皿１片が出土しているのみである。

溝址19の出土遺物は土師器甕、灰釉陶器碗２片がある。

溝址20出土遺物（５）は小破片で器面荒れが著しいが、縄文が施文されている。６は須恵器壺と思われる。

溝址21からは他の溝址に比較してやや多めの遺物が出土しており、縄文時代中期の深鉢片、弥生土器甕、須恵器壺・甕・坏、灰釉陶器碗、山茶碗系の碗・小皿、陶器甕、黒曜石剥片等がある。弥生土器甕（第12図７）は内面横位・外面縦位のヘラミガキが施される。８は波状文が施文される。いずれも後期に比定される。11～18は山茶碗底部である。11・12は高台に籾殻痕をとどめ、12・15は内面に別個体碗の高台が溶着する。13・18は高台がひび割れる。19～第13図３は常滑の甕片を一括した。第12図20は内面ナデが施されるが、粘土紐の凹凸をとどめる。第13図５～７はいずれも硬砂岩素材であり、打製石斧（６・７）は刃部を欠損する。

出土遺物は各溝址とも縄文時代中期から中世にまでおよんでおり、量的には平安時代末から中世にかけての遺物がやや多い。内容的にみても溝址３と大差ない。

溝址３との位置関係や各溝址の形態・埋土等から、いずれも溝址３から水を取り入れた小規模な用水路と考えられ、一帯の水田への灌漑施設として機能したものであろう。時期は、出土遺物等から溝址３と同様、平安時代末から中世に比定されよう。なお、各溝址の廃絶の時期は、溝址

3とは異なり明確ではないが、中には溝址3廃絶後も存続したものもあったかもしれない。

⑨ 溝址22（付図2、第13図8～17）

調査区中央、103号住居址・溝址21付近で検出された。溝址23・溝状址13と重複する。本址の東側および南側は現在まで機能していた水路により壊されており、一部を検出したにとどまる。幅約130cm、深さ49～52cmを測り、溝址3と平行するように弓なりに曲がっている。底面のレベルは東側が低くなっている。埋土は褐色土であり、底面近くには砂層がある。さらに底面よりやや浮いた状態で、20cm程度の大きさの礫が固まって出土している。北側壁の立ち上がりは急なのに対し、南側壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。底面に根太と考えられる丸太があったことから、石垣を伴った水路と考えられ、底面上位で検出された礫はこれに関連するものと思われる。

出土遺物は縄文土器深鉢片、弥生土器甕、須恵器鉢、灰釉陶器碗、土師質の皿、山茶碗系の碗・小皿、瓶・甕・燈明皿といった陶器類、染付の碗・皿等があり、出土量は少ない。第13図8は内外面暗褐色を呈し、底部はヘラケズリ後ナデられる。9・11は高台に籾殻痕が認められる。12は高台尻に粘土屑が付着する。13は内面に別個体の小皿の高台が溶着し、また高台内部はひび割れる。14は黒釉が施釉される。16は硬砂岩素材で、粗く調整が施され、自然面が多く残る。17は小形ながら有肩扇状形石器と考えられ、全体的に珪化しており、石材は不明である。

遺物の大半は混入と考えられ、形態等から近世以降の水路と考えられる。

⑩ 溝址23（付図3、第13図18～第14図2）

調査区ほぼ中央、西端から南東端を横切るようにして検出された。土坑170・191・199・200と重複する。土坑202付近から水路による攪乱までは検出できず、おそらく上部を削平したためと思われる。中央の確認できなかった部分を含めると、総延長は約87mを測り、西側は調査区外に伸びている。また明確ではないが、南東側も削平を受けている可能性があろう。西端付近は幅が狭く60～80cmであるが、すぐに幅を増し、100～180cmとなり、なおかつ一定でない。わずかに蛇行しており、土坑191付近で方向を変えている。これより西側はN86° W、東側はN80° W方向を示している。深さは12～27cmで、部分的に深く凹むところがある。埋土は明褐色砂層で、深く凹むところでは下部に黒色土がある。壁の立ち上がりの状態は全体的に緩やかであり、底面も中央が一番凹む。傾斜の方向に伸びており、形状・底面の状態・埋土等から自然流路と考えられる。遺物はそれほど摩滅していない。

出土遺物は縄文土器深鉢、弥生土器壺・甕、須恵器甕、山茶碗等があり、出土量は少ない。第13図18は隆沈線により区画文が施文され、中期後半に位置づく。19は櫛状工具による斜位の条痕が施される土器で、晩期と考えられる。弥生土器甕（20・21）は頸部に波状文＋斜走短線が展開する後期のもので、21は斜走短線が2段施される。22は自然釉で外面の平行叩きが不鮮明である。

内面は叩きの後ナデ消しされる。第14図２は全面著しく摩滅しており、表裏面に朱が付着する。

各時期の遺物が出土しており、詳細時期は不明である。

⑪　溝址24・25（付図２、第14図３～10）

調査区南西端、溝址３の南側で検出された。溝址24は土坑 204・ 205と、溝址25は土坑 208と重複する。それぞれ溝址３とほぼ平行する方向に伸びているが、東側は溝址３と重複する。また、溝址24南西側は調査区外に伸びる。溝址24は幅60～140cmで、土坑 204・ 205付近で幅広となる。溝址25は幅30～100cmで、溝址３と重複する付近で幅が著しく増す。深さは溝址24が５cm程度、溝址25は６～11cmを測る。底面は中央で最深を測り、壁の立ち上がりはやや緩やかである。底面付近に砂が検出され、水が流れた痕跡はあるが、人工であるか否かは判断できなかった。形態等から別遺構と捉えたが、両溝址が連続する可能性も少なからずある。

出土遺物は両溝址とも僅少である。

溝址24からは縄文時代中期深鉢片、土師器甕、須恵器甕・坏、陶器片等が出土した。土師器甕（第14図３・４）は内面口縁部横位、外面頸部斜位・以下縦位のカキメが施される。須恵器坏（５）は内外面青灰色を呈する。打製石器（７）は全面著しく珪化しており、石材は不明である。

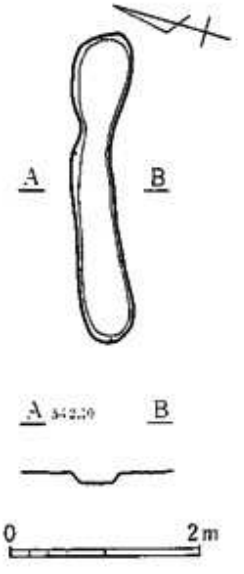
溝址25出土遺物は縄文時代中期土器片、土師器甕、須恵器甕・蓋・坏、灰釉陶器碗片等がある。須恵器甕（８）は外面平行叩き、内面同心円叩き後ナデ消しされる。９は胎土に粗大な石英等を含み、内面は銹が付着する。坏（10）は内外灰色を呈し、外面に火襷がある。

出土遺物が少なく、詳細時期は不明であるが、平安時代の遺物が主体を占めており、この時期に属する可能性がある。

⑫　溝址28（挿図10）

調査区南西端、溝址３と接して検出された。南側の壁が検出されなかったことから、あるいは重複するといった方が妥当かも知れない。南西側は調査区外方向に伸びている。深さ11～15cmを測り、底面はほぼ平坦である。また、壁の立ち上がりの状態はやや緩やかである。埋土は褐色土である。底面の状態から溝址３と別遺構と判断した。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は一切不明である。



挿図11　溝状址1

(7) 溝状址

① 溝状址1（挿図11）

調査区北西側、102号住居址北側に検出された。長さ3.2m、幅約40cmを測り、N72° E方向に伸びる。深さ約10cmで、底部中央で最深を測り、壁は緩やかに立ち上がる。埋土褐色土である。出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

② 溝状址2～13（付図2、第14図11）

調査区中央付近、溝址3周辺で検出された。溝状址2～6は溝址10両側、溝状址8～11は土坑203周辺、溝状址12・13は103号住居址周辺に位置する。溝状址13は103号住居址を切り、溝址22と重複する。幅20～80cm、深さ3～33cmとばらつきがあるが、埋土はいずれも灰色砂である。

出土遺物は溝状址2から出土した青磁碗1点のみである。青磁碗（第14図11）は見込みに陰刻文がある。

位置関係から溝址3およびその周辺溝址と密接な関係を有することが想像されるが、具体的にいかなる機能を果たしたかは不明である。また、時期は出土遺物から溝址群と同時期と考えられる。

(8) 柱列址

バイパス路線内では柱穴列1を検出しているが、本書では遺構の名称を柱列址と変更し、遺構番号のみ続けて付す。

① 柱列址2（付図4、第14図12～14）

調査区北西側で検出された。西側・北東側とも調査区外方向に伸びており、一部を検出したにとどまる。西側は土坑186北側からはじまり、104号住居址の南側を経て溝址23にほぼ並んで伸びる。土坑199と溝址8の中間で北東側に方向を変え、土坑165・179と集石3の間に達する。屈曲部の西側部分は約34mを測り、おおむねN65° W方向を示す。また、北東側部分は約16mで、N35° E方向を示す。径30cm程度の柱穴が一列に並んでおり、その間隔は密接部分で0～10cm程度であり、疎らな部分でも最大60cm程と密集した状態で並ぶ。深さは6～60cmとばらつきがあり、20～30cm程度のものが多い。隣接する柱穴の深さも必ずしも揃っておらず、規則性は見い出だせない。底面の状態は平底状でないものが多く、小柱穴調査の常からすれば、むしろ丸ないし尖底状を呈するものと考えられる。埋土はいずれも漆黒土である。

出土遺物は土師器甕小破片の他、打製石包丁・磨製石包丁・打製石器があり、出土量は僅少である。打製石包丁（第14図12）は半分を欠損し、刃部および背部にロー状光沢が認められる。硬

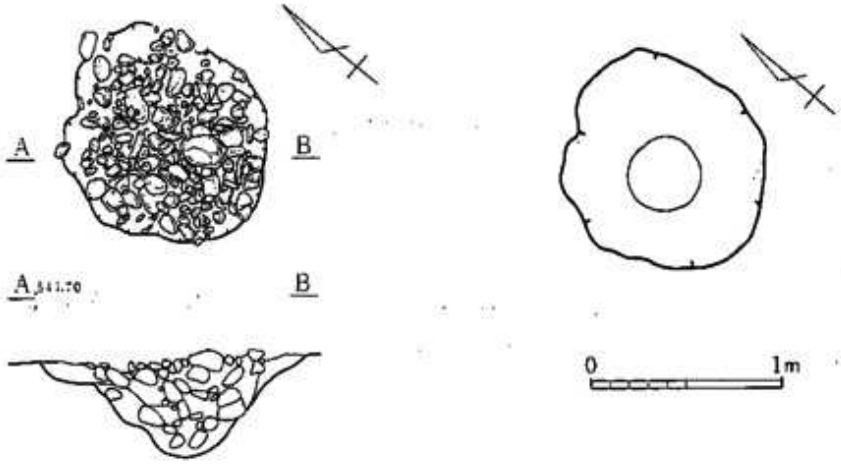
砂岩素材である。磨製石包丁（13）は表面のみ全面研磨がおよぶ。14は基部を欠損し、また、刃部も刃潰れする。変成岩素材と考えられ、全面に鉄分の沈着による赤変がみられる。土師器甕片は混入とも考えられる。

出土遺物からは本址の時期決定は困難であるが、埋土が他の弥生時代後期の遺構と類似することから、本址の時期も同期に求められよう。柱穴の形態等から、丸太杭を打ち込み並べた杭列と考えられる。本址北側には 101・ 102・ 104号住居址や囲溝址５といった弥生時代後期の遺構が分布することから、本址の具体的な機能としては該期集落の周囲の区画があげられよう。バイパス路線内では本址に連続する柱列址は検出されておらず、最も近接した調査部分では毛賀沢川が大きく南側に蛇行していることが判明していることから、集落の範囲はバイパス路線までは達していないといえる。

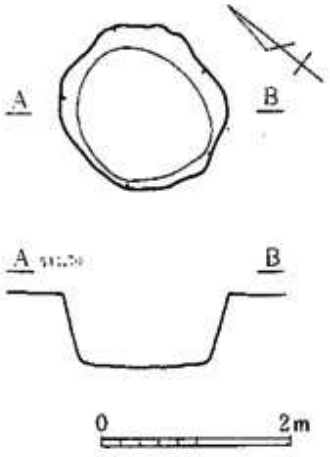
(9) 集石３（挿図12）

調査区北側端、土坑 165・ 166・ 172、竪穴２、柱列址２の間で検出された。130×105cmの不整楕円形の範囲に５～30cmの礫が集中して検出された。埋土は上層から炭混漆黒土、焼土・炭混褐色土、炭混暗黄褐色である。上層の炭混漆黒土下部に焼骨が含まれる。礫は上部には細かいものが含まれ、かつ密集するが、下部では疎らとなり、大型の礫が多くなる。いずれも火を受けて赤変する。掘り方は上部が緩やかなものの、約10cmの深さから摺鉢状に落ち込む。その肩の部分はよく焼けている。深さ52cmを測る。出土遺物はない。

形態等から縄文時代の集石炉であると考えられ、詳細時期は不明であるものの、近接する土坑165から早期末の遺物が出土していることから、この時期の可能性が考えられる。



挿図12　集石3



挿図13　井戸1

⑩　井戸

①　井戸１（挿図13）

調査区北側、土坑 165、溝址８・９、柱列址２に囲まれて検出された。径が大きく、側壁がほぼ垂直に立つことから素掘りの井戸と考えたが、他に井戸であることを示す特徴はない。1.8×1.4mの不整楕円形を呈し、深さは78cmを測る。底部中央はやや低く凹む。掘り上げた後、しばらく水を湛えた状態が続いた。埋土は大部分褐色土である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

⑪　その他

①　柱穴群（付図５～９）

調査区のほぼ全面にわたって、径20～50cm程の柱穴がたくさん検出されている。大部分は径30cm程度を測り、深さはまちまちである。いくつかまとまる部分があり、なかには建物址や柵址等を構成するものもあるかと考えられるが、規則性は見い出せず、詳細は不明である。埋土は褐色土のものがほとんどで、黒褐色土のものも少なからずある。出土遺物はほとんどなく、時期等不明である。

②遺構外出土遺物（第15・16図、第17図３～６）

A土器

a　縄文時代早期（第15図１）

該期の遺物は１点のみである。外面は斜位に条痕が施されており、繊維を含んだ脆い土器である。早期末に位置づく。

b　縄文時代前期（第15図２）

２は隆帯上下縁を半截竹管による平行押し引き沈線が施される。内外面黄褐色、断面黒色を呈する。細かい石英等含む焼成やや不良な土器である。

c　縄文時代中期（第15図３～９）

該期の遺物はほとんどが小破片であり、出土量は少ない。３・４は櫛状工具による細かい条線が施される土器で、平出第Ⅲ類aに比定される。６は隆帯の上下端に押し引き沈線が施される。７は口縁直下に隆帯が付され、その下位に縄文が施文される。８は口縁端面に刺突、外縁に刻みが施され、内外黒褐色を呈する。

d　縄文時代後期（第15図10）

10は滑車形の耳栓で、内面の凸帯上に刻みが施される。また、内面は朱彩される。内外橙褐色を呈し、１／４程度遺存する。後期に属するものと考えられる。他に口縁に受け口状の小突起のつく鉢、隆帯上に刻みが施される鉢がある。

e　弥生時代後期（第15図11～16）

壷（11）は頸部に櫛描横線文が、甕（14・15）は櫛描波状文＋斜走短線が施文される。甕（12・13）胴部の調整は縦位のヘラミガキで、13は底部に木葉痕をとどめる。高坏（16）は脚上部に絞り痕があり、内外面橙褐色を呈し、器面荒れしている。

f　平安時代～中世（第15図17～26）

須恵器蓋・坏、灰釉陶器碗、土師質の皿、山茶碗系の碗・小皿、陶器甕・天目茶碗・擂鉢等がある。17は外面に一条の沈線が巡らされ、内外面ナデ調整される。山茶碗系の碗・小皿（19・21・22）は高台部に籾殻痕をとどめる。20は内面に墨が付着し、見込み部分の摩滅が著しいことから転用硯と考えられる。21は高台にひび割れ、22は内面に別個体の溶着した高台がある。常滑の甕片（23）は肩部に灰が被り、内面はナデ調整されるが、凹凸をとどめる。天目茶碗（25）は黒色釉が施釉され、高台に花文が印刻される。

g　近世（第15図27・28）

磁器は染め付け皿（第15図28）が出土している。

B石器（第16図、第17図３・４）

石器は詳細時期等不明であり、形態に基づいて記述する。

第16図１は表皮を取り去っており、刃部を欠損する。３は使用により刃部が破損する。両側縁に潰しが施される。４は表面刃部付近から中央にかけて摩滅が認められる。５は自然面を大きく残した剥片を素材としており、いわゆるロー状光沢は認められない。７は緑泥岩製で刃部付近が摩耗する。１～６・９は硬砂岩を素材とする。

有肩扇状形石器（10）は 103号住居址から混入出土したもので、調整は抉り部および背部に施される。硬砂岩製で、弥生時代後期の遺物である。

敲打器（12）は上・下端に作業痕と思われる敲打痕が認められる。

12はホルンフェルス化した砂岩を用いた砥石で、当擦型である。

第17図 3 は黒曜石製、4 は身が分厚い尖頭状の石器で石英脈岩と思われる。

C金属製品（第17図5・6）

第17図 5 は鉄鏃の刃先で、錆化が著しく進んでいる。6 は中央の水路による攪乱から出土した寛永通宝である。

Ⅳ まとめ

殿原遺跡では、一般国道 153号飯田バイパス建設に先立つ緊急発掘調査で弥生時代後期の大集落の一画が調査されており、その広がりが今次調査地点までおよぶと考えられる等、今次調査に寄せる期待は大であった。調査の結果は前述のとおりであり、弥生時代後期集落の分布状況がある程度把握され、様々な調査事実が積み重ねられたわけである。しかし、その一方で、明らかにされた点に倍する多くの問題が新たに投げかけられたことも事実であり、これまでの調査成果や問題点のいくつかを時代を追って整理することで総括としたい。

(1) 縄文時代

今次調査では縄文時代早～後期の遺構・遺物がごく断片的に検出されている。

早期後葉の遺構と考えられるものは土坑 165の一部で、他に集石 3 も該期の可能性がある。調査区北側端に位置しており、これより北側調査区外に該期集落の展開を示唆する。遺物は土坑 165出土のものを含めても数点どまりで、いずれも小破片である。やや薄手であるが、柏畑式に比定される土器で、繊維を多く含んでいる。この時期の遺構・遺物は市内ではわずかに恒川遺跡群等で確認されているのみで、その詳細は明らかではない。

前期終末から中期初頭にかけての本遺跡は、これまで竪穴住居址や土坑の散在的な分布状況が把握されており、今次の調査でもこうした状況が追認された。 103号住居址の内容等を併せ考えると、定住的な要素は少ないといえる。中期後半についても、バイパス路線内で孤立して 1 軒の住居址が調査されているのみで、今次調査地点ではその痕跡は皆無に等しい。未調査部分に集落の中心がある可能性を残すとはいえ、他時期の遺構分布状況を考慮すると、それほど大きな集落展開は考え難い。

続く後期については、バイパス路線内で初頭から前半の配石・土坑群のほか 4 軒の竪穴住居址が調査されており、該期の良好な調査事例であった。そこで当初、今次調査では該期集落の検出が期待されたわけであるが、断片的な遺構の確認にとどまった。土坑の分布は疎らであり、むしろ集落の周縁的な状況を示すともいえる。ただ、遺物の面では割合大きな土器も出土しており、良好な資料を提示している。

このように、今次調査地点では縄文時代を通じて遺構・遺物の散漫な分布が確認されたわけであり、調査前に予想された状況とは様相を異にしている。バイパス路線との間や遺跡の南側に未調査部分を多く残していることから、各時期の集落の中心はこうした部分に求めることも可能であり、とすれば、今次調査地点は集落の縁辺部分に相当するといえよう。

しかし、一面、遺跡全体での散在的な遺構分布を予想する余地も残されている。それは毛賀沢

川を挟んで、やはり高位段丘上に立地する鼎地区田井座遺跡の縄文時代を通じての姿と似通っている。田井座遺跡では数次の緊急発掘調査の結果、かなり具体的に遺跡の変遷が把握されている。そこでは前期初頭に5軒程の集落が営まれるが、他の時期はいずれも遺構・遺物の分布が疎らである。両遺跡に散在的な遺構分布状況が認められるとすれば、その背景はおそらく、両遺跡を取り巻く環境の収容力や、各時期の周辺集落との間に存した様々な関係等に求められよう。

(2) 弥生時代

これまで限られたバイパス路線内の調査にも関わらず弥生時代後期の90軒もの住居址が調査されており、本遺跡を特徴づける時期であることはいまさらいうまでもない。今次調査でも住居址の密集が予想され、該期の大集落の広がりがある程度把握されることが期待されたわけである。今次調査における住居址の分布は調査地点の北西側に限られ、他の遺構についても同様である。住居址の分布は疎らであり、集落の周縁的状況を示すともいえる。

しかし、注目すべきは柵列と考えられる柱列址2の存在である。遺構の検出状況からすれば、住居址を取り巻いて一周ぐるりと柱列が巡っていると思われる。こうした区画施設はバイパス路線内の調査では検出されておらず、両調査地点の中間に柱列址の北辺と東辺の残り部分がある可能性が高い。つまり、バイパス路線内で調査された集落とは柱列址により画されていたと判断でき、単純に連続する集落とは考え難く、集落での性格を異にする構成単位の存在もしくは、集落そのものが異なることも考えられる。とすれば、今次調査地点における散在的な分布状況は単に集落周縁部の遺構配置を示すのではなく、それなりの意味を有する集落景観としてそれぞれの遺構があったといえる。現在のところ、今次調査された住居址の年代は先に調査された遺構の年代幅の中に収まると理解しているが、近接した位置で異なる規模や形態による複合的な集落が存在していたといえる。

また、これまで調査された遺構全体図（付図1）をみると、路線内の中央部には毛賀沢川が大きく蛇行して切れ込んできており、今次調査地点はこのすぐ南側に位置する。路線内の集落は毛賀沢川と周囲を柱列址に画された集落によって分断された格好であり、これまで一連の集落と理解されていたのとは反する様相を示し、三つの細分される集落により構成を考えることができる。

すでに田井座遺跡等で指摘されているように、飯田地区では後期後半の集落には大別して二つのタイプがある。主に低位段丘上に立地する山岸遺跡等の密集型の大集落と、主に扇状地や高位段丘上に立地する田井座・猿小場遺跡等の散在型の集落である。バイパス路線内で調査された集落は、二つに分かつことが可能にしてもなお規模が大きく密集しており、前者に含められるのに対し、今次調査されたのは後者に比定される。ただ、周囲が画される点、田井座遺跡と異なる。同じ高位段丘上に近接して異なったタイプの集落が併存する事実は、当時の社会・生産関係等を解明する上でさまざまな問題を投げかけるといえよう。

本遺跡では、これまでのところ方形周溝墓が1基調査されている。今次調査では墓壙・方形周溝墓といった遺構は検出されておらず、墓域の把握はできなかった。遺跡全体では未調査部分を多く残しており、こうした部分に墓域の検出が期待されるわけである。今後、墓域や生産基盤を含めた集落の分析の中で、本遺跡の内容がさらに明らかにされ、また、該期の代表的な遺跡であるが故に飯田・下伊那の該期社会の特質が解明されるといえる。

(3)平安時代末～中世

バイパス路線内の調査では古墳時代後期初頭の住居址が確認されているが、今次調査では弥生時代以降平安時代末まで人々の居住した具体的な痕跡は見い出せない。

今次の調査で特筆される遺構として溝址3とこれに関連する溝址・溝状址等の遺構がある。まず、溝址3はその形状・規模等飯田市内ではこれまで知見がない。さらに、堰と考えられる方形の掘り込み・柱穴や大溝から各々の耕地に水を分配する小規模の溝址群が同時に検出されたことは重要である。溝址3等は出土遺物から11世紀後半にはすでに開削されていたと考えられ、古代末における土木技術の到達点と、これを成し得る勢力の存在、そして時代背景をも示している。

すでに指摘されているとおり、平安時代中期以降の水田開発の主要な方向が山麓・扇状地に向けられ、谷池築造と山麓・山腹の用水路の掘削が用水確保に不可欠であった（三浦 1984)。溝址3の規模からしてこれに見合った大規模な谷池築造がなされたことは疑いなく、また、扇状地の地形的制約から土樋・木樋の利用は当然考えられるところある。いわば、当時の測量・土木技術を駆使して開削されたといえる。その結果、伊賀良地区ではそれまで扇状地の扇端付近や小河川に沿った湿地を基盤として小規模な集落が営まれていたものが、可耕地の増大によって平安時代後期には集落数や規模の飛躍的増加がもたらされたといえよう。

伊賀良庄はその成立の年代は判然としないが、11世紀中葉にはすでに成立していたとされ、11・12世紀を中心とする寄進地系の荘園成立の全国的な流れの中に位置づけられ、その背後には寄進主体である在地の領主の存在が窺える。おそらく、その開発主体は在地領主ないしは領家から派遣された荘官であり、寄進の一因には広大な山麓・扇状地の開発を荘園領主の経済的・技術的援助に期待したことがあると思われる。

今次調査地点は伊賀良井（大井）と毛賀沢川の間に位置し、また、南沢川とも近接した位置にある。南沢川は、現在毛賀沢川に合流しているが、これは享保10（1725）年の工事によるものであり、以前は南側のアマヅラ沢川方向に流れていたとされる（筒井 1973)。位置関係からすれば南沢川から引かれたものと考えたほうが無理がないが、南沢川からは古井筋が別に引かれたことが確認されている。溝址3の模模が大井のそれに匹敵する等の点から大井に関連するものであることはまず間違いなかろう。とすれば、大井は本遺跡南西側まで引かれ、ここから方向を変えて毛賀沢川に落とされていたと考えられる。溝址3が開削された年代から、少なくとも、11世紀後

半には大井が上殿岡地籍まで引かれていたといえる。あるいは、承保元（1074）年、奥山平太夫が伊賀良井の開発に着手したとの記事があり、なんらかの関連があるかもしれない。大井の開発が平安時代にまで遡ると同時に、伊賀良庄の成立・発展と密接不離の関係にあったと考えられる。

平安時代後期に大井が上殿岡地籍で方向を変え毛賀沢川に水落としされたことについては、ひとつには地形的制約が考えられる。本遺跡南側は周辺より約1.5m高くなっており、この部分を開削することは相当な困難を伴ったであろう。また、ひとつには開発領主の存在があげられよう。鎌倉時代には伊賀良庄地頭北条江馬氏の地頭代四条金吾が「とのおか」の地に居を構えたとされ、さらに、今次調査地点南側には居館を示す「堀ノ内」の地字が残る。「堀ノ内」は溝址3とは距離にして2～300m離れており、溝址3が居館址の一部と考えると、かなり大規模な居館ということになり即断はできない。また今次調査地点では居館を示す遺構・遺物は未検出である。しかし、中世前期においては居館は軍事機能とともに灌漑機能をもつ堀を備えており、開発の拠点であった（村田 1984）ことが知られており、溝址3南壁側に検出された三角形状の張り出しもあるいは防御的機能を持つ施設と理解することも可能かもしれない。

溝址3はその埋没状況から徐々に埋まっていったとは考え難い。また、その廃絶の時期は開削時期に比べさらに不分明であるが、中世のうちに位置づくことは確かであろう。おそらく、このことはその後大井が延長されていき、水落としの機能が先線部分に移されたため、溝址3の本来の機能が失われたことを意味しよう。その大井延長の時期を論ずることは困難であろうが、想像が許されるならば、小笠原氏が勢力を延ばした南北朝期以降のことと考えられる。

いずれにせよ、本遺跡は伊賀良庄の形成過程や井水の開発歴史、北条一族や信濃国守護小笠原氏の勢力基盤として中世を通じて伊賀良庄が果たした役割等様々な問題を解明する上で重要であることは疑いない。しかしこれまでのところ得られた調査結果は断片的であり、その全容を解明するには至っていない。今後周辺地点や上位段丘面に立地する同時期の他遺跡の調査が進む中で、次第に明らかにされていくものといえる。

今次調査の結果、縄文時代・弥生時代および平安時代後期から中世について、いくつかの新知見を加えることができたが、なお遺跡の全体像を呈示するのは困難である。今後周辺地域の調査が進展するに伴ない、本遺跡の位置づけがなされると考える。

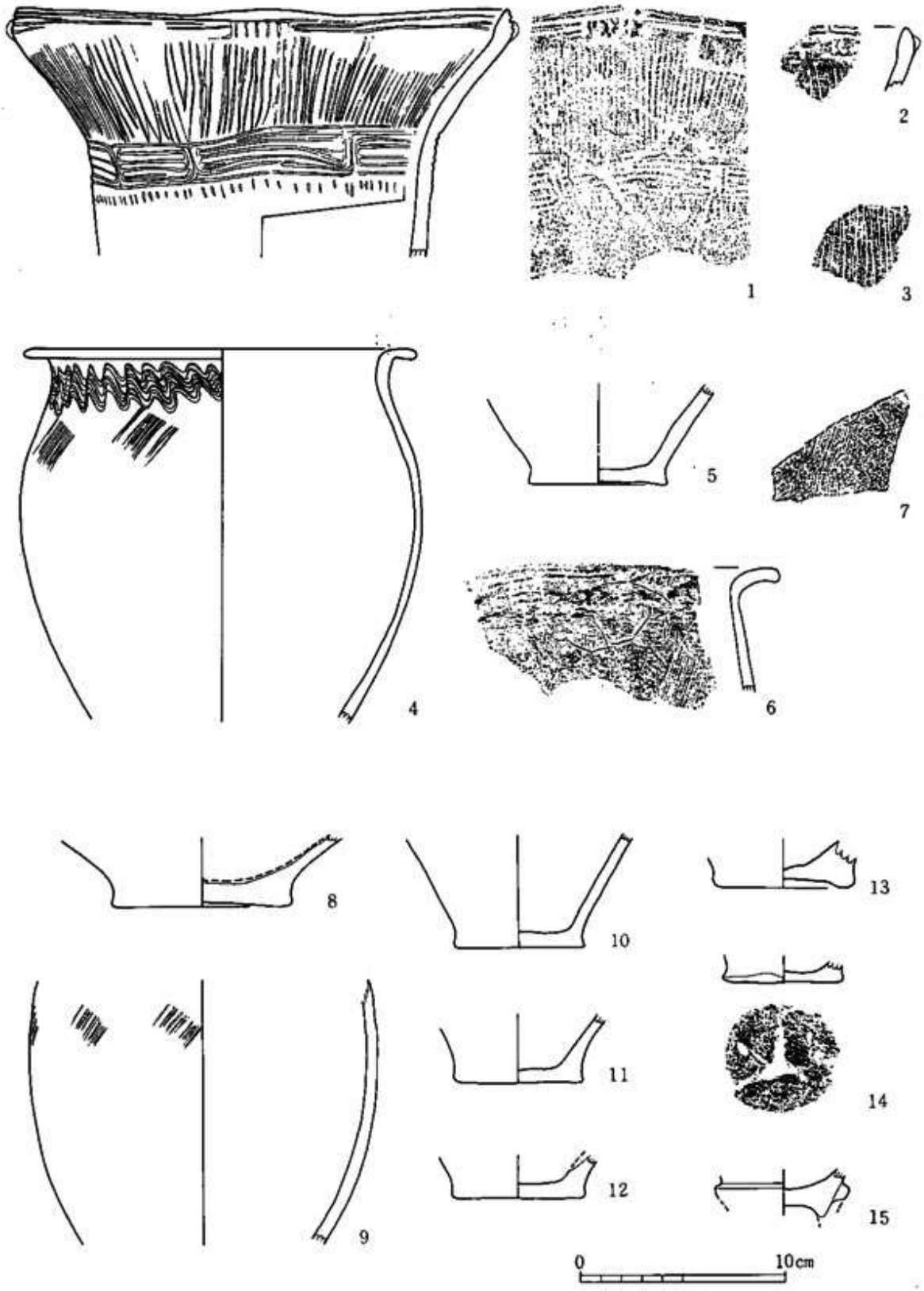
最後に、株式会社カインズにおかれては文化財保護の本旨に厚い御理解をいただき、調査の実施にあたって多大なる御高配・御協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

≪引用・参考文献≫

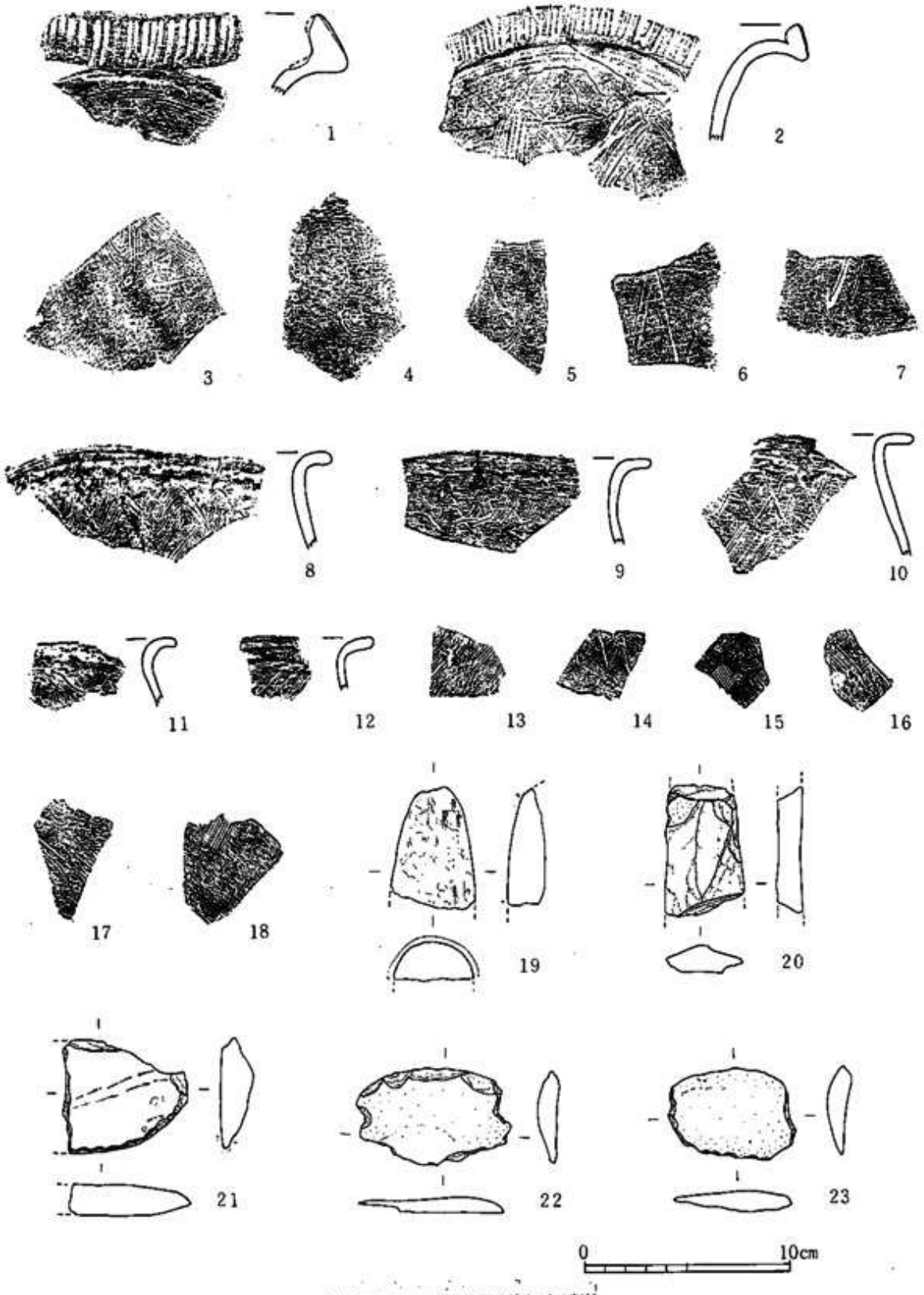
飯田市教育委員会　1977　『伊賀良中島平』
飯田市教育委員会　1978　『伊賀良宮ノ先』
飯田市教育委員会　1980　『猿小場遺跡』
飯田市教育委員会　1983　『酒屋前遺跡』

飯田市教育委員会　1983　『鳥屋平』
飯田市教育委員会　1987　『飯田垣外・火振原・梅ヶ久保遺跡』
飯田市教育委員会　1987　『殿原遺跡』
飯田市教育委員会　1988　『田井座遺跡』
飯田市教育委員会　1988　『小垣外・八幡面遺跡』
飯田市教育委員会　1989　『下原遺跡』
飯田市教育委員会　1989　『高野遺跡』
飯田市教育委員会　1990　『細田北遺跡』
飯田市教育委員会　1991　『田井座遺跡・一色遺跡・名古熊下遺跡』
飯田市教育委員会　1991　『田井座遺跡』
飯田市教育委員会　1991　『大原遺跡』
飯田市教育委員会　1991　『公文所前遺跡』
飯田市教育委員会　1991　『直刀原遺跡』
飯田市教育委員会　1991　『橋明古墳』
下伊那史編纂委員会　1955　『下伊那史　第2巻』
下伊那史編纂委員会　1955　『下伊那史　第3巻』
下伊那史編纂委員会　1967　『下伊那史　第5巻』
下伊那史編纂委員会　1991　『下伊那史　第1巻』
下伊那教育会編　1985　『親と子の下伊那史』
中央道遺跡調査会　1972　『中央道調査報告　－飯田地区その2－』
中央道遺跡調査会　1973　『中央道調査報告　－飯田地区－昭和45年度』
長野県史刊行会　1983　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（中・南信）』
長野県史刊行会　1986　『長野県史　通史編　第2巻　中世1』
長野県史刊行会　1987　『長野県史　通史編　第3巻　中世2』
長野県史刊行会　1988　『長野県史　考古資料編　遺構・遺物』
長野県史刊行会　1989　『長野県史　通史編　第1巻　原始・古代』
大石直正　1984　「荘園公領制の展開」『講座日本歴史3　中世1』
神村　透　1968・69　「立野式土器の編年的位置について(1)～(7)」『信濃』20巻10号～21巻7号
神村　透　1982　「立野式土器の編年的位置について（完）」『信濃』34巻2号
筒井泰蔵　1973　『伊賀良村史』
伴　信夫・宮沢恒之　1967　「長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告」『信濃』19巻12号
松島　透　1957　「長野県立野遺跡の撚型文土器」『石器時代』4
三浦圭一　1984　「中世の土木と職人集団」『講座・日本技術の社会史　第6巻　土木』
村田修三　1984　「中世の城館」『講座・日本技術の社会史　第6巻　土木』

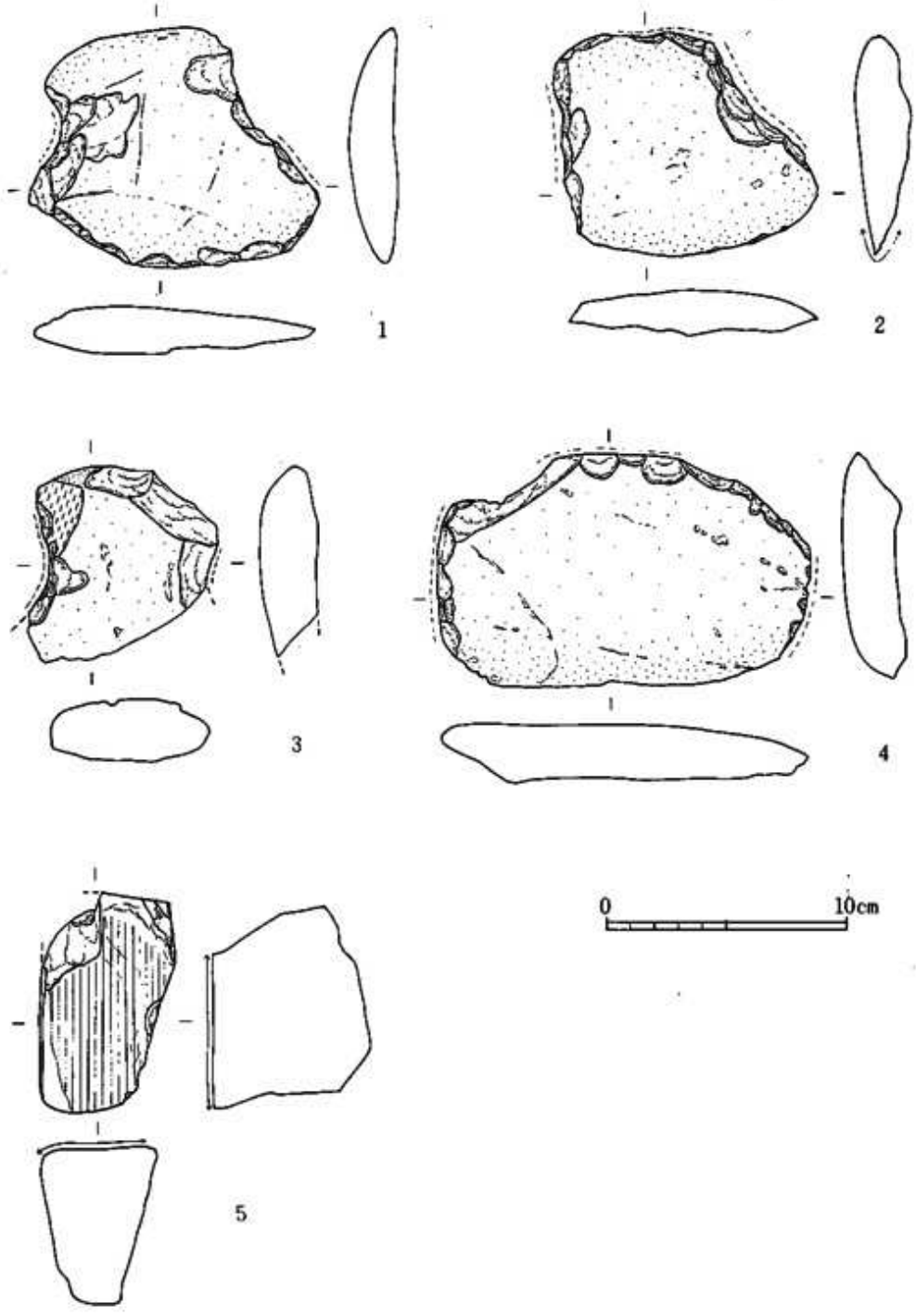
図　　版



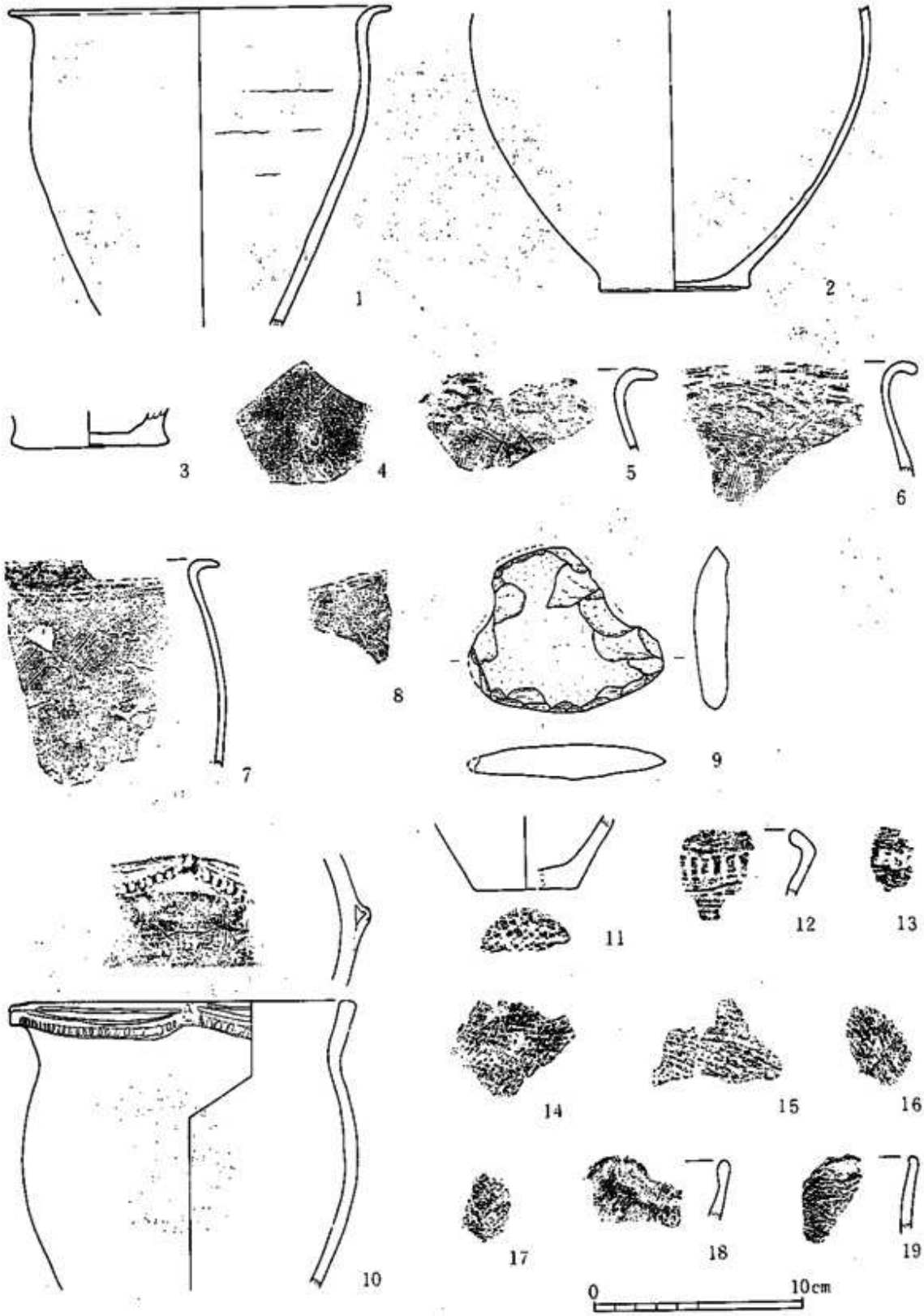
第1図　103・101・102号住居址出土遺物（1～3 103住　4～7 101住　8～15 102住）



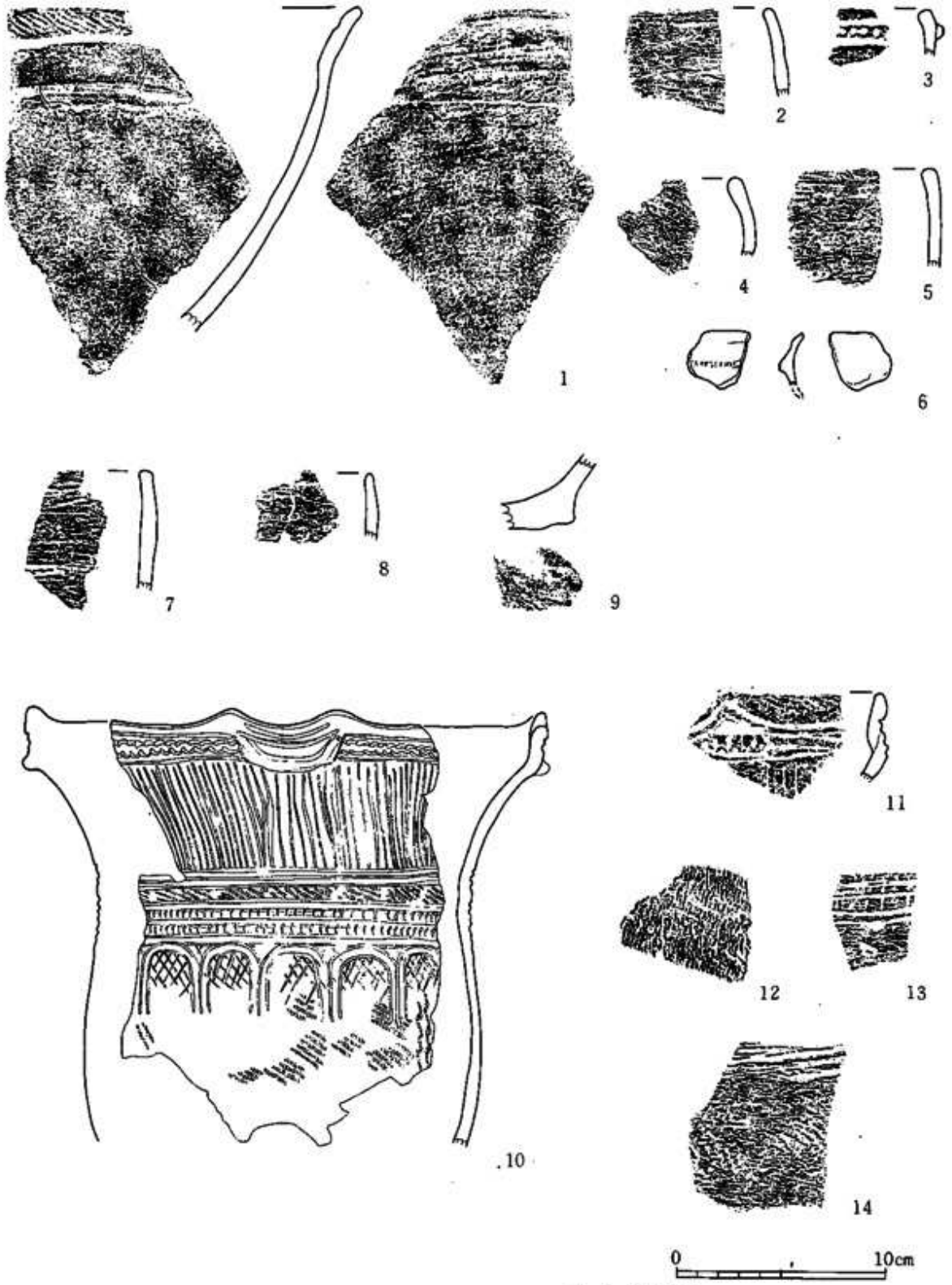
第2図　102号住居址出土遺物



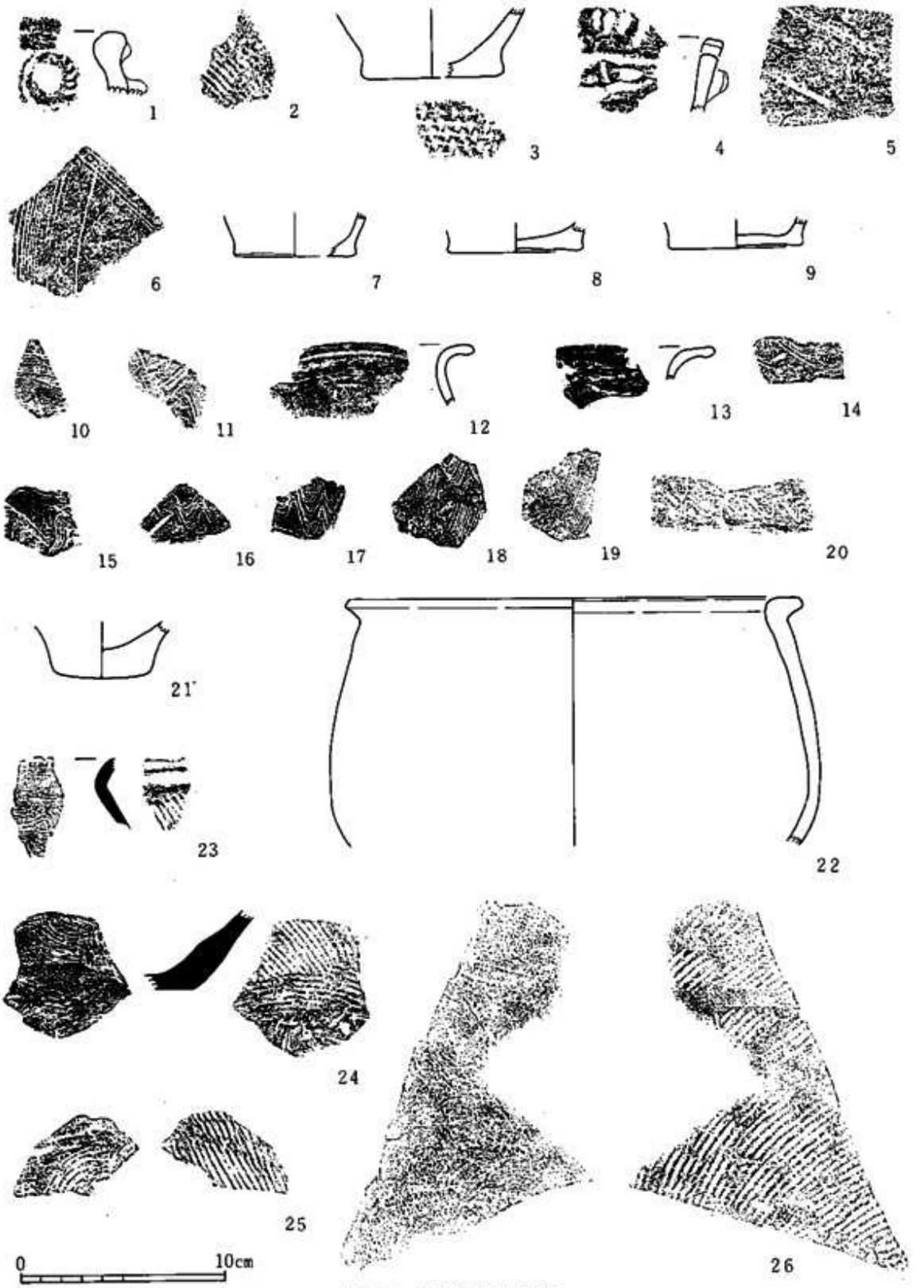
第3図　102号住居址出土石器



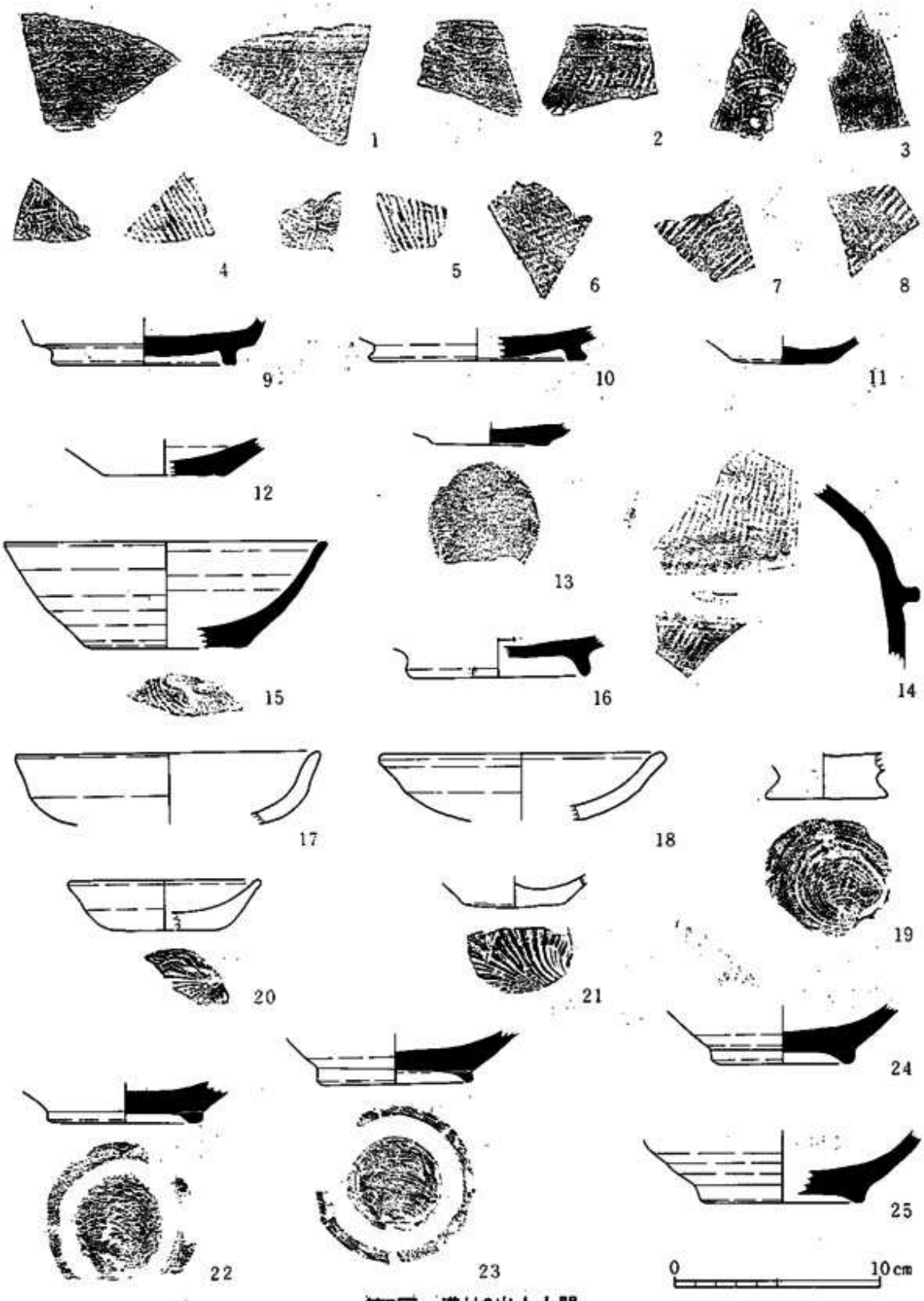
第4図　104号住居址、土坑165出土遺物（1～9 104住　10～19 土坑165）



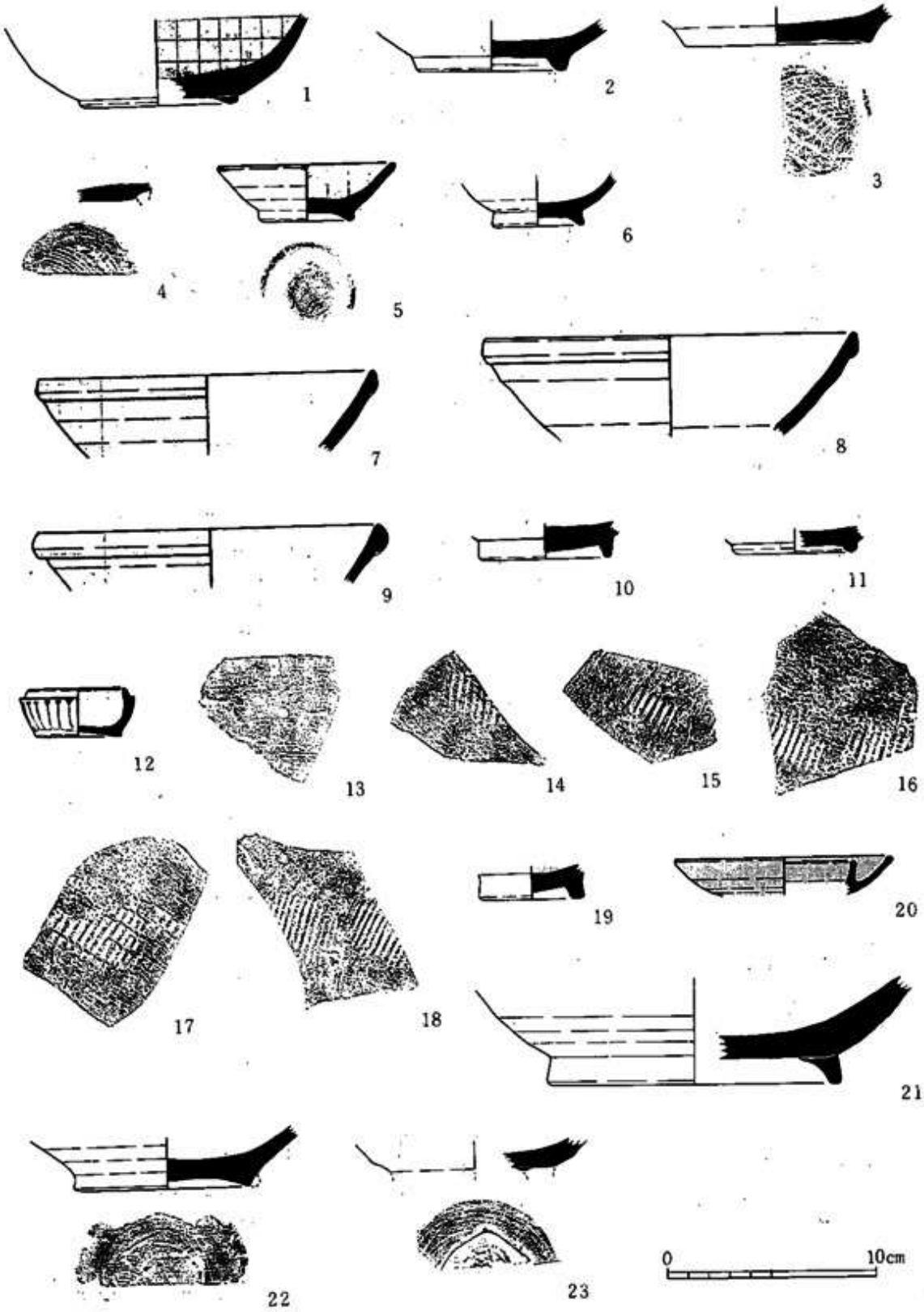
第5図　土坑165・166・171出土遺物（1～6 土坑165　7～9 土坑166　10～14 土坑171）



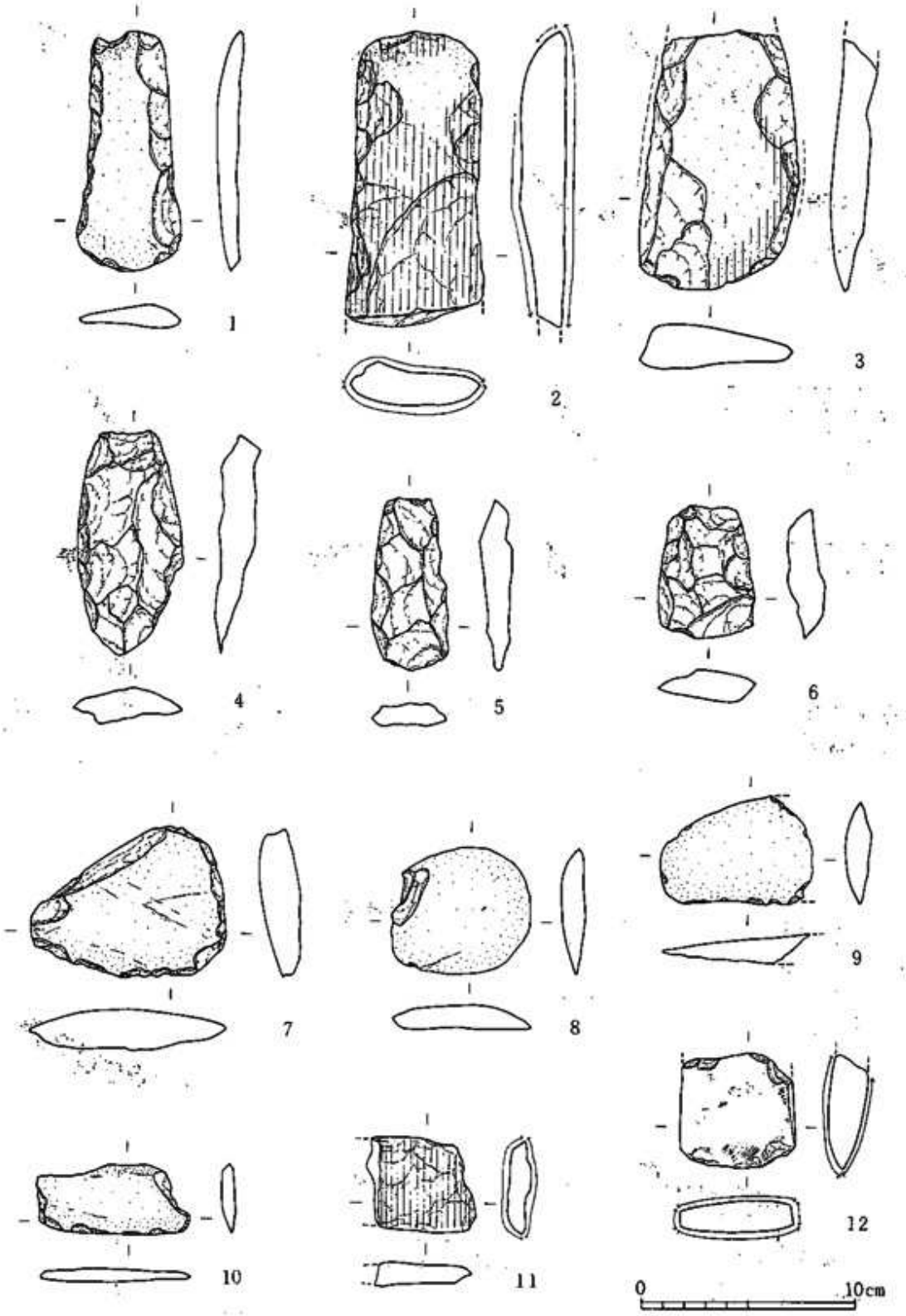
第6図　溝址3出土土器



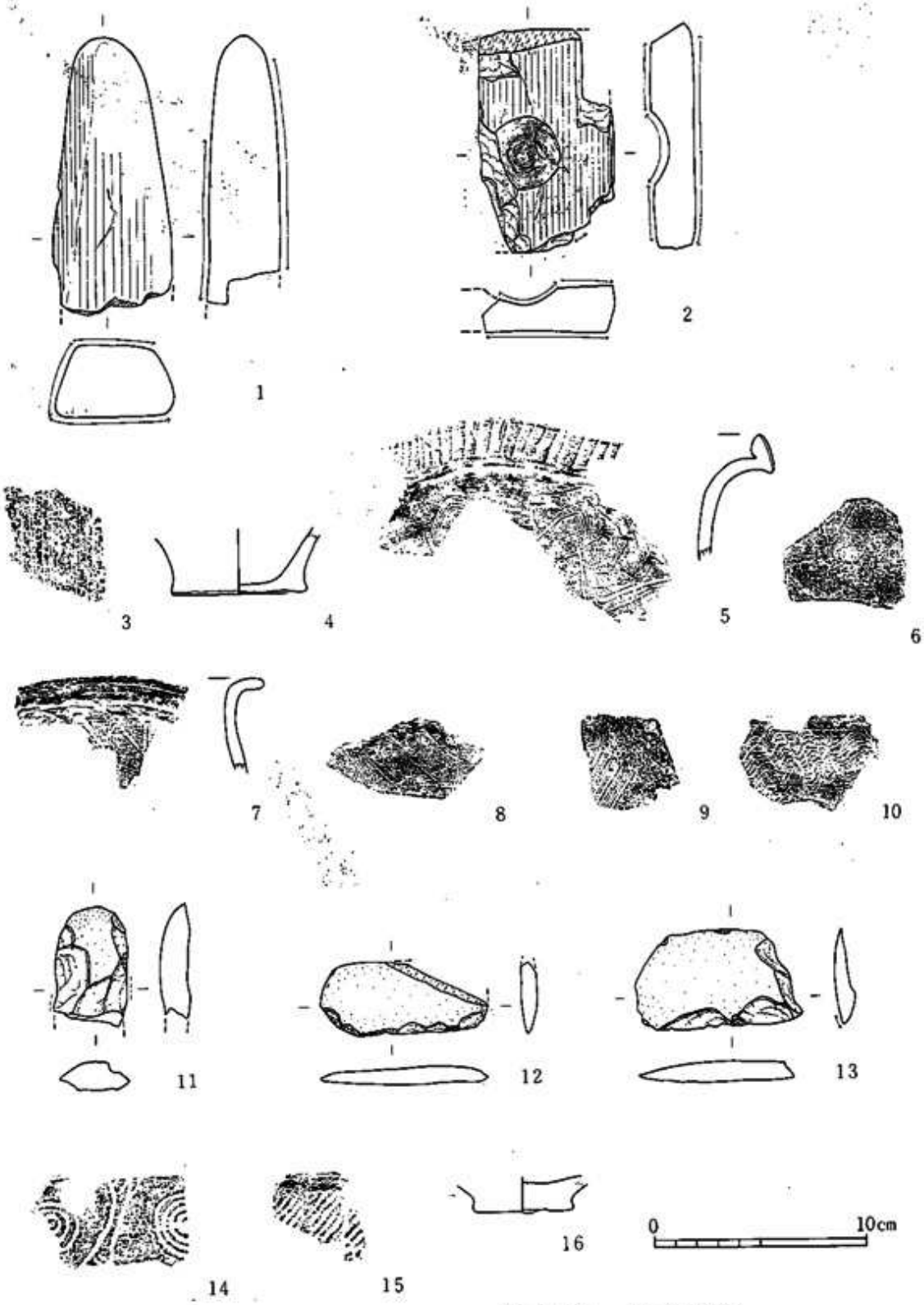
第7図　溝址3出土土器



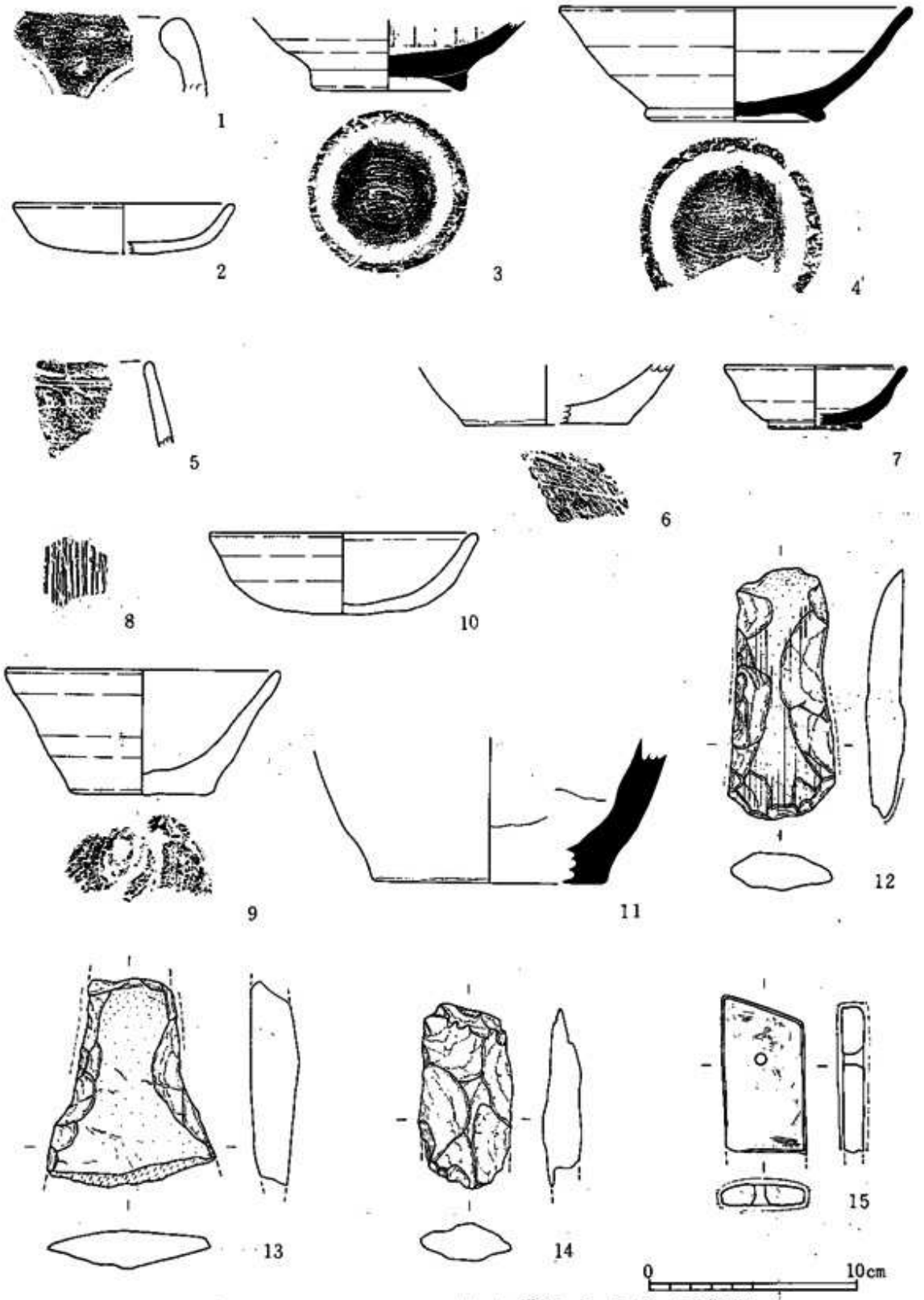
第8図　溝址3出土土器



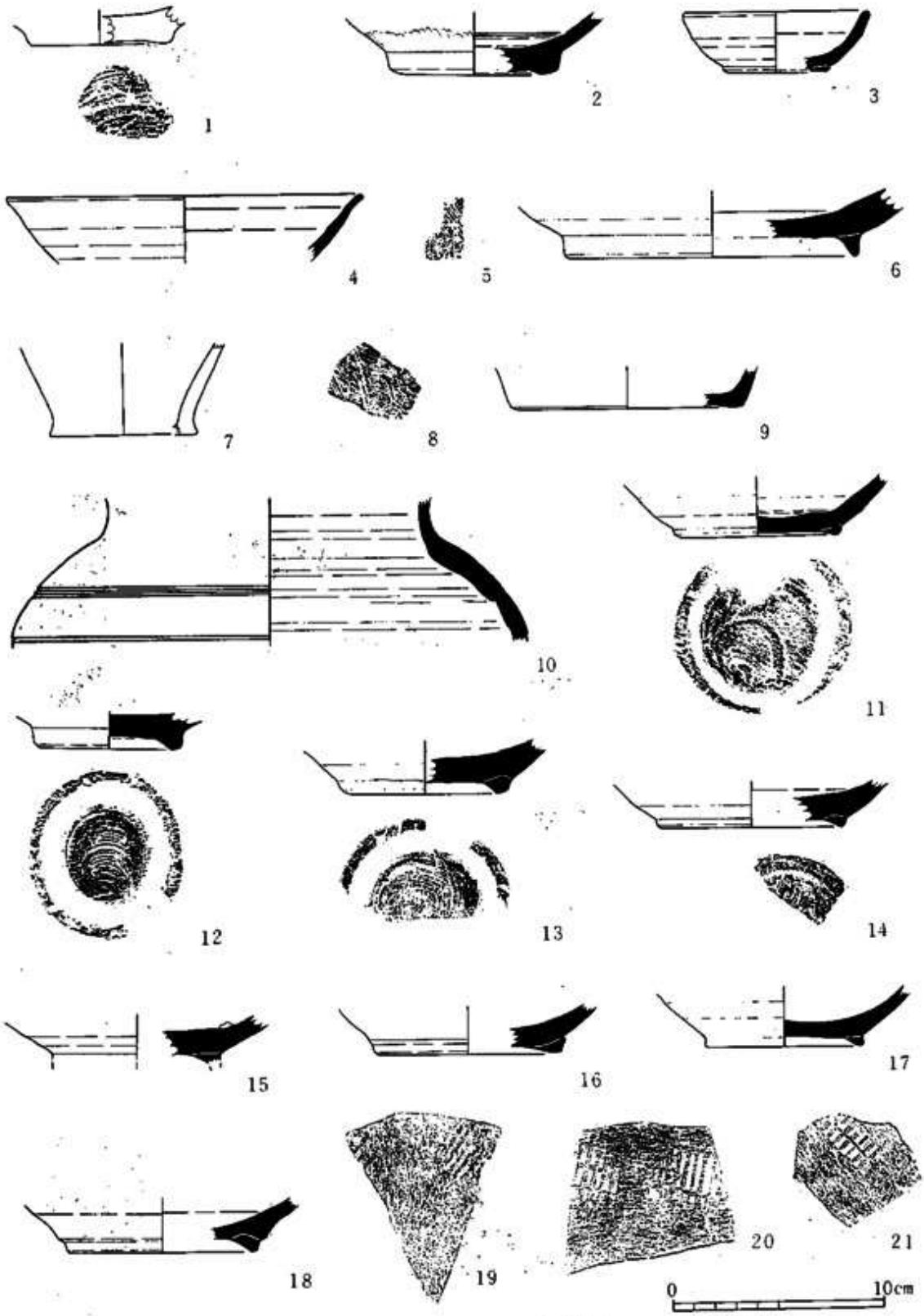
第9図　溝址3出土土器



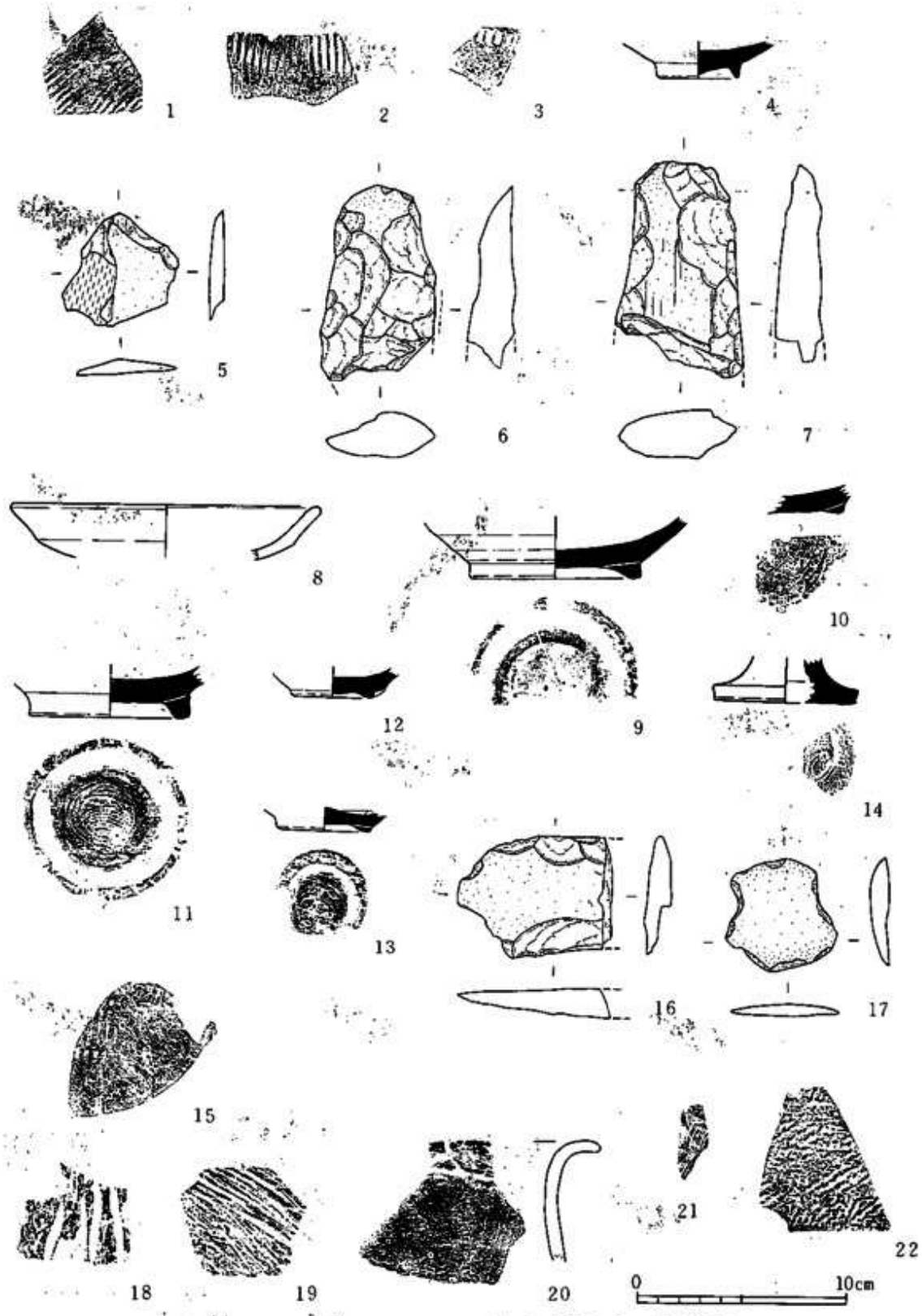
第10図　溝址3・8～10出土遺物（1・2 溝3　3～13 溝8　14・15 溝9　16 溝10）



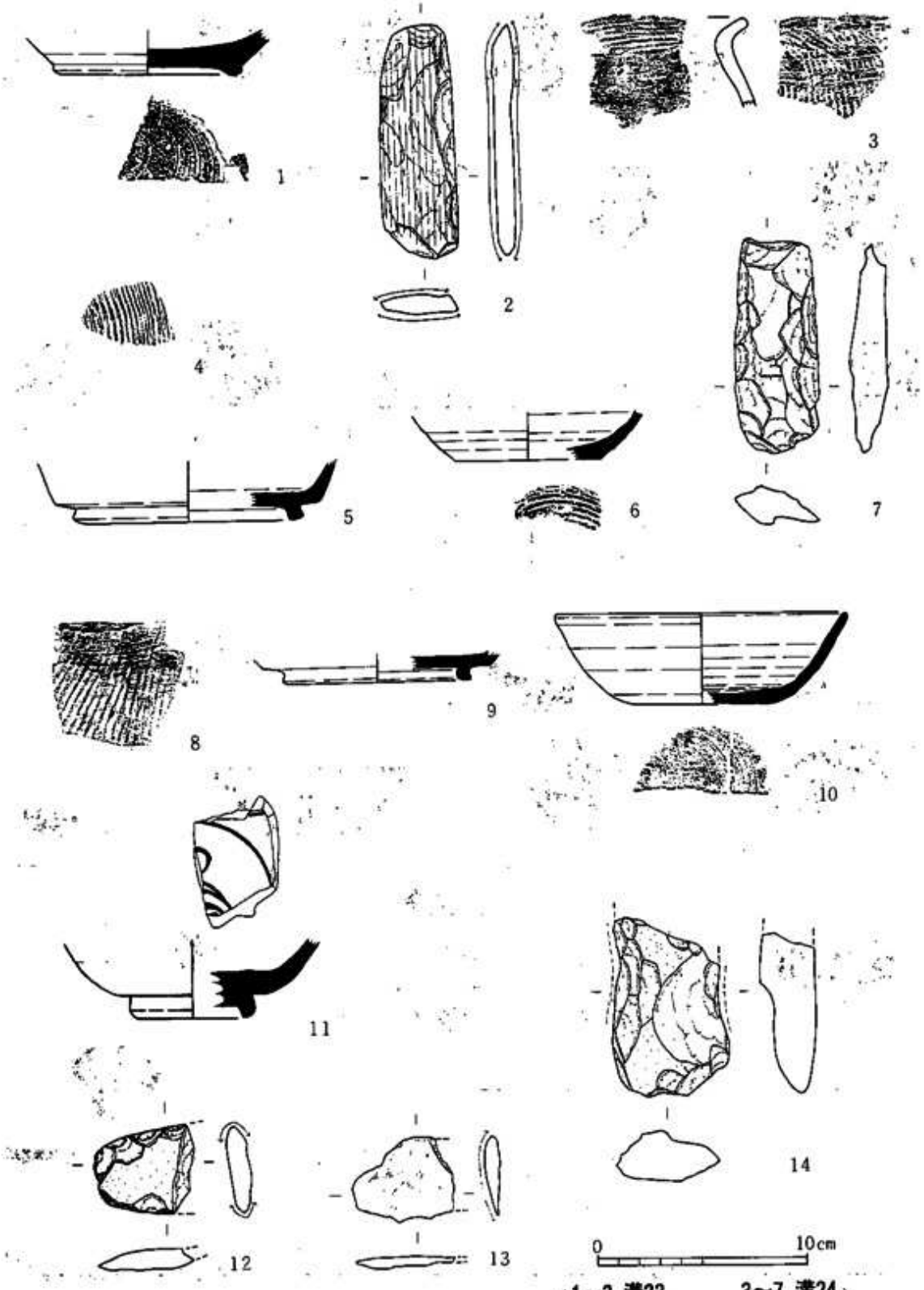
第11図　溝址11・12出土遺物（1～4 溝11　5～7・12・13 溝12　8～11・14・15 溝11・12）



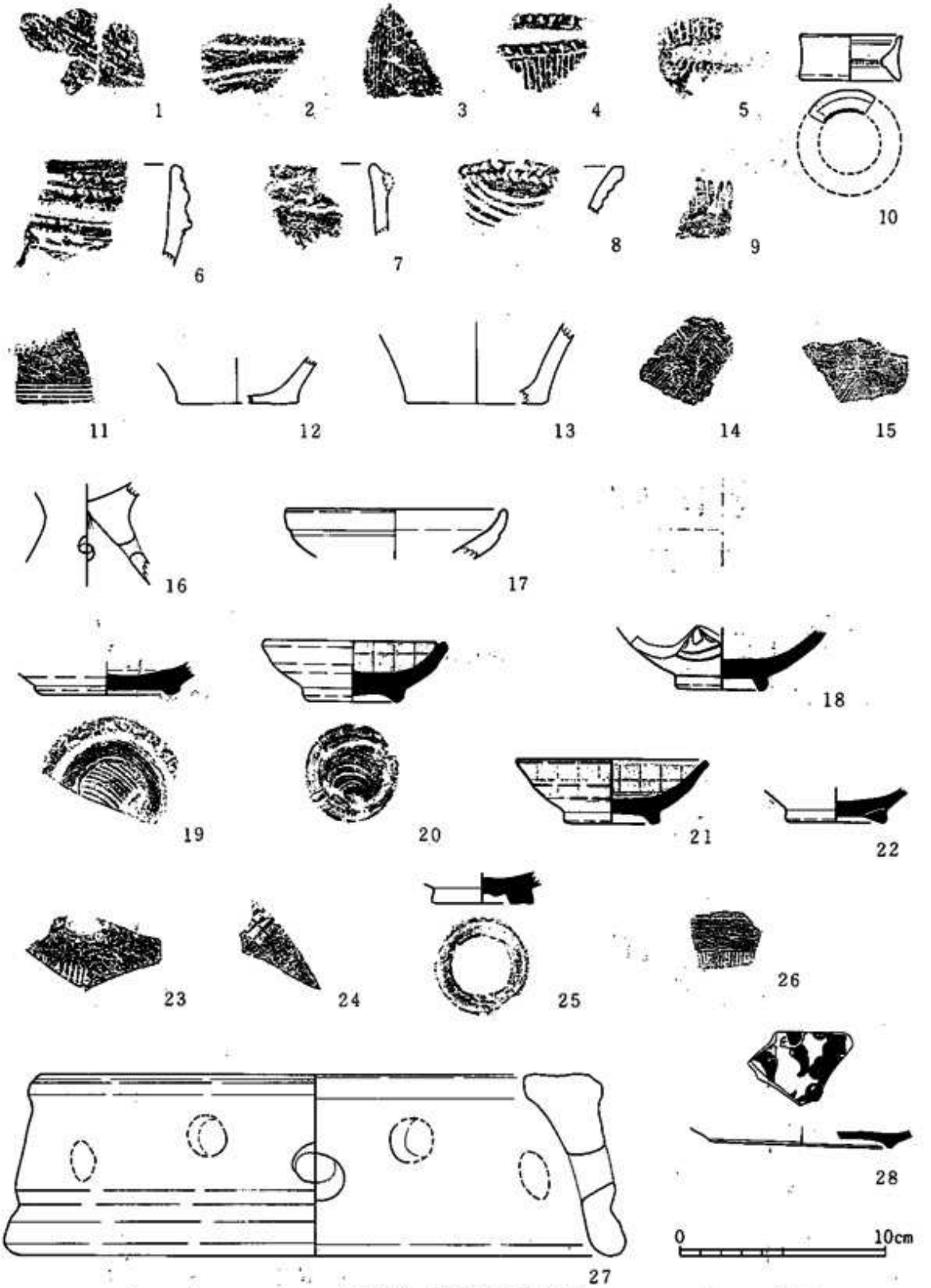
第12図　溝址14・16・17・20・21出土土器（1 溝14　2・3 溝16　4 溝17　5・6 溝20　7～21 溝21）



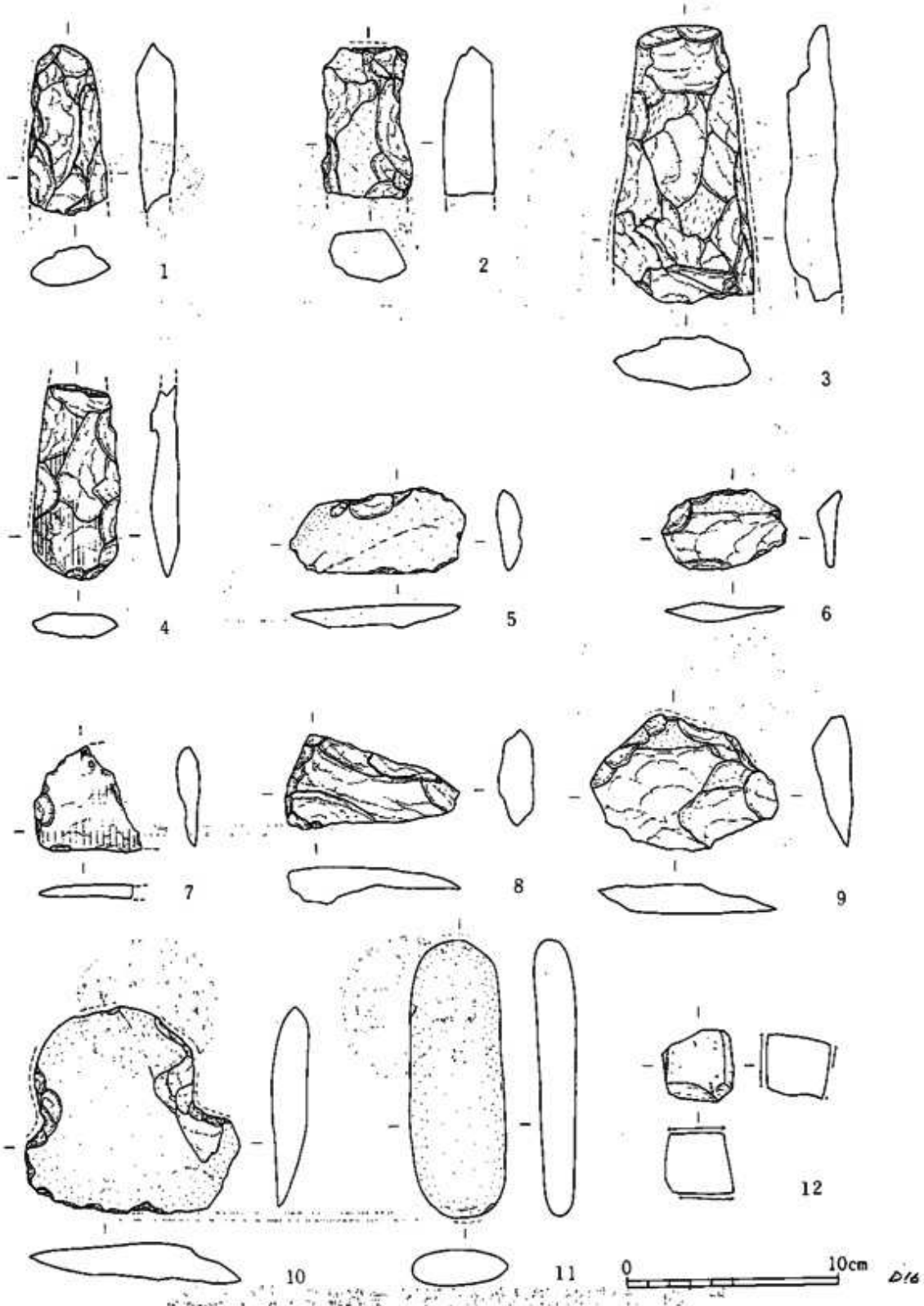
第13図　溝址21～23出土遺物（1～7 溝21　8～17 溝22　18～22 溝23）



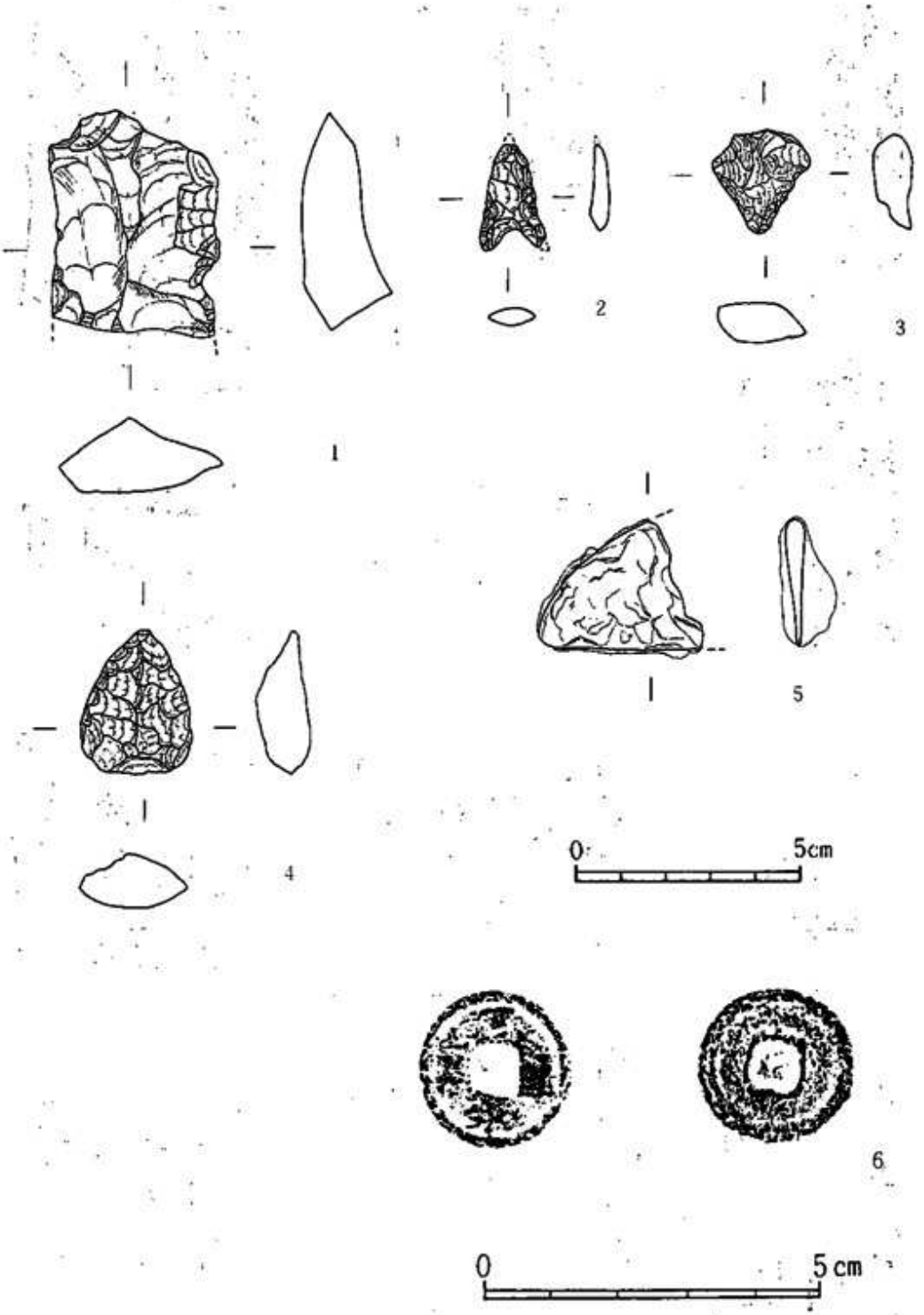
第14図　溝址23～25、溝状址2、柱列址2出土遺物（1～2 溝23　3～7 溝24　8～10 溝25　11 溝状2　12～14 柱列址2）



第15図　遺構外出土土器



第16図　遺構外出土土器



第17図　土坑165、遺構外出土石器、金属製品（1・2 ド165　3～6 遺構外）

写真図版

図版 1

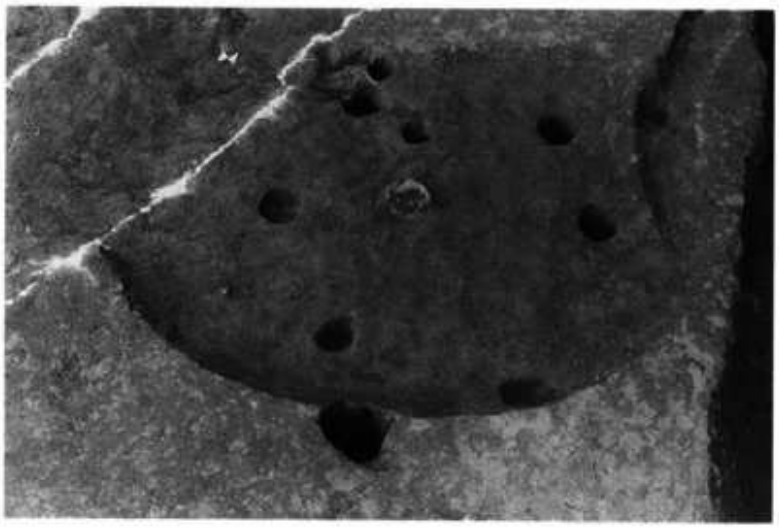
遺構分布状況

同　上

遺構分布状況

同　上

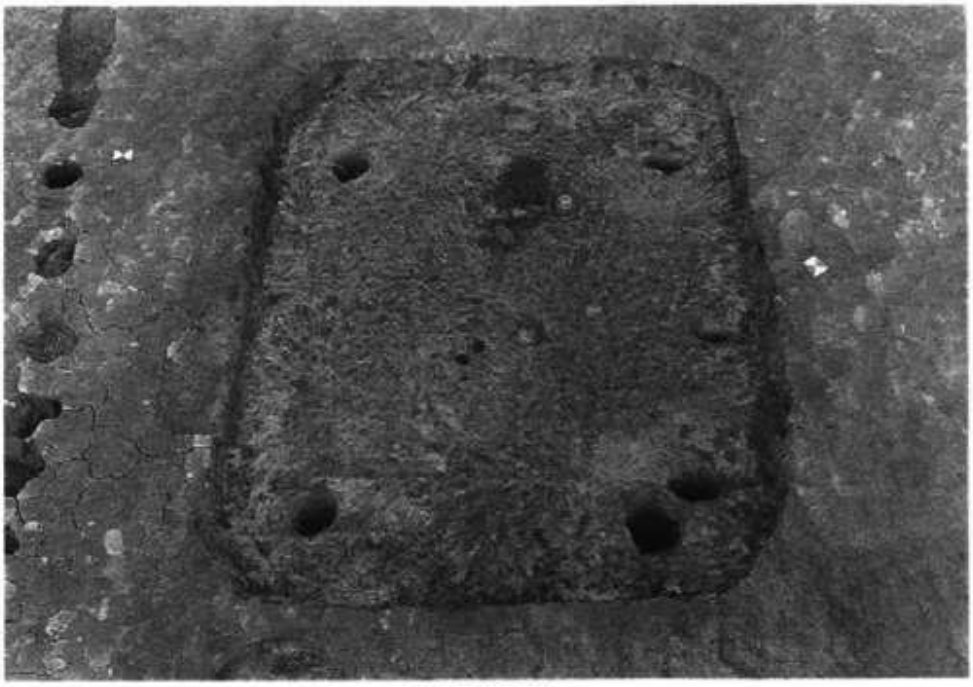
図版 3



103号住居址

同炉断面

102号住居址



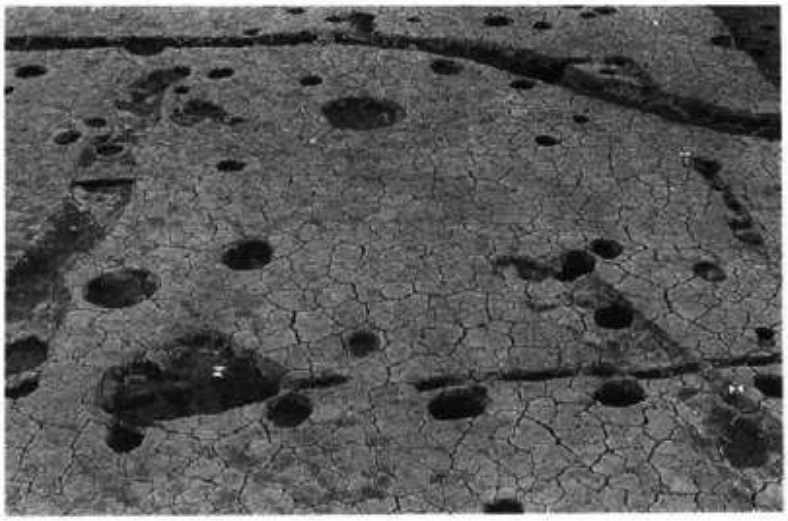
104号住居址

掘立住建物址 9

図版 5

土坑群

同　上



囲溝址 5

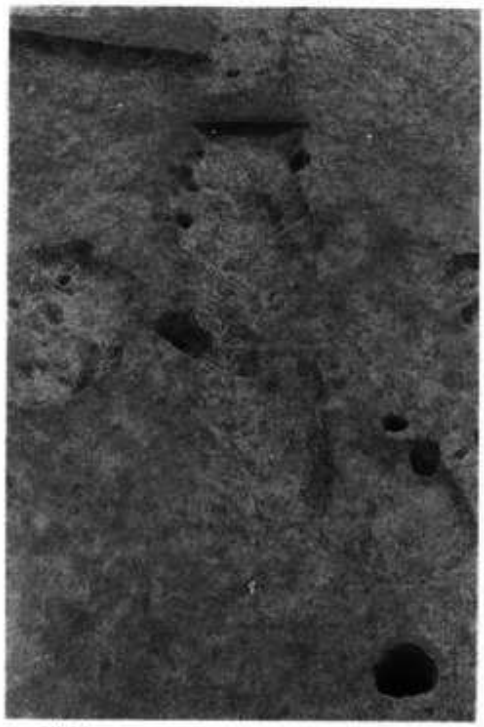
溝址 3

同　上

図版 7

溝址 3

溝址 4



溝址 5

溝址 6

溝址 8

溝址23

柱列址 2

柱列址 2

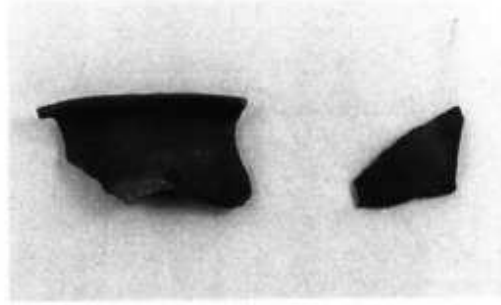
図版 9

集石 3

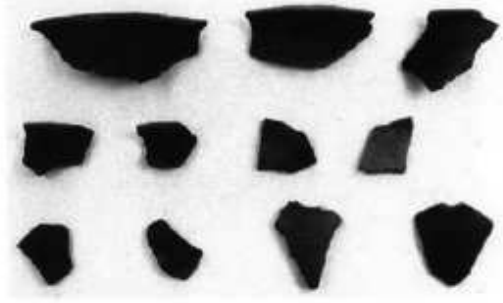
同断面

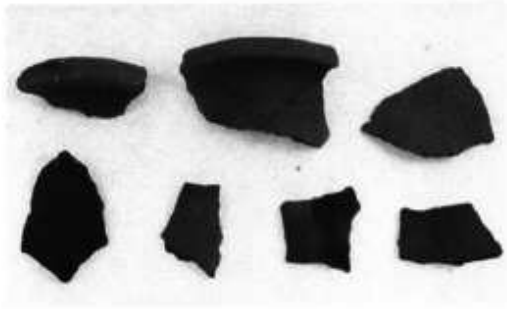
103号住居址

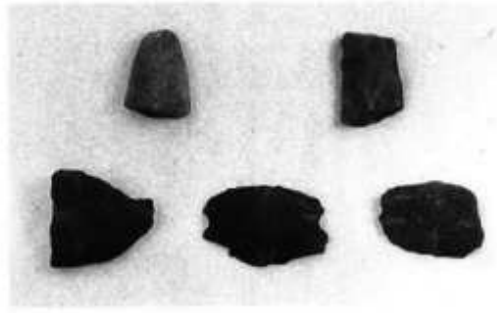
101号住居址



101号住居址

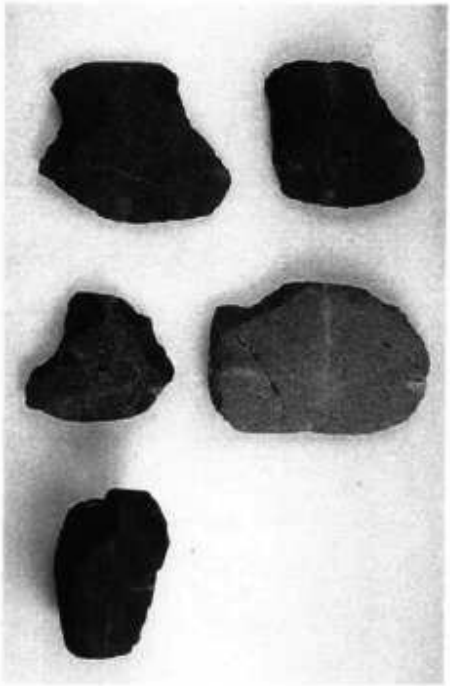






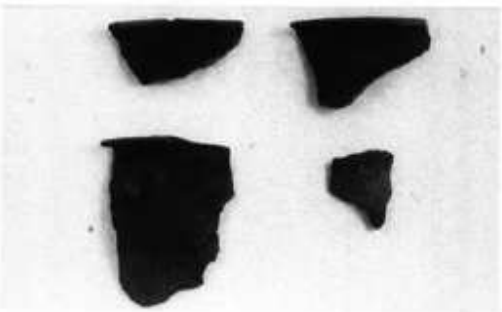
102号住居址

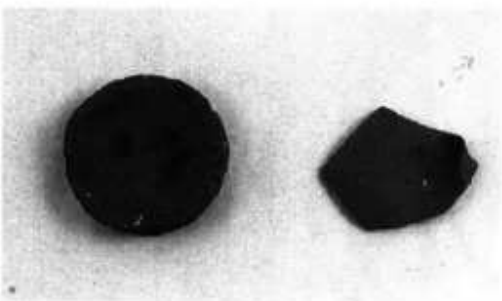
図版11



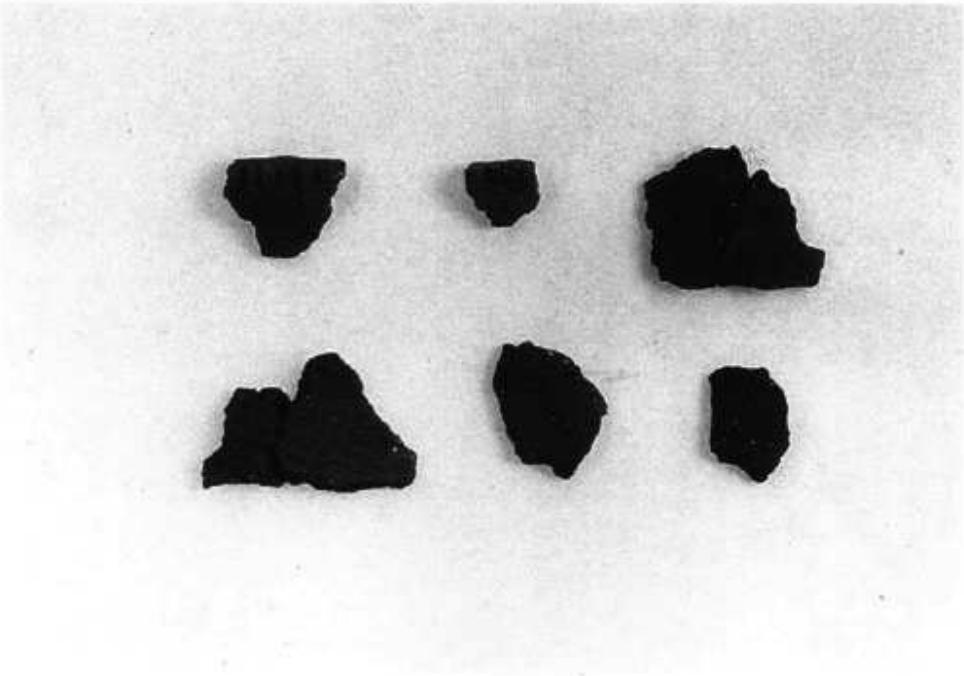
102号住居址

104号住居址

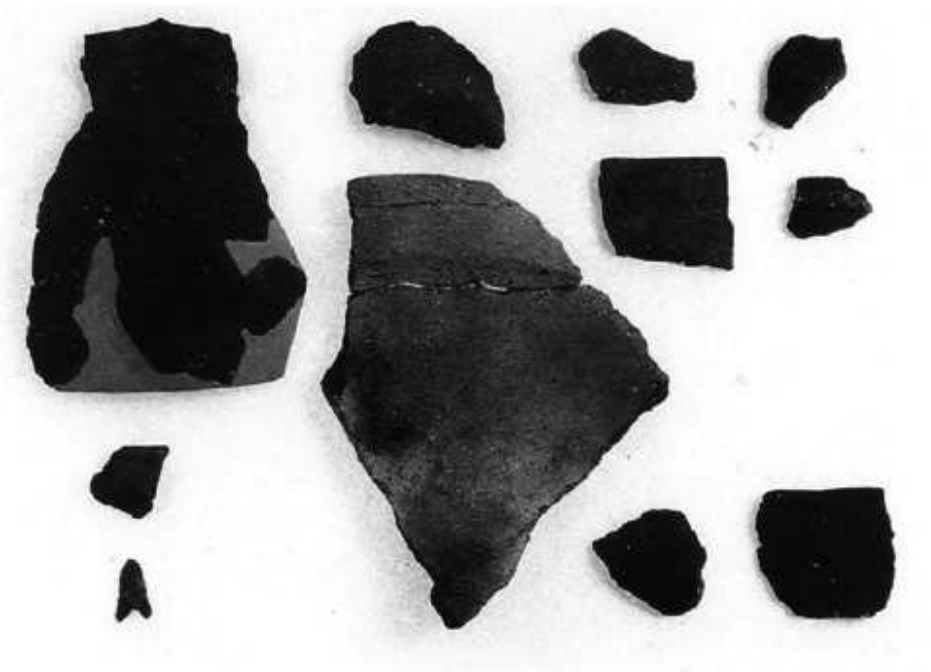




104号住居址

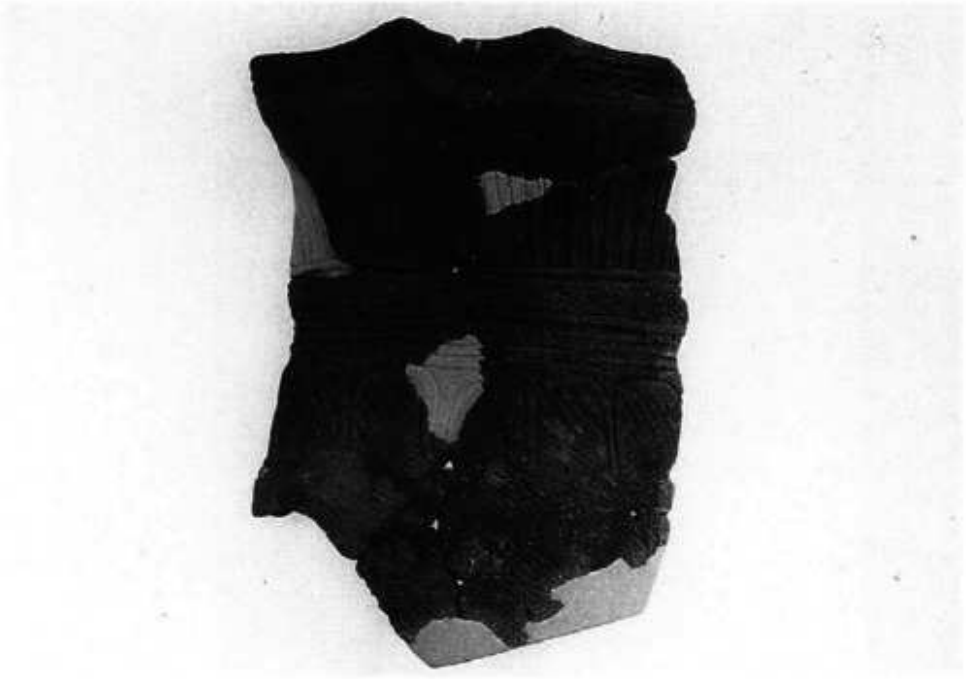


土坑165

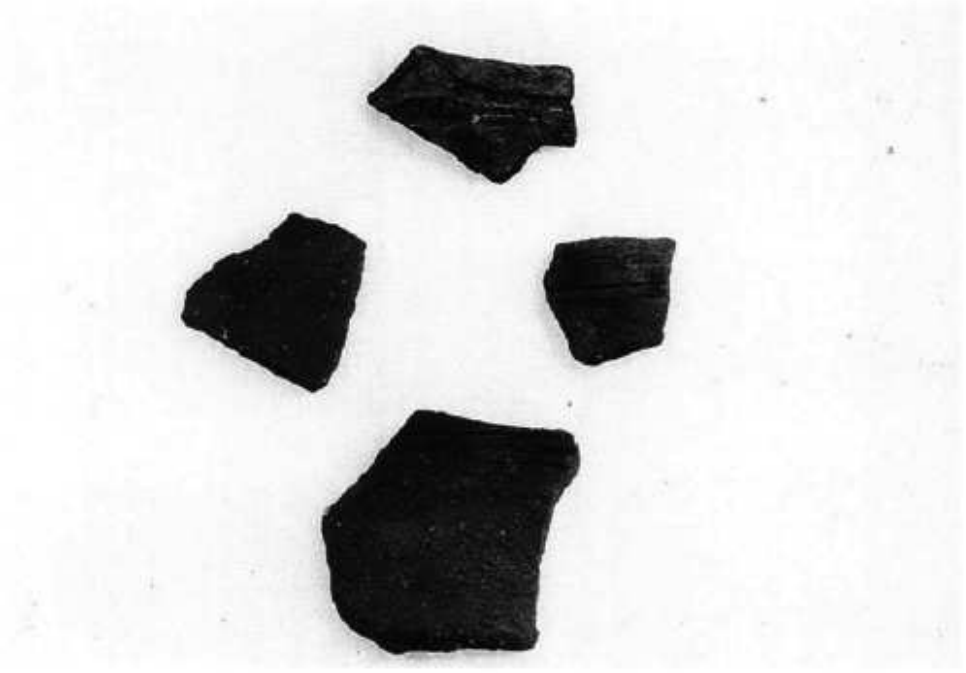


土坑165

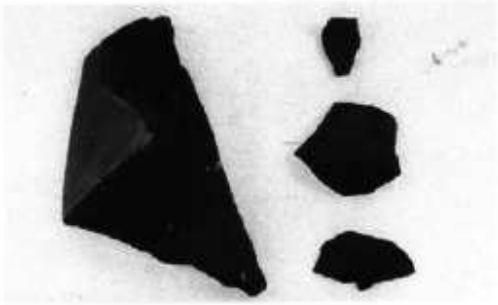
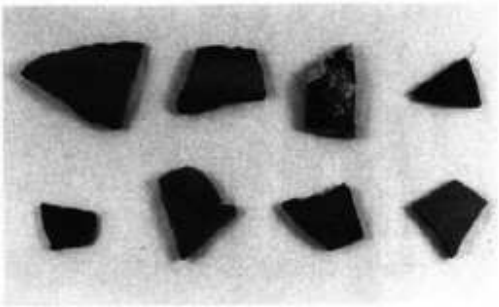
図版13

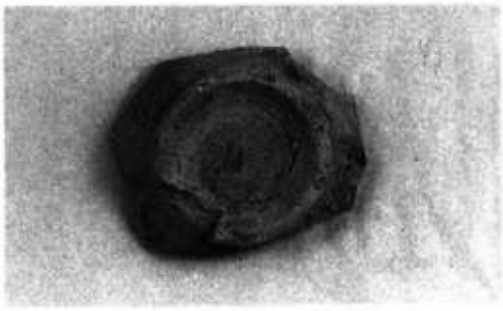
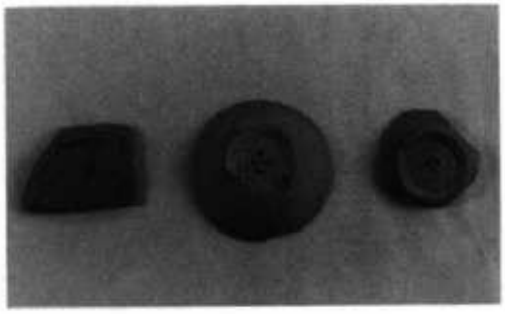
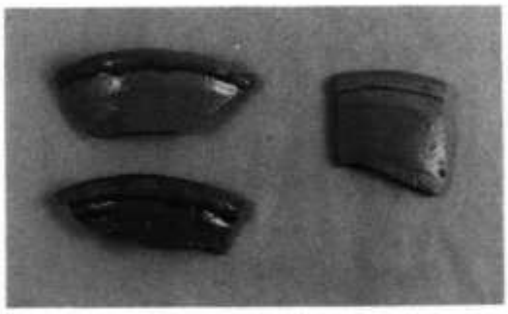
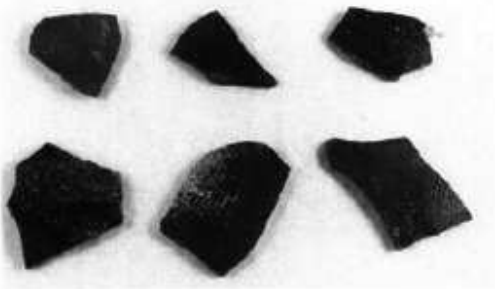
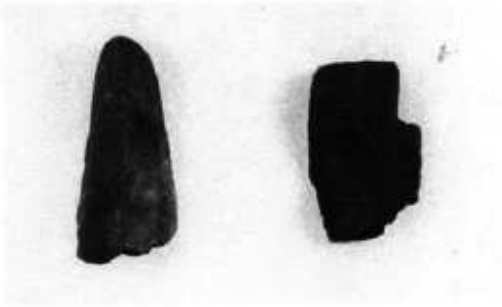


土坑171



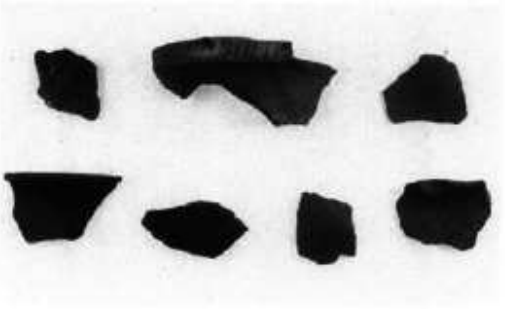
土坑171

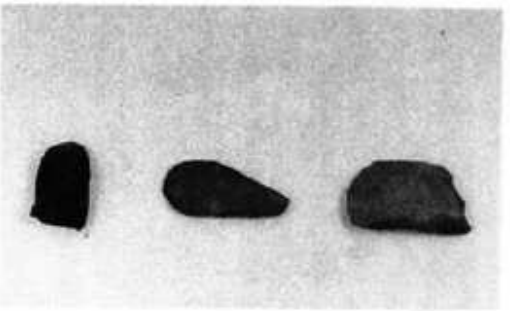



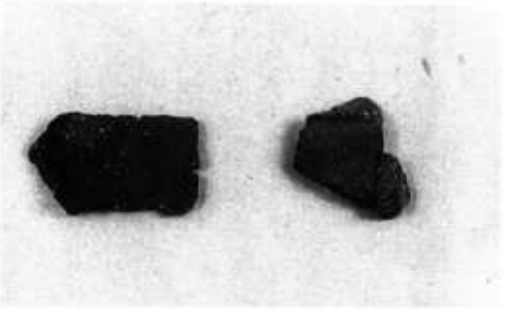
溝址 3

図版15



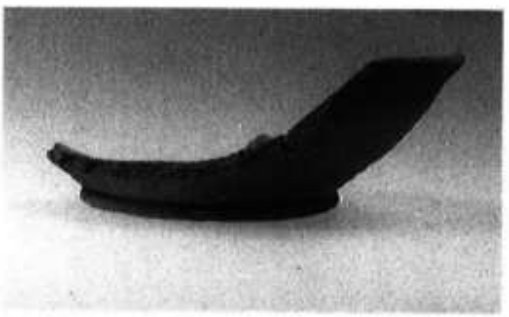


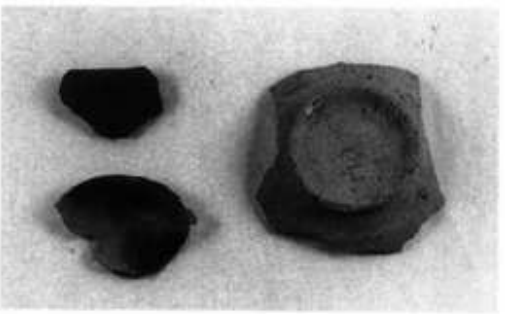
溝址 8



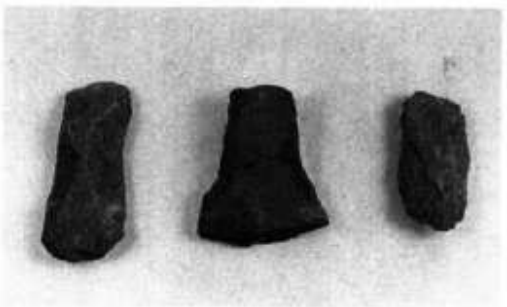
溝址 9

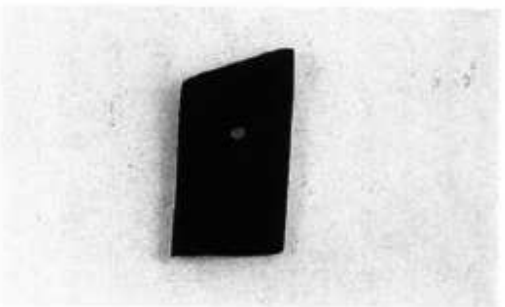
溝址11



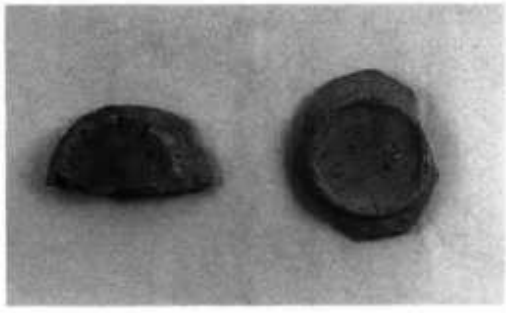
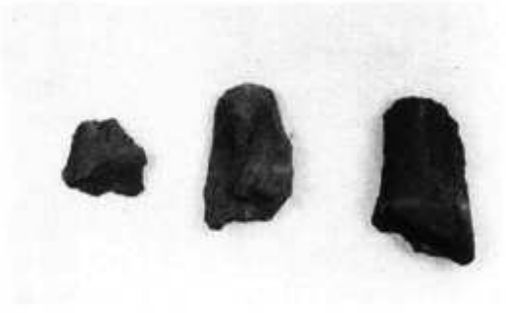


溝址11

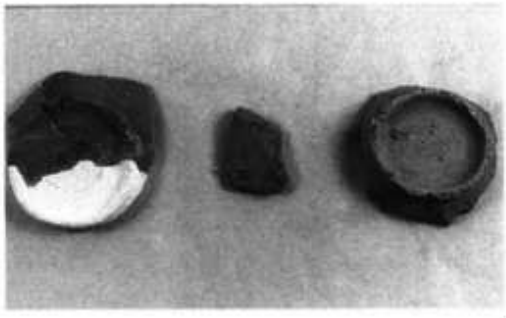
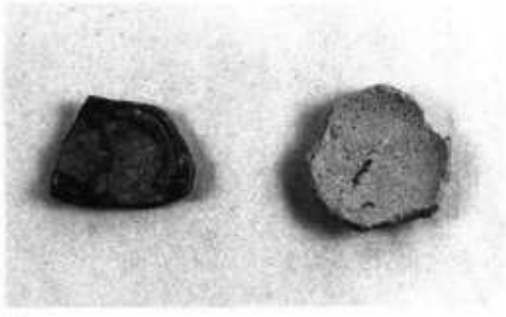




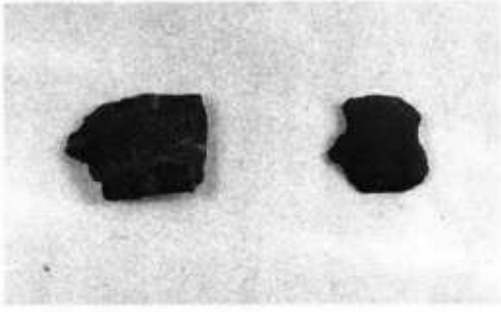
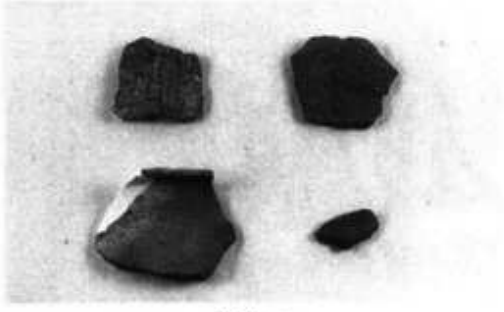
溝址11・12

溝址21

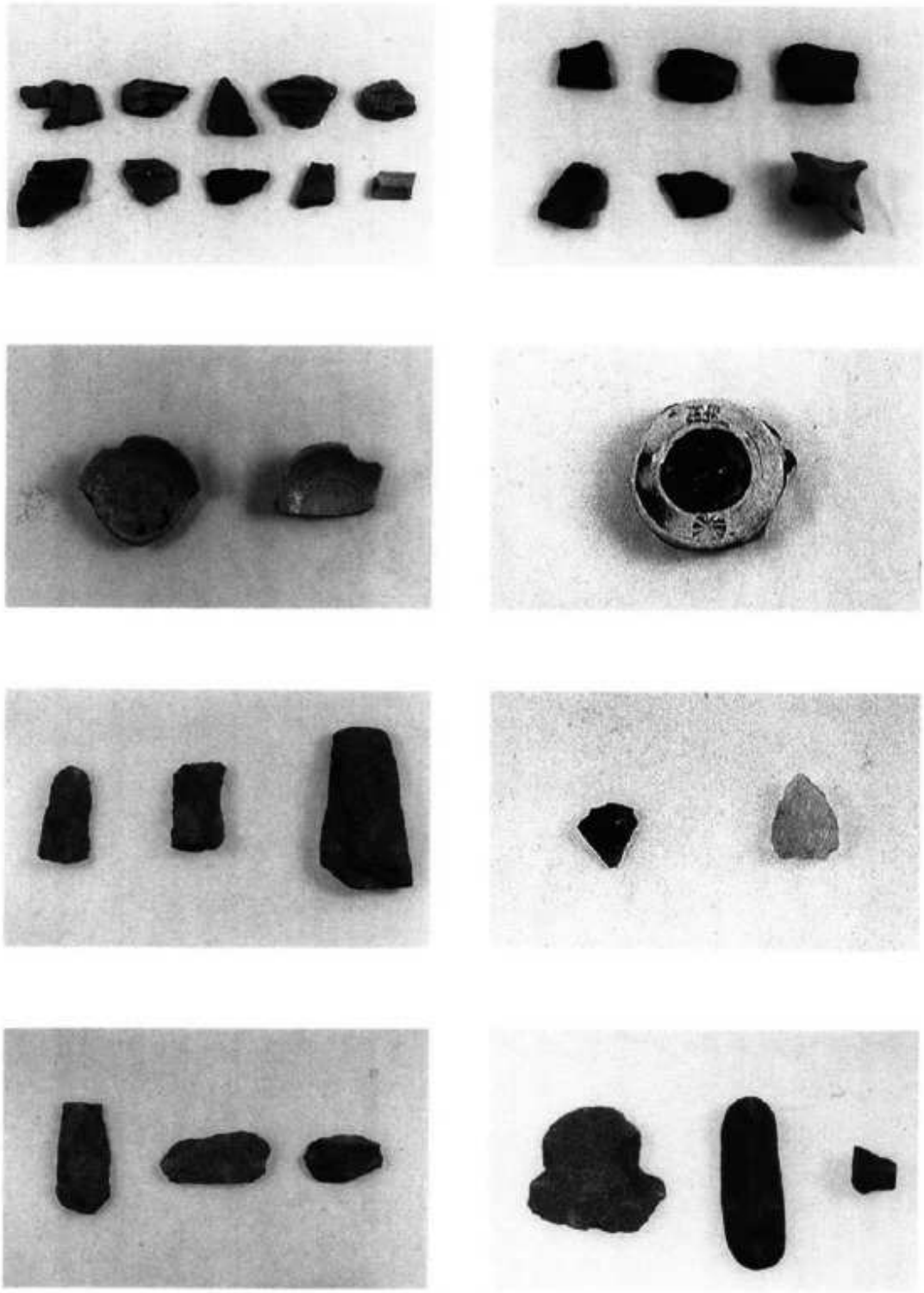
溝址22

溝址22　　溝址23

溝址23

図版17



遺構外出土遺物

重機作業風景

同　上

図版19

発掘調査風景

同　上

職場実習風景

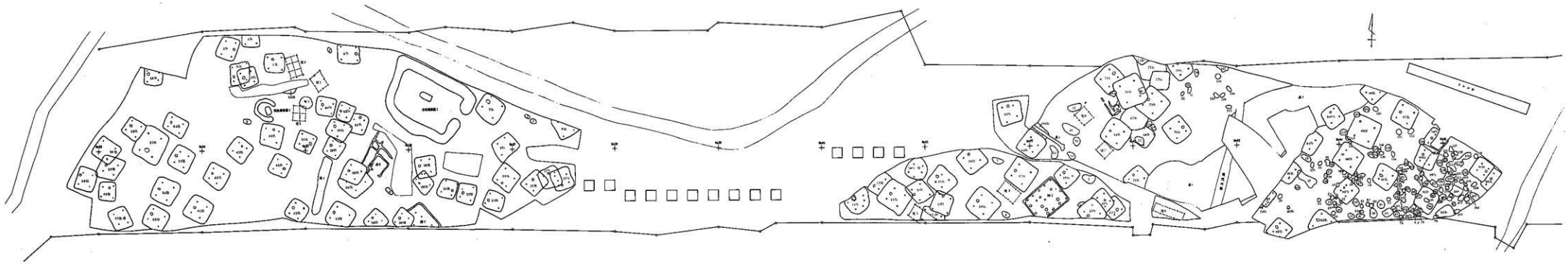
殿原遺跡

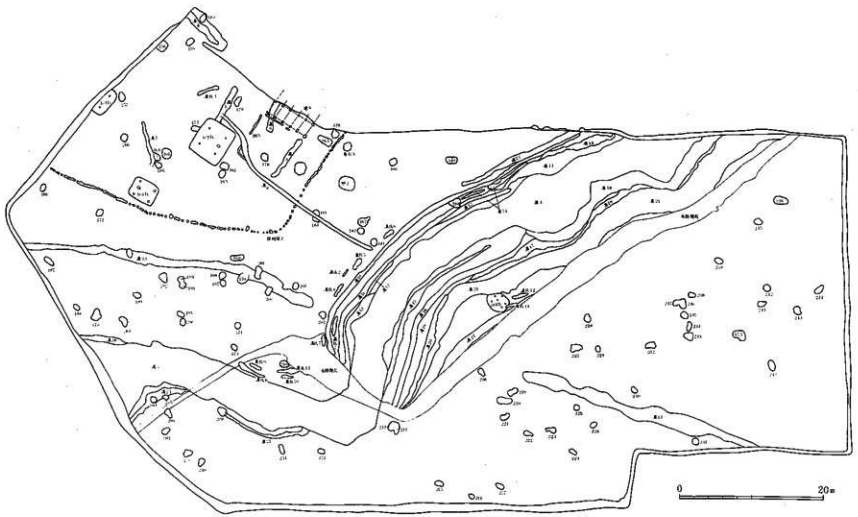
店舗建設に先立つ埋蔵文化財
包蔵地緊急発掘調査報告書

平成4年3月　発行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

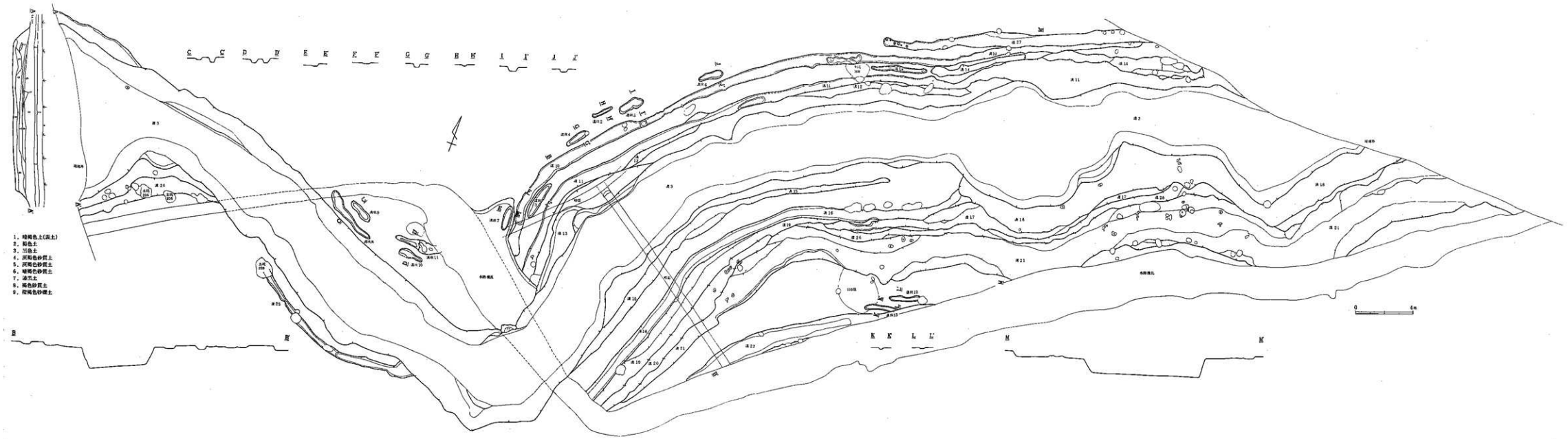
印　　刷　飯田共同印刷株式会社



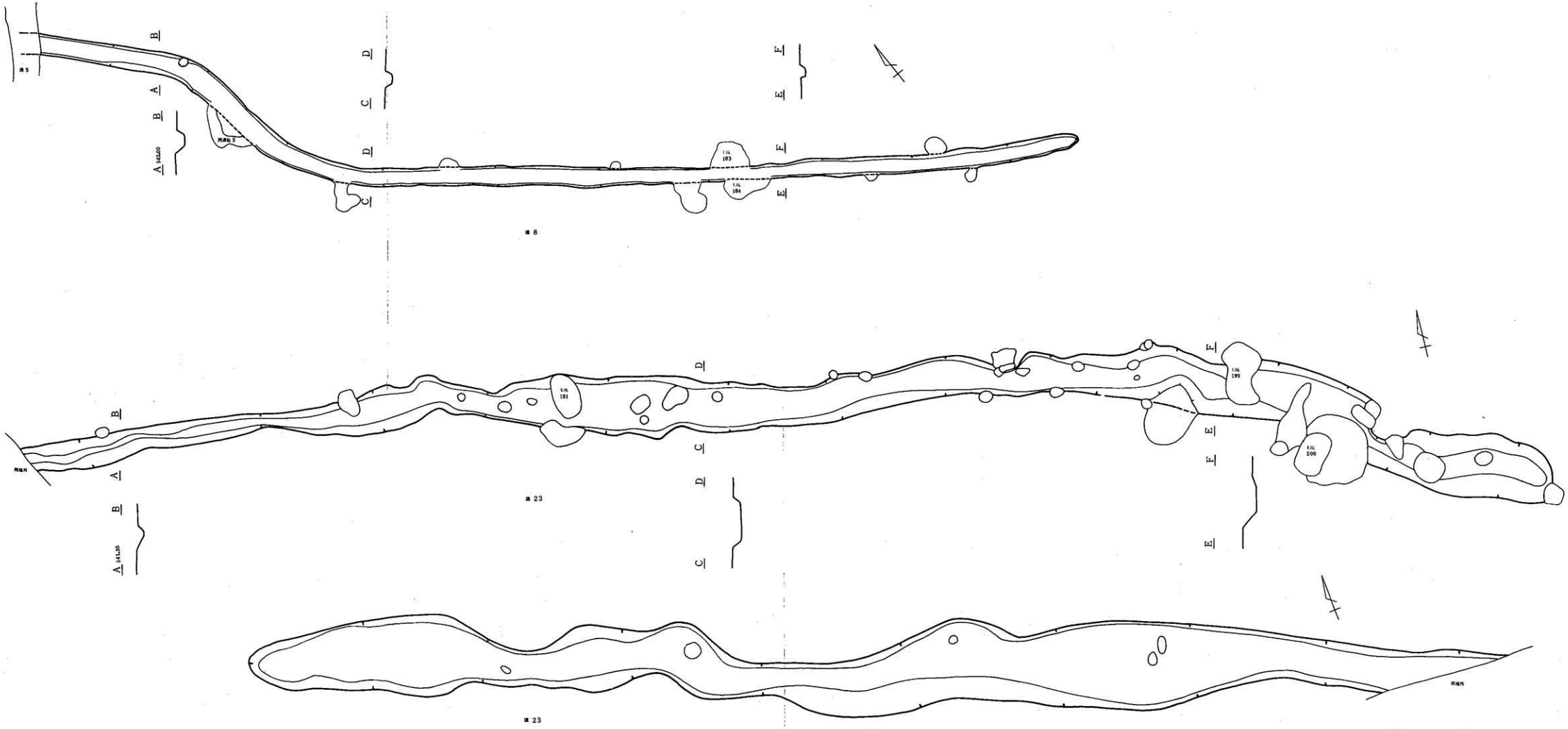


住――住居址
数字のみ――土坑
溝――溝址
溝状――溝状址
建――建物址
囲――囲溝址
竪――竪穴状遺構

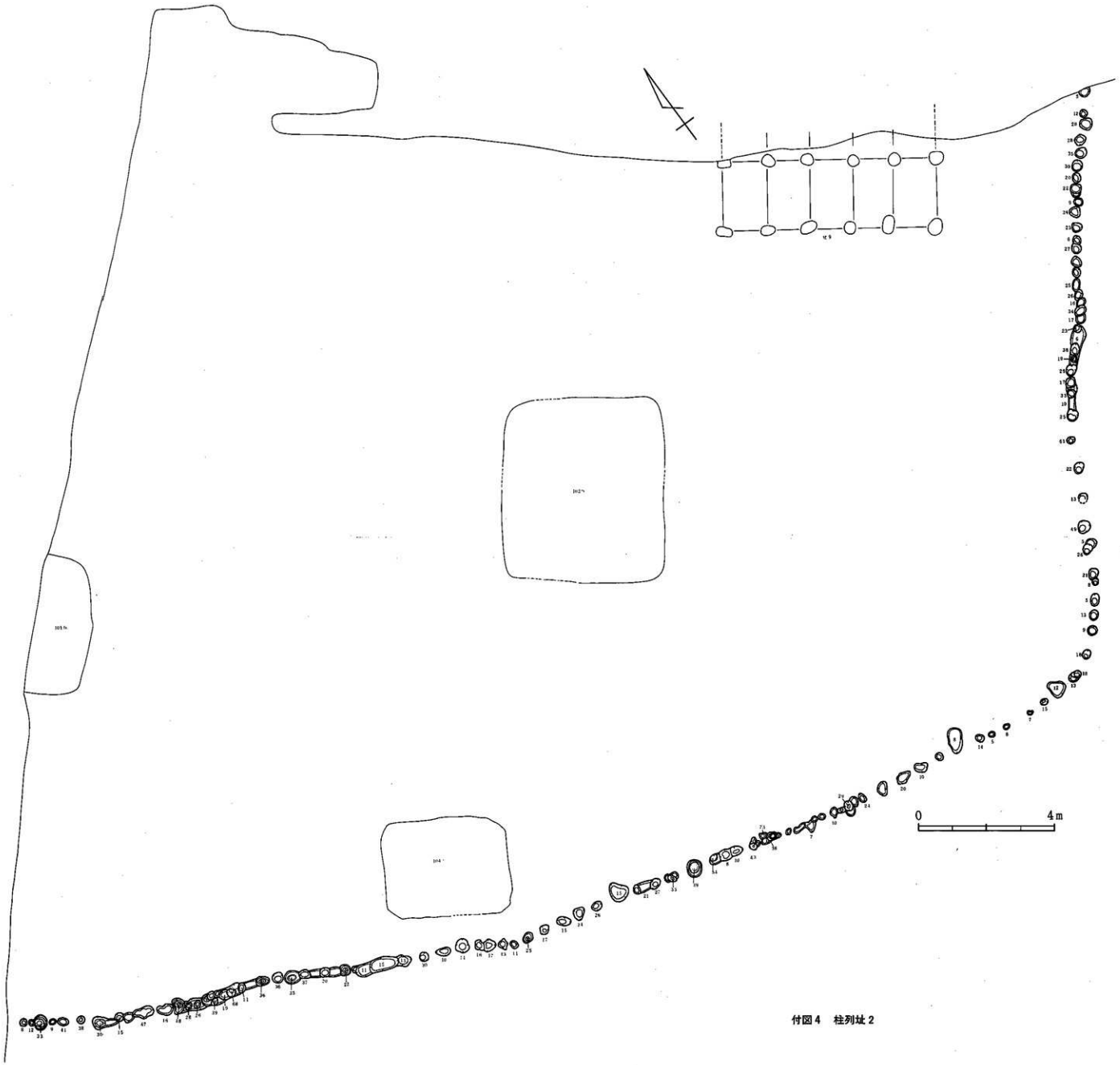
付図1　殿原遺跡遺構全体図



付図2　溝址3・10～22・24～27，溝状址2～13

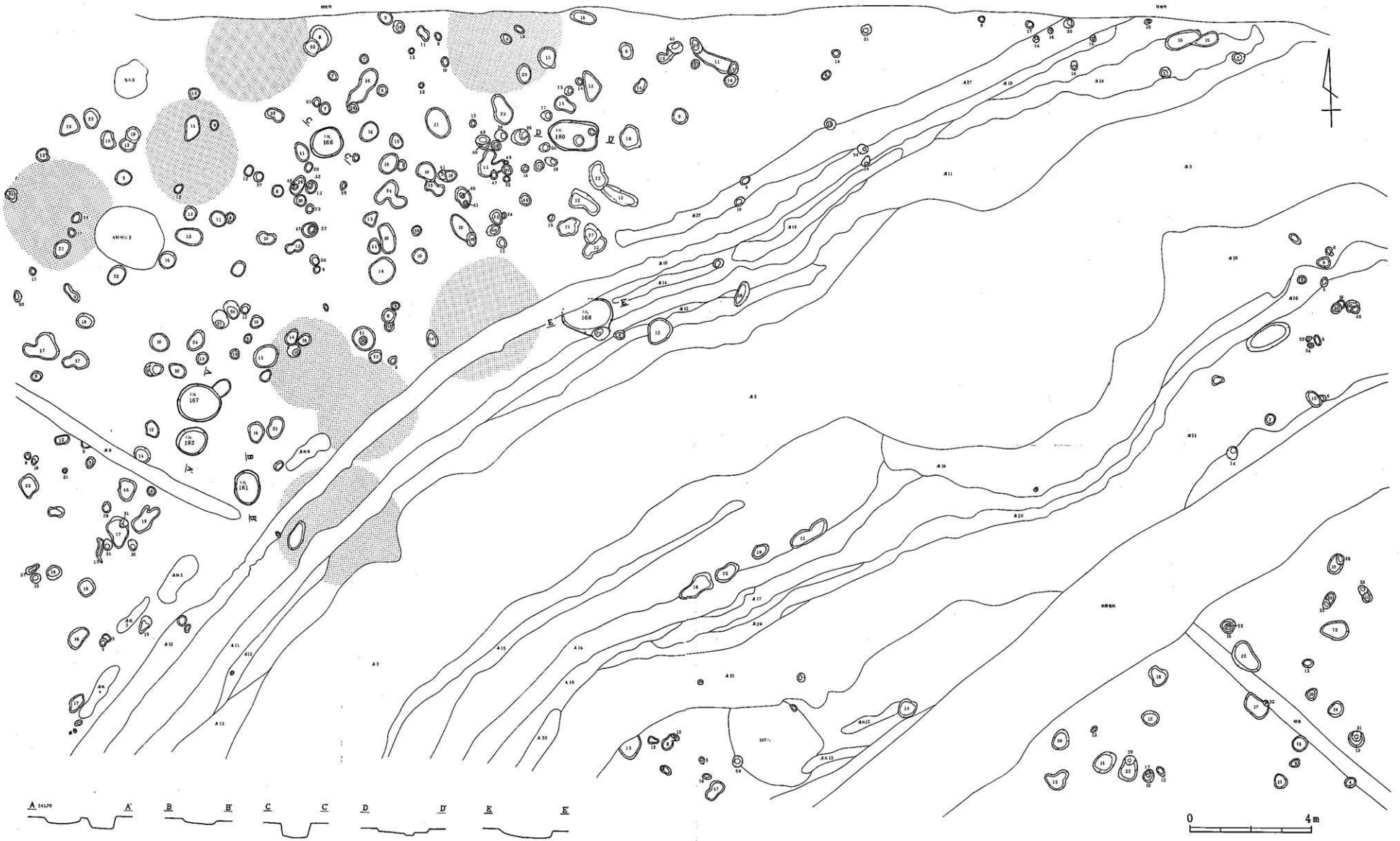


付図3　溝址8・23



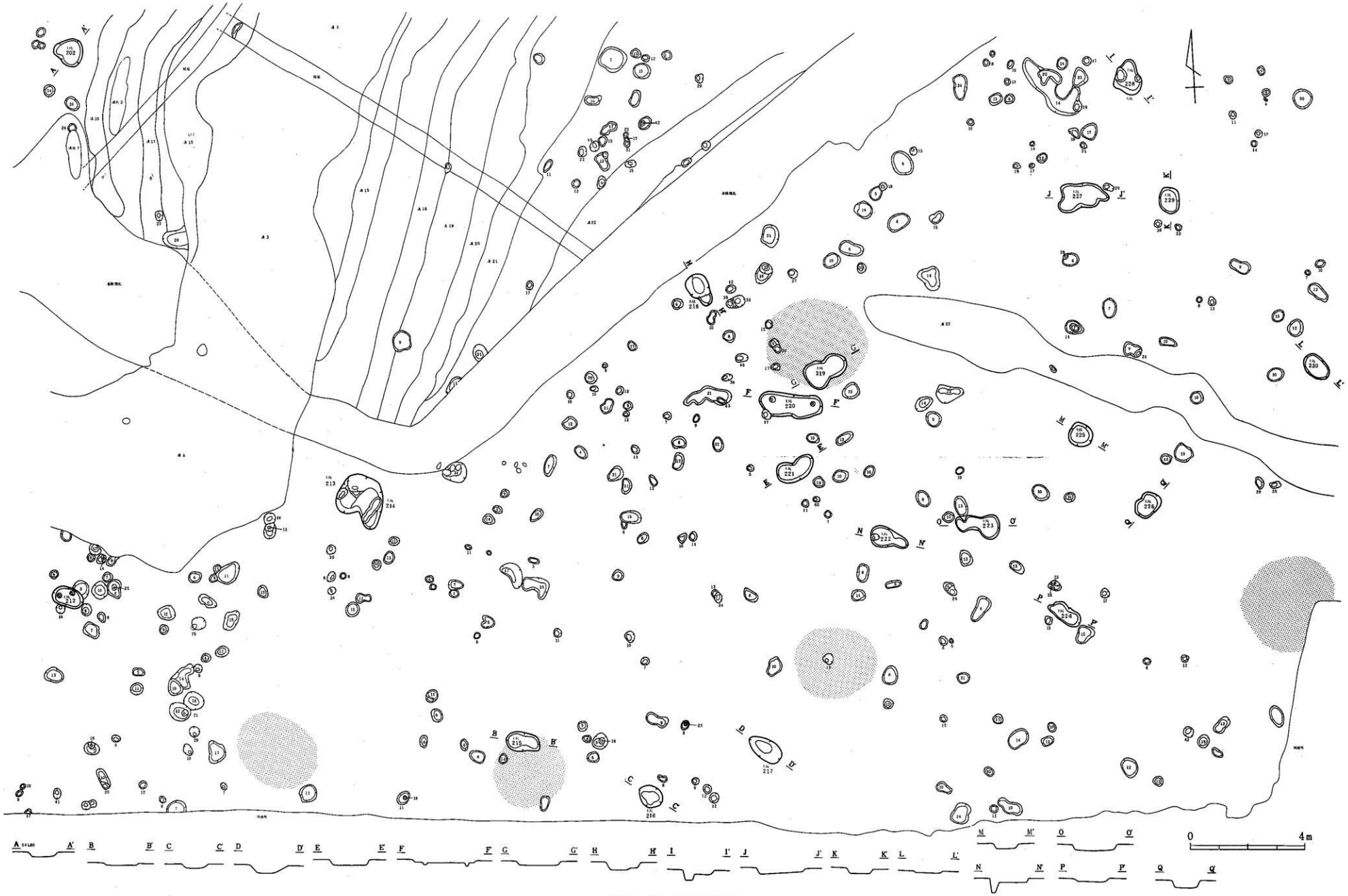
付図4　柱列址2

付図5　土坑・周辺柱穴平面図(1)

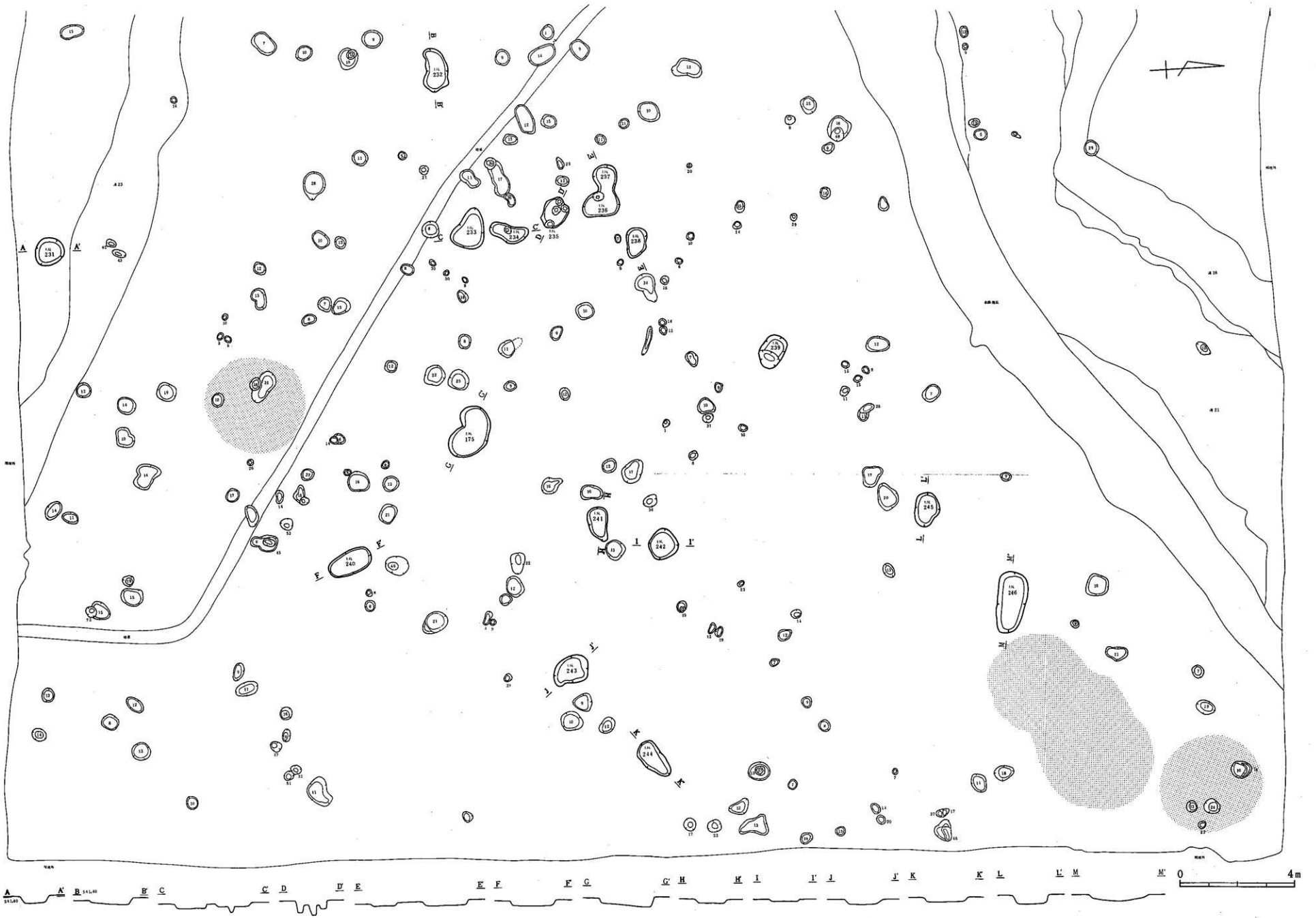


付図6　土坑・周辺柱穴平面図(2)

付図7　土坑・周辺柱穴平面図(3)



付図8　土坑・周辺柱穴平面図(4)



付図9　土坑・周辺柱穴平面図(5)